
神々の庭のクロニクル

てるよふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の庭のクロニクル

【Nコード】

N3454W

【作者名】

てるよふ

【あらすじ】

自らの存在意義を見失った少女、さえつき 冴月輝夜と、その出生に秘密を抱き、途方も無い魔力を秘める少女、みかくら 御神楽紫苑。二人の少女は主従という間柄だったが、その関係は世に言うそれとは少し趣が違っていた。彼女たちを中心とした、自分と、そして世界の謎に迫る物語。

1話・2話は友人のサイトに掲載していたものを加筆訂正の上投稿しています。

(9/5 あらすじ改訂 章編集のため各話タイトル改訂 9/2

4 あらすじ改訂ノタイトル改題)

序 桜の森の中で

そこは、村から少し山を分け入ったところにある泉だった。清せい冽れつな水がこんこんと湧き出でるそこは、村人たちの喉のどを潤うるし、作物に恵みをもたらす、まさに命の泉だ。村人たちは感謝の念からここに小さな社やしろを建て、きつと存在するに違いない、自分たちに恵みを与えてくれる泉の神を祭った。

そんな、どこにだってありそうな、何の変哲も無い泉のかたわらの石に、今は齡十ほどの少年が腰掛けている。

彼は何をするでもなく、所々苔こけむした石の上に半刻ほどの間座つて、ぼうつと目の前の景色を眺めていた。

季節は初春、鳥たちが歌を詠い、木々の隙間からは柔らかな日差しが降り注ぐ。泉は雪解けで水量を増し、涼やかな音を立てて村へと続く小川に水を注ぎ込む。その向こうでは朱が剥げかけて煤けてしまった鳥居と、柱が少し歪んでいる社が、木立の間から姿を見せている。

彼がこんな場所にいる意味は、たいした事ではない。

きつかけは、ほんの些ちか細なこと。いつもの調子で始まった親との口喧嘩げんかが怒鳴り合いになり、つい勢いで家を飛び出した。よくある事だ。その後、しばらく村の中をぶらついたが、どうにも居心地が悪い。そこで、ほとぼりが冷めるまでこの場所に居ようと思ったのだ。

一緒に遊ぶ仲間たちには馬鹿にされるので言わないが、彼はこの静謐せいひつな神域で、いつも変わらない水音と、季節ごとに変化する種々の音を聴き、そして風景を眺めるのが好きだった。

そろそろ、戻っても大丈夫だろうか。もしかしたら、自分が戻らない事で不安になった両親が探しに出る頃かもしれない。

なににせよ、一発殴られて、謝って、頭を撫でられて、それで終わりだ。

そんな事を考えながら、彼は腰を上げた。

かさり、と言う音。

自分が立てたものではない。ふと、月に一度やってくる行商人が、最近は何物も減った代わりに、物の怪が昼間から出るようになった、と言っていたのを思い出した。まさかこの場所か、と思っただが、何とも言えぬ寒気が背中を駆け上がってゆくのがはつきりとわかって、彼は急にこの静寂が恐ろしくなった。

また かさり、という音。

ぞくり、と肩が震えた。冷たい汗が全身から噴き出し、夏の木漏れ日が降り注ぐ中、彼の足はまるで真冬に放り出されたかのようにがくがくと震える。彼はこの場から離れようと懸命にそれを動かしたが、もつれた足が木の根に絡まって彼は前につんのめり、意に反して彼の身体は宙に投げ出された。

一瞬の浮遊感、そして足首に何かの感触。

覚悟して目を瞑っていた落下と激突はいつまでも起こらず、代わりに脚が引つ張られる痛みとさらなる浮遊感を得た彼は目を開き、恐れと戸惑いが入り混じった表情をしてあたりを見回す。

そして認識した、自分は今宙に浮いていると。

「え……………」

漏れる声には狼狽が色濃かったが、それでも足首に巻き付いている、固く、節くれだった長いものが自分を宙にぶら下げているという事くらいは理解ができた。それが何なのかは理解の埒外だったが。

風もないのに、木々の葉がざあと揺れる。

それが何か、とても恐ろしいことのように感じて、彼は蒼白な顔で悲鳴をあげた。

懸命に空中でもがいて、足に絡みついたものからなんとか逃れようとすると、それは非常に強靱で、千切れも緩みもせず、かえって締め付ける力が強まるばかり。さらに木々の隙間から長く細い何かが突然伸び、宙吊りの彼の手を絡め取った。今度は彼にも、そ

れが何かたやすく分かった。

枝だ。何本もの細い枝が絡み合って、まるで縄か、腕のようになっていているのだった。辺りを見回せば、同じような物が何本と彼に向かつて伸びてきていた。おぞましい光景に、彼は意識を手放しそうになるが、本能的に意識される死への恐怖と、抵抗の意思が彼の気を保たせていた。

……それは典型的な樹妖だった。年経た老木が濃すぎる^{エーテル}霊子に中てられて原始的な意思を持った妖物で、夜の間動き回り、昼には周囲に広く放射状の根を張って獲物がかかるのを待つ。獲物は周囲の木々を操って作った腕で本体の場所まで運び、そこで獲物の身体から^{エーテル}霊子を吸うのである。

少年の全身を絡めとろうと迫ってくる、茶色く節くれ立った硬い腕。彼は魔手から逃れようと、目から涙を零^{こぼ}して泣きじゃくりながら、必死に拘束されていない方の手足をばたつかせるが、無為なことだった。四肢から、次第に力が抜けてゆく。諦念^{ていねん}に支配されつつある意識で、彼は全身に絡みついた腕が自分を何処かへ運んで行くのを感じていた。

……樹妖は、獲物を捕らえている間はそちらに注意が向き、周囲に対して無警戒になる。

ゆえに、その樹妖は知らなかった。樹妖が少年を捕らえる瞬間を、たまたま目にした人間が、二人存在したことを。まして、そのうち一人が、自身にとってきわめて剣呑な存在であることなど。

「いま助ける」

遠くから風が運んできた声で、少年ははたと目を醒ました。見上げれば木漏れ日が降り注ぐ春の森の情景が広がり、その中でこの長閑な情景にはおよそ似つかわしくない褐色の蝕腕が不気味にうごめいている。

四本あるそれらの先端は、少年の四肢を固く捕えて離さない。

今まさに、自分は化け物の餌になりかけているのだ、と、少年はすぐ解した。

しかし、不思議と恐怖はない。目覚める瞬間に聞こえた声が、奇妙な安心感を彼に与えているのだった。誰の声かも、そのことが本当かもわからないというのに。

音が、した。下草を掻き分ける誰かの足音と、金属が擦れる耳障りな音と、そして、なにかが空を斬る音。

同時に、少年は見た。草むらの中から飛び出してきた誰かが、跳躍の頂点で陽光に煌く刀を抜き放ち、大上段に構えたそれを一直線に振り下ろす姿を。

刹那、乾いた音を立て、少年を拘束していたものが根元から切り落とされた。

「わっ!?!」

受身を取り損ね、思い切り尻餅をついてしまう。痛む腰をさすつていると、「大丈夫か」という言葉とともに、すつと手が差し伸べられた。はつとして見上げれば、視線の先には、まだあどけなさを残す、美しい少女の顔がある。

少年よりも幾分か年上だろうか。艶やかな黒髪を後頭部でまとめた、いわゆるポニー・テールに、端正な目鼻立ち。人間の耳のかわりに、短い毛で覆われたものがあり、上衣の裾からはふさふさとした尻尾がのぞいている。見下ろす藤色の瞳の視線と自分のそれがかちあって、思わず少年は赤面した。

「立てるか？」

「こ、こんなん平気だっ」

続いた問いに、思わず彼は少女の手を振り払って飛び起きてしま
う。一瞬、悪い事をしたかな、とも思ったが、当の少女はそれ
を気にした風もなく、「そうか、なら良かった」とだけ言っ
て、旅人風の装束に包まれた身を翻した。

そこに聞こえた かさり、という音。少年は反射的に身をこ
わばらせたが、少女は恐れはしなかった。代わりに左手に持った
白刃を油断無く構え、背後の少年に声をかける。

「動けるか」

「ちよつと……無理、つばい」

足がすくんで動けない。少年はよろよると地面に膝をついた。

全てをこの見知らぬ少女に任せるしかない、情けない自分を齒痒
く思いながら。

「なら、そこでじつとしていたほうがいい」

木々が、不気味にざわめく。森全体がうごめいているような錯
覚の中、少女の周囲だけは凪なぐような静けさを保っている。ゆっ
くりと息を吸い、眼を閉じて、集中しているように少年には見えた。
その目がかつと見開かれたとき、少女の気配は静から動へと転ず
る。

「はッ！」

気合と共に、銀光が三度立て続けに奔った。空を断つ音に続い
て、木を砕く乾いた音が連続して響く。さらに、後方から少年を
狙っていた蝕腕を返す一刀で叩き斬り、彼女はふと表情を崩した。

「そつだ、まだ名乗ってなかったな ちっ」

名乗りかけたところだに気が付いた彼女は舌打ちし、前方
から襲い掛かってくる、刃と化した木の葉の群れを、大振りの生み
出す剣圧で一息に薙なぎ払った。

「輝夜。 冴月輝夜だ」

少年の目の前の肩越しに投げかけられた声は、凜りんとして鋭かった。

覗く頬には一筋の傷が走り、赤いものがつつと垂れ始めている。

「俺は……」

異性に名を問われて名乗る気恥ずかしさ、窮地きゆうちにあつて何もできないもどかしさで頭がいっぱいになりながらも、少年は声をひねり出そうとした、が

「危ないッ！」

警告の声に、彼は未だ力が残っている腕をバネにして、後方に飛び退いた。それに輝夜が続き、直後、鞭のようにしなる枝が振り下ろされ、二人が半秒前まで居た場所を打ち据える。

続けてもう一度振り下ろされた枝を、白刃が断ち斬り、さらに輝夜は追撃とばかりに、未だ姿を見せない妖樹の本体が居るであろう森の奥に向けて、剣気の刃を放つ。

「届かんか！」

枝葉に阻まれ、徐々に勢いを失う刃を見て、悔しげに舌打ちをする少女。敵の攻撃はことごとく防ぎ、しかし敵に決定打は与えられない状況。その様子からして、彼女に疲労ちくせきが蓄積ちくせきしてきているということもわかった。

「だ、大丈夫なのかよ」

「正直に言つと、このままではまずい」

返ってきた答えは予想通りのもので、少年が感じたのは、落胆というより納得だった。

「逃れるには、奴の手の届かないところまで一気に走るしかない」

「でも、それじゃあ、輝夜は！」

「心配するな。なんとかなる……なんとかしてくださる。だから今は、とりあえず立って走れ！」

言つて、いつのまにか少年の後ろに回っていた輝夜は少年の背中を軽くはたいた。慌てた声を上げて転がるように走り出す少年の後を、彼女は攻撃の来る方向に正対したまま、後ろに飛び退きながら追つ。

「頼みます……！」

呟いて、彼女は一瞬だけ、森の入り口の方向に視線を向けた。

「やっぱり、輝夜一人じゃ手に負えないか……」

苦笑気味の声。泉の水を弄んでいた白い手が引き抜かれ、そのまま髪を掻き揚げる。

「そうね、後は任されてあげようじゃあないの」

不敵に微笑んで、彼女は腰掛けていた泉際の石から優美な動作で立ち上がった。

その視線の先には、此方向けて必死に走り続ける少年の姿。

「あと少し、あと少し、あとすこし、あとす、すこし……!!」

徐々に言葉の体をなさなくなってくる声。うわごとのように

呟きながら、少年はひたすら光の見える方に向かって走り続ける。

「……!!」

森を、抜けた。一気に視界が開けたそこは、清らかな水がこんこんと湧き出す泉、古びた社、煤けた鳥居。最初に少年が居た場所だ。

「戻って、きた……」

しかし、ここすらも安全ではない。呼吸を整えてまた走り出すとして、ふと彼は気が付いた。泉のほとりに佇む、長身の少女の存在に。

「あ」

思わず、ぽかんと口を開けて固まってしまふ。少年の眼底に刻み付けられた像、少女の容姿は、そうさせるまでに印象的だった。その少女が、少年の方を向く。

腰まで届く、白に近い銀色をした繊細な髪。淡雪のように白く美しい肌。鋭角的な顎の線の上には紅色の唇が半月型の笑みの形で存在し、すっと伸びた鼻梁のやや上方の左右には、煌びやかな鳩血色の紅玉をはめ込んだかのような瞳が光っている。白地に群青色の垂れ布が目立つ道士服の、大きく広がった袖をばさりと打ち鳴らして、彼女は一步を踏み出し、そして口を開いた。

「輝夜ッ！」

「紫苑様あッ！」

鋭く飛んだ呼び声に、答えるもう一つの声。

「後はお任せ致しますッ！」

ざつ、と木立の中から飛び出してきたのは輝夜。その背を追うように、刃と化した葉が飛んでくる。

「ふん」

少女は嘲るように鼻で笑うと、輝夜が自分の傍らに音も無く着地するのを見届けてから、右腕を高く掲げ、そして指を一つ、ぱちんと鳴らした。

「……………！」

少年は瞠目した。ただそれだけの動作で、女性の眼前に赤々と燃える炎が渦巻き、飛来する一群の葉を包み込んだのだ。

魔術。

意思の力をもって世界に干渉し、思うがままに現象を引き起こす脅威の技術。その、最も高度で、かつ攻撃的な発動形態のひとつを、少年は今まさに目にしたのだ。

「すげえ……………」

呆然とする少年を他所に、紫苑と呼ばれた女性は、その指先に小さな炎を纏わせて、ゆっくりと下ろしてゆく。

「まだ安心するのは早いわ、その君。本体が残ってる」

視線を森の奥に固定したまま、一言。

「君を襲ったのは、樹妖よ。聞いた事くらいあるんじゃない？
夜な夜なエーテルを求めてさまよう樹の物の怪の話」

「で、でも、ここは」

この泉の神様を祀^{まつ}った

「神域だ、つて？ そうね、でも魔術的な裏付けが一切無い。そ
んな、人がただ引いただけの境界線、先方に見れば知ったこと
じゃないのよ」

素っ気無く言う紫苑は、少年の頭を「馬鹿ね」と言わんばかりに
ぼん、とはたき、それから豊かな胸の下で腕を組み、傲然^{じょうぜん}と森の奥
から迫り来る『それ』を見据えた。

地面が揺れ動き、何か大きなものが動く気配が伝わってくる
森が今までになく大きな音を立てて鳴動した。

「来るわ」

がさがさという音に加えての地響きとともに、木々を掻き分け現
れたのは、血のように紅い蕾をそこかしこに膨^{ふく}らませた

「桜？」

裸の枝に、もう数週間もすれば咲き始めるであろう蕾をつけた、
桜の老木だった。根を足のごとく動かして歩いてきたのか、背後
の地面にはそこかしこに穴があいている。

「桜の下には死体が埋まっている。その血肉を糧として、桜花は
紅く美しく色付く……つまらない怪談話ね」

敵を前にして、彼女の態度は余裕に満ちている。妖桜は目の前
の獲物を捕えようとその枝を振り上げたが、それでも、紫苑は毅然
とそこに立っ

「捉えた。術式結界！」

声と共に、ぱちん、と、指が鳴った。

「！」

「下を向いて目をつぶれ！」

輝夜の鋭い声と時を同じくして、この泉の周囲の空間全体に等し

く、何か破けるような音が響き渡った。空間が引き裂かれる音。強引に作られた裂け目に紫苑の意思が魔力という媒体を通して介入し、その場所に彼女の望みを顕現させてゆく。それは、地面をちろちろと舐めるように這う、小さな炎となつて現れた。

「残念ねえ、咲けなくて」

妖樹は周囲の空気が自分への敵意と殺意に塗り潰されたのを感じ取り、根を蠢かせてこの場から逃れようと試みたが、しかしその時既に結界は完成していた。地を這う炎が描き出したのは、血の色の線が幾重にも重なって複雑な凶形を成した魔法陣。術は成った。魔法陣の結界は、妖樹を捕えて離す事はない。

「そうね、せめて……」

魔法陣が紅の輝きを発し始め、高まつてゆく熱は暴風を生み出し、下草や枯れ枝を巻き上げる。その中で紫苑は右手を天に向けて掲げ、口の端に不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「光の華にしてあげるわッ！」

そして、世界が変容する。発せられた言霊は式を揺り動かし、世界を侵し塗り潰す。赤々と輝く魔法陣は黄を経て白へとその色彩を変え、臨界にまで高まつた魔力はただ一点を指向して、今まさに解き放たれた。

極限まで高められた圧力が空気を一時に押し退ける爆音と共に迸ったそれは、炎と形容するには凄まじ過ぎた。仮にこの場に眼を開けてまざまざとこの光景を見つめる者があつたとすれば、この瞬間、その者はしばらくの間光を失う事になつたであろう。そう、それは光り輝く白い闇、とも呼ぶべきもの。

光には、熱が続く。魔法陣の裡という限定空間にあつて、それはさながら天を目掛けて昇る焰の龍のようだった。始原の炎がこの場に現出したかのような灼熱が、哀れな妖樹を瞬く間に包み込み焼き尽くし、そしてそれは断末魔はおるか身じろぎ一つする間も与えられず、その存在を終えることになった。

「ふふ……あつはははははははー！」

辺りには、ただ、魔術師の笑い声だけが響いている。

森に光が満ちてゆく中で、その純白の肌と白銀の髪、そして紅玉の瞳はそれにすら勝って輝き、彼女という存在を圧倒的な威力をもつて周囲へと刻み付けていた。

美しく、気高く、儂げで、苛烈^{かれつ}。

見るものに畏怖^{いふ}を抱かせずには居られぬ、自然という名工の手になる美しい彫刻が如き外見の下に、灼熱の獄炎渦巻く少女。

彼女こそ、応神皇国^{おうじんこく}が月読宮家^{つきよみのみや}の長女、御神楽紫苑^{みかぐらしおん}であった。

序 桜の森の中で（後書き）

後付けの序章でした。

元は第一話にするつもりで、主人公ふたりの顔見せ話として書いていたものを リサイクルしてみました。位置づけとしては「お試し版」。

にしては味が濃すぎる？

そういう店だということ、これからも読んでいただければ幸いです。

第一話 姫君と従者

冴月んとこの娘か……ありや強くなるな、賭けてもいいぜ。

そりや当然女だから重みはねエだろうが、あの体捌きと瞬発力は天稟を感じるね。

間違いねエ、何年かしたら、なんかしら大層な渾名を拝領してるだろうよ。

まア、どこもかしこも銃だらけの今日日の戦場で、剣だけで生き残れるかっていったら怪しいもんだがな……。

皇国魔道院・右院別当、あへのくろあま安倍黒章の評

自分の置かれている状況は、誰が見ても「危ない」と言うだろう。しかし、不思議と恐怖はなかった。自身の心が命ずるところを、行うのに、何をばばかり、何を恐れることがあるのか。

「さあ、誰からでもいいぞ」

ゆえに、張り詰めた空気の中で発された声は、凜とした自信に満ち満ちていた。

幼さの残るその声の主は、ほどけば背中の中程までであるであろう黒髪を後頭部で一束にまとめ、薄紫のかすり縞の模様の袴をはいた、いかにも女学生といった外見の少女。まだ服に着られているような背丈と顔立ち以外で眼につく点といえば、その背中に負われた大きなふくさ袱紗と、狼人族の特徴である狼の耳、そして袴からのぞくふさふさとした尻尾だろう。手には、彼女には不釣り合いなほど大きな、長

さ三尺ほどの櫪の木刀が握られている。

彼女は板塀に挟まれた狭い路地で、みすばらしい風体の四人の男たちに前後を挟まれていた。見知らぬ気弱そうな少年が、大の男四人に因縁をつけられて路地裏に引つ張り込まれてゆくのを見た彼女は、居ても立つてもいられないとばかりに快速を飛ばして彼らを追いかけ、少年を逃がして自身はここに残ったのだ。

「どうした、私が怖いのか」

さらに彼女は少しも臆することなく、藤色の真つ直ぐな瞳で男たちを睨み据え、言い放った。

「てめえ……！」

その言葉に、いきり立った一人が少女に殴りかかるが、拳は空を切り、直後、その男はがくりと自分の身体の平衡が失われるのを感じた。さっと身をかめた少女が、迫る男の脚を手にした木刀で払ったのだ。平衡を崩した男が殴りかかった勢いそのまま塀に衝突したとき、さらに木刀がいま一人の男のアゴをしたたかに打ち上げる。昏倒した男を、少女の視線は最早見ていない。

「こいつ!?!」

左足を軸にして一息に体ごと振り向くと、狼狽している三人目の水月を柄で一突きに、そして四人目が掴みかかってくる手を払いのけようとして、木刀を掴まれた。初めて、少女の表情が揺らぐ。

木刀を掴んだ男はそのまま、空いている左手で少女の鳩尾を突こうとしたが、踏み込む地面が無いことに気がついた。

「んっ！」

少女の気合と共に、男の体が宙に浮く。櫪の木刀一本を支えに大の男を持ち上げた少女は、袖口がまくれ、淡い光を発する手甲と、さらに白い二の腕が露になるのにもかまわず、木刀を男ごと大上段に振りかぶると、一息に振り下ろした。

振り下ろされる途中で手を放した男は背中をしたたかに打ちつけ、蛙がつぶれたような声を出して伸びた。これで四人。そして振

り向きざまに、背後に近づいていた男のアゴを、快音とともに叩く。がくり、とくずおれたのは、最初に扉に衝突した男だった。

倒れた四人がうめく中、少女はひとつ吐息をして、血払いのような動作の後に木刀を帯に差す。この後は最寄の交番なり、見回り中の警官なりに通報して、ことの次第を説明しなければならぬところだが、彼女にも急ぎの用事があった。

「どうしたものかな……」

助けた少年は、とつくとどこかに行ってしまった。これでは時間に間に合わないだろうか、と考え込む彼女。

「よお輝夜、相変わらず無茶するじゃねえか、ん？」

と、そこに苦笑交じりの声がかかった。

「焰崎さま……」

ゆらめく陽炎と共に現れたのは、長身瘦躯、茶色い髪を逆立てた青年。着流しに皮肉げな笑みを浮かべ、舶来の紙巻煙草をくゆらす彼は、輝夜と呼ばれた少女の知り合いだった。

「どうして、このような場所に？」

「俺んちに近えんだよ。昼寝しようと思ったトコを騒がしいから来てみりゃ、なあ」

剃刀のような光をたたえる目を細めて、彼はしゃがみこみ、輝夜の瞳を覗き込んだ。

「お父上にも二乗院の殿下にも、あんまり無茶はすんなって言われんだろ？ ん？」

「ですが、義を見てせざるは勇なきなり、とも言います」

見返す藤色の瞳は、どこまでも真っ直ぐだ。

「へ、小娘がいつぱしに孔子かよ」

焰崎は苦笑して立ち上がり、伸びている男の一人を脚で小突く。

「まあいい、ここは俺が引き受けてやる。二条院にじょういんだろ、さつさと行きな」

親指で表通りに続く方を彼が指差すと、輝夜は、ありがとございませぬ、と会釈して駆けてゆく。彼は輝夜が知るうちでも有数の

使い手であり、また公権力を司る身でもあった。

振り向けば、頬を叩かれて意識を取り戻し、目の前の顔を見て仰天する男の姿が見える。これで安心だ、と彼女は元の道を急ぐことにした。

向かう先は大宮大路をさらに北、大内裏のすぐ隣に位置する大邸宅。青年が口の端に上らせた、「二条院の殿下」とその妹の住まいだった。

天原は、大小九十九の島嶼群からなる生活圏であり、九十九島とも呼ばれる。

かつては神が住まった土地と言われるそこは、この零紀元二九九八年の現代においては、世界でもっとも豊かな文化と繁栄を享受する地域のひとつだ。

基本的に穏やかな気候風土に、豊かな四季とその恵み、変化に富んだ自然。その中で、神の子孫と伝えられる天照家を中心に緩やかな共同体として始まった国家は、瑞穂・豊葦原・秋津・華音と呼ばれる四つの大きな島を中心に、現在ではおよそ四千万人もの人々が住まう世界でも五指に入る大国である。国号は、『応神』だった。

脈々と受け継がれてきた天照家の血統は『光皇』と号す国家の元首として、代々瑞穂島の中西部、ただ京と呼ばれる都に君臨し、血筋を分けた宮家や建国の功臣たちの子孫である貴族を従え、権力を振るう。民もまた繁栄の恩恵を十分に享受し、豊かな日々を送っている。まさに、絶対君主の君臨する国家としては理想的といえた。少なくとも表面的には、そう見えた。

はつきりとした陰りは、二九九八年二月末から見られるようになった。昨年から病の床に臥せていた、光皇の容態がいよいよ悪化したのだ。

二十年前に武家政権を倒した、「大帝」とも言われた帝が倒れたともあって、新聞は扱いの大小こそあれ毎日のようにその容態を報じ、天照家が身近な存在である京の市民たちは、市街の北、光宮の方角を見ては、帝の病状について噂しあった。一方で、帝の容態についてより多くの情報を手にすることができ貴族達の間では、帝の病状は深刻であり、進行を遅らせることはできても快癒することとはまずないだろう、という統一見解が浸透しつつあった。

そして問題になったのは、帝の二人の息子たちはともに夭折して既に亡く、孫達はいずれも正式に太子として冊立されていないという事実である。

誰が次の帝となり、誰がその後見となるのか？

これこそが貴族達のもっぱらの関心事であり、既にして今上帝の長男の遺児である七歳の長良親王ながらを擁する九条家と、次男の遺児である五歳の篤良親王あつらを擁する綾小路家との間には、不穏な空気が渦を巻き始めていた。

その中であって、当事者である両家以上にその行動に注意が払われたのが、皇家に連なる一族の中でも、こと最高の家格を有し、光皇に代わって政務を執りえる「摂政」に任ぜられる資格をもつ有栖川家あきくわと、御神樂家みかぐらだった。

有栖川家の歴史は古い。零紀元一六〇〇年代の末、天下を二分する大乱が起こり、いつとき皇家の権威は地に墮ちた。その際に諸国に割拠した国司達をことごとく討伐し、皇家の威光に再び従わせた伝説の皇子を祖とする、代々武門の重鎮を輩出してきた家系である。初代の功績を称えて「泰華宮たいかのみや」の称号を有する名家だが、今代当主である陸軍大将・有栖川影幸は「軍人は政に口を挟むべからず」と、今回の事態に関しては不干渉を決め込んでいた。

そこで一層の注目を集めることになるのが御神樂家だった。初

代天照光皇の実弟である月読尊を祖とし、それにちなんで「月読宮」との称号を戴く御神樂家は、代々魔術師の家系として知られ、皇国魔導院の長官を最も多く輩出している。また優秀な官吏も多く出しており、最高官である太政大臣にまで上り詰める者もあったこともあつて、政治的影響力は非常に大きいのだつた。

その噂の御神樂家は、都の北東、鬼門を守護する方角に「二条院」と呼ばれる大邸宅を構えている。築何年が経つともしれない木造の蒼古たる大建築は、一説には、この地に都が定められた時から存在するといわれる。

檜と檜皮で造られた優雅な意匠の門と、その向こうに広がる広大な庭園、そして奥に見える寢殿造りの古風な館。

広大な庭園の片隅には、母屋と比べれば新しい、書院造の小さな離れが建っている。中には畳敷きで由緒正しい様式に則つた一室と、つい最近、先代が行つた改装で整えられた、板敷きの床に西大陸風の丁度が揃えられた一室があつた。

先代の書齋兼実験室だつたそこには、皇族に連なる月夜見宮家の一員、つまりこの国で最も権威ある一族のひとりとしてだけでなく、遠目にもそれとわかるはつきりとした異貌と奇異な趣味、そして多方面における才能の非凡さで知られる存在が今は住んでいるのだ。

そこに来訪する者がひとりあつた。先程裏路地で大立ち回りを演じた少女、輝夜だ。

彼女は冴月という、古くから帝に仕える武家の生まれであり、一昨年までその家の後継者とも目されていた。背負っている袱紗とその中身はその出自に似つかわしいものだが、ふつうは皇族の住まいを佩刀して訪れられる身分ではない。

しかし、彼女は慣れた様子で門番に来訪を告げ、使用人に挨拶をし、庭園をここまで歩いてきたのだつた。

「冴月輝夜、参りました」

硝子の羽目板で飾られた引き戸の横、鳩の装飾がされた呼び鈴を鳴らして名乗ると、やがて戸が開き、中から現れた姿があった。

輝夜の目が釘付けになるその姿は、ゆったりとした単衣を纏った、雪のように白い肌と青みがかかった銀色の髪の少女。名工の手になるような整った顔立ちの中には、血の色に光る瞳があった。その姿はさながら精巧な磁器人形じみていたが、頬や手に僅かに差す朱が、生気の彩を加えている。

少女の名は御神楽紫苑、歳は十七。今代の御神楽家当主・蘇芳すおうの妹であり、皇国で最高位に類される魔術師に贈られる『魔導師』の称号を、最年少で手にした才媛にして、第四位の皇位継承権を持つ内親王だ。

「さつき魔導院から使いが来て、聞いてるわ。お手柄だったそうね」

「はいっ」

紫苑の言葉に輝夜が瞳を輝かせて頷くと、紫苑が踵を返し、中に入るよう輝夜に促す。かたや皇族、かたや名門とはいえ一介の士族である二人の間柄は、皇族と士族、主と従者というものとは、だいぶ趣が違っていた。

「珈琲淹れましょ。輝夜も飲むわよね？」

「……牛乳と砂糖をたっぷりとお願ひ致します」

ぎこちない声で嘆願する輝夜に、紫苑はにやにやと笑う。

「却下」

底意地の悪そうな微笑を美しい顔に貼り付けて、鼻先をとんと一押し。ぴんと輝夜の耳が逆立つのをあははと笑って、紫苑は指を二つ鳴らした。すると、テーブルの上に置いてあったサイフォ式抽出機の下部フラスコの中に水がごぼごぼと満たされ、その下

に据えられたアルコールランプに火が灯る。そうしてから紫苑は戸棚から密閉瓶を取り出して、豆をスプーンで二杯、より小さなものに移し替えた。

「今日はちよつと粗めにするか」

そしてまた指が鳴ると、瓶の中に巻き起こった小さな竜巻によって、豆は粉々に挽き砕かれた。

「本当に、器用に術を使われますね……」

「符でいくらでも代用できるし、それこそ海を挟んだ向こう側じゃあ機械でこういうことをするらしいじゃない。大して役立つ特技じゃないわよ」

ひらひらと手を振りながら、紫苑はフィルタをサイフォンにセットし、挽いた豆をその中に放り込む。

「それでも、私は上手く扱えませんか……羨ましく思います」

「私からすれば、あなたの身軽さの方が羨ましいんだけどね」

やがて抽出が終わり、二つのカップに液体が注がれてゆく。ことり、と音を立ててオーク材のテーブルの上、自分の目の前に陶製のマグカップが置かれ、取っ手から白磁のような指が離れてゆくの、輝夜は眉をひそめて見つめていた。視線を上げてみれば、内親王殿下がその美しい顔立ちに、また意地の悪そうな微笑みを浮かべてこちらを見ている。

マグカップの中身は黒々とした、しかしかぐわしい芳香をあたりに漂わせる液体。昨今紫苑が凝っているという、珈琲という舶来の飲料だった。

しかしこの珈琲、曲者であった。素晴らしい香りに反して、味はその漆黒に似つかわしく、途方もなく苦いのだ。煎茶のそれとは違う、口の中に後々まで残るような苦味が、輝夜は苦手だった。

輝夜は一度、聞いてみたことがあった。

「このようなものの、何処が美味なのですか？」

「まだまだね。この苦味に慣れてくると、それに隠された深い味わいがわかるようになるの」

そんなことを言つて、紫苑はマグカップを優雅な仕草で傾けたものだった。百歩譲つて彼女からすれば善意のことなのかも知れないが、輝夜にはその善意が重い。口には出さないが。

輝夜がその黒い飲み物を啜つて眉をしかめると、目の前の内親王殿下は満足げに頷く。初めて珈琲が出されたときなどは、輝夜が知らず一口に飲んでしまつて顔をくしゃくしゃに歪める様を、紫苑は大笑いして見ていたものだ。そんなことがあつたので、絶対に反応を楽しまれている、と輝夜は思っているが、実のところそう悪い気はしていない。

「あら、ついさつき使つた？ ふむ……術式の動作に問題もないみたいね」

カップに口をつけながら、輝夜の袖口から除く手甲を一瞥し、紫苑。

術式とは、魔術を行使する際に、術者の想念から構築される一連の工程表のようなものだ。術式は純然たる術者の想いから構成されているが故に、構築した者でなければ認識できない。しかし、ある魔術師が「礼式らいしき」と呼ばれる特殊な言語を開発し、想いから成る術式を翻訳したことで、目に見える形で記述することができるようになった。

その魔術師こそが応神皇国の始祖、始祖魔術師と呼ばれる伝説的な術者のひとりである初代天照帝だ、と伝えられている。以来、皇国の民はこの技術を用いる符術の恩恵に存分にあずかり、現在に至るのだ。

「はい。不思議なことですが、私とこの『式』が、日に日になじんでゆくように思えます」

袖をまくりながら、輝夜。

「そりゃあ、そうよ。そう組んでるもの」

ふふん、と紫苑が自慢げに笑うかたわら、ぱちん、ぱちんと留め具を外す音をさせながら、輝夜は今しがたまで服の袖と裾に隠れていた手甲と脚甲を、机の上に置いてゆく。木と金属が触れ合った

とは思えないほどに、そのときの音は軽い。

青白い光沢をもった金属で鍛造されたそれらの表面には、いずれもびっしりと細かな文字が刻み込まれていた。紫苑が手ずから、といっても魔術を用いて彫り込んだ術式だ。いわば、この二対の防具そのものがひとつの符なのだ。

刻まれた式は身体強化。所持者の意思と魔力が通えば、人体が持つ能力を、二倍、三倍、それ以上に増幅する。身体的負担は決して無視できるものではないが、可能な限り押さえ込めるような工夫がしてあった。

この式が、武門に生まれて剣の道に打ち込んできたとはいえ、十四歳の少女でしかない輝夜を、大の男と渡り合えるまでにしている。とはいえ、その力に振り回されずに使いこなす、輝夜の剣士としての才覚もまた優れているのだ。

「駆動時間の超過は一度も無しか。いつけは守れたようね？」

……それにしても、式が少しも磨耗してない。凄いなコレ、エル・ネルフェリアの最新技術を駆使した魔力との親和性が高い軽合金って触れ込みだったけど、本当だわ」

いい報告ができそう、と呟く紫苑は、輝夜から見ても楽しげだ。

宮中行事や公務で、きらびやかな礼装に身を包んで周囲に完璧な愛想を振り撒く紫苑は遠目に見ても美しかったが「実際あんな何も楽しくないのよね」と彼女は輝夜にこぼしたことがあった。ここでこうして術式を弄ったり、本を捲ったり、珈琲を飲んでいるほうが余程、とも。

「一番は、派手な魔術を使って、派手に爆発でもさせるときかしら」そのあとにこう続けたため、聞いていた輝夜としては台無しな気分になったものだったが。

「さて、それじゃ。いつもの、はじめましょうか」

手にとっていた防具を置き、紫苑は代わりに机の上に広がる雑多な品物の中から、洋紙を糊で綴じた帳面を拾い上げる。表紙には、『皇国史：3』と、お世辞にも綺麗とは言えない字で書き付けてあ

った。

ぱりぱりと、薄い窓ガラスを風が揺らす音が、講義をする紫苑の
声に混じって室内に響く。

十一月の風は寒さをますます増してきていたが、この部屋に限つ
て、二人はそれと無縁でいられた。 テーブルの下で赤い輝きを放
つ、海外から先代が買い付けたという、一度魔力を込めれば穏やか
な熱を長時間放ち続ける不思議な石のおかげだ。

「さて」

空になったカップをテーブルの上に置くと、紫苑は改めて帳面を
取り上げた。

「やっと『カナン再臨』の年ね」

白い指が付箋がついている頁をめくる。 居住まいを正して、輝

夜は話が再開されるのを待った。

「十世紀の『天魔戦争』で姿を消した、天空の魔導王国エル・ネル
フェリア……ああ、そもそも『天魔戦争』って覚えてる？」

こくり、と輝夜は頷いて、記憶している内容を口にした。

「それ以前に栄えていた魔法文明を崩壊させたという大戦ですね。

……世界から、魔術が失われかける原因になった」

「そう。 零紀元前から残っていた魔法文明の知識や遺産もほぼ全
滅、そうすると魔術はただのめんどくさい代物に成り下がって、よ
り手軽に扱える機械技術が発達するにつれて衰退していった。 う
ちは符術があつたから良かったものの……ま、戦国の時なんて、金
に困った公家の小遣い稼ぎに使われてただけだよあ と、話が
逸れた。 それで、二九七三年」

「二十五年前……」

その年にあつた大事件はもう誰もが知っていることで、当然輝夜も知っていた。天魔戦争で海中に没したとも、跡形も無く消え去ったともいわれる伝説の魔法王国エル・ネルフェリアが、東大洋上にその姿を再び現したのだ。史家たちが否定した、伝承に語られる姿そのまま。

「浮遊諸島カナン。上空一千米メートルに浮かぶ島々なんて非常識な代物、確かに実際見ないと信じられるものじゃない。天魔戦争以前の世界のことが書いてある記録なんて、ほとんど残ってないしねえ」
うんうんと頷くと、紫苑は解説を再開する。

「で、このエル・ネルフェリアが何をしてくるのか、主要国は畏れた。日ごろ戦争してばかりの西大陸の国々が一致団結する構えまで見せたっていうんだから、相当だったでしょうね。当然国内も動揺したんだけど、もともと幕府は財政難で思想統制も有名無実になつて改革も失敗して飢饉が起こる火山も噴火する地震まで起こるで大変だったから、状況はあんまり変わらなかった」

「変わらなかったのですか」

「一揆と打ち壊しと新興宗教の押し売りの頻度がちよつと増えたくらいだつてお父様はおっしゃつてたわ」

それは相当に末期的な状況だったのではないかと輝夜は思う。

その年は幕府成立から二百五十年ほどのころだが、泰平の世の終わりがひしひしと感じられたのだろう。

「まあ、そんなだから皇家にとつては色々都合だったのよ……それはともかく、応神にもエル・ネルフェリアの飛空艇が来たの。」

幕府は大慌てだつたらしいわ、長らく平和ボケしてたせいでロクに大砲なんて無かつたらしくてね。平和ボケしてなくても、空飛ぶ船なんて非常識な代物に対応できたとは思えないけど。結局うち泣きを入れて、お父様を始めとした魔導院の主要人員が相模の片田舎に勢揃いしたらしいわ。豪華にも程があると思わない？」

そのせいで幕府の権威がガタ落ちしたのよね、と付け加え、紫苑は続ける。

「で……その船が持ってきたのは、宣戦布告でもなんでもなく、ただの通商協定だった。カナンはちょうど東大陸の中央にあるから、東西大陸の貿易の中継地として今は機能してるのよね。そのはじまりが、この協定だったワケ」

「鎖国はこのときをもって放棄されたのですね」

「ええ。この協定がもたらしたのは、何も東大陸の物産だけではないの」

そう言つて、紫苑は机の上の置き時計を取り上げる。魔力を伝達する媒体である霊子の揺らぎの振幅が1/600秒であることを利用して針を動かす機構が内臓されているその時計は、エル・ネルフェリアからもたらされた技術をもって、応神国内で生産されたものだ。

「エル・ネルフェリア内では既に枯れているけれど、私たちにとっては数百年は進んでいる魔法技術を手に入れることもできた。仮にこれを容れず、鎖国を解いてなかったら、皇国は他国に大きく遅れをとることになったでしょう」

時計を置いて、彼女は椅子から立ち上がる。指し示すのは、硝子窓と白壁の土塀の向こうに見える、さらに白い壁。壁、否、それは大内裏にそびえ、この国を統治する光皇が住まう『塔』だ。

それは古の文人が「蒼穹をつらぬく剣のごとし」と形容した、この国とこの街の歴史を二千年以上の長きにわたって見守ってきた存在。二百米もの高みに達する塔の基部は数区画分にも及ぶほどで、故に西側に位置する彼女の部屋からは壁のように見えるのだ。

「で、そのついでに あの花が、かの魔法王国の技術と同じようなもので成り立っていることがわかってきた……話が逸れたかな、本筋に戻そっか」

この「授業」は、数ヶ月前から続いていた。ある日唐突に紫苑が、「人にものを教えてみたいわ」と言い出したのが始まりだ。

輝夜は中学校に通うようになり、剣の修行をする時間が以前よりも取り辛くなったことに不満をもらしていた頃だったが、紫苑が授業

をすると言つと二つ返事で承した。真面目に返答したつもりが、紫苑の唇の端が引きつったようになっていて、まるで笑いを堪えていたようだったのを輝夜は覚えている。自分がぶんぶん尻尾を振っていたことまでは、覚えていない。

「つて、もうこんな時間じゃない」

その後も紫苑はしばらく話を続けたが、窓の外を見て日が傾いでいるのに気がついた。時計を見てみれば、針は午後四時を指している。

「そろそろ終わらせないと……二九八〇年に大政奉還、そのあとゴタゴタが色々あつて魔導院が旧幕府軍相手に無双して、それで旧幕府も恭順したんだけど、まだまだ全てが皇家に従つたワケでもなくてね」

紫苑が指差し、輝夜の視線が動く先にあるのは新聞の一面だ。

そこには先月二十四日に西方の筑紫で発生した小規模な反乱についての記事が載っていた。不平士族による反乱が勃発、筑紫鎮台司令部があわや襲撃されかけるも、たまたま現地に在った魔導院の人員により鎮圧さる。死者は居宅を襲撃された筑紫鎮台司令官、秋月陸軍中将および鎮台兵三名と、『神風党』の構成員百七十九名
そんな内容の。

「また反乱ですか？」

「……まあ、变革には反動がつきものつてことよ」

うーむ、と考えこむ輝夜の目には入らなかつたが、紫苑の表情は暗い。その憂いを吹き飛ばそうとするかのように、彼女はたと叩きつけるように一歩を踏み出した。

「今日はここまでー！」

宣言し、手にした帳面を無造作に机の上に放り出す。それは絶妙な均衡を保っていた和洋入り混じる本の小山に衝突し、結果、大崩落を引き起こした。

沈黙が場を支配する。紫苑はゆっくりと放り投げたままの腕を下ろし、輝夜のぽかんとした表情を真正面から見ると、にこりと笑顔を作った。

「私は光宮の晩餐会に行かなきゃいけないから」

「あとう」

「支度をしなくちゃいけないくてね」

「その、後ろの……」

「で、ちよつと頼みたいことが」

「紫苑様、恐れながら……」

輝夜には確信があった。これは明日もそのままだろう、と。

明日も我慢しないといけないのか、と。そうでなくとも、この部屋は彼女を刺激するものが満載だというのに。

「ごちゃごちゃとなにやら書き付けられた紙片が散らかった床。

高さも厚みも著者も乱雑に詰め込まれた書棚。よくわからない液体が入っているガラス瓶と一緒に並んでいる食器。講義に集中している間はあまり気にならないが、こうなると衝動が湧き上がるのを抑えられない。

「……お片付けしたい。」

「今日こそは、私にこの部屋の」

「はいはい、気持ちはありがたいけど時間がないの」

手をひらひらと振って輝夜の言葉を遮った紫苑は、大崩落を起こした机の上でかろうじて無事な、よもぎ色の風呂敷包みを取り上げ、輝夜に手渡した。

「私の代わりに、届け物をしてほしいのよ。場所は、篝火横丁かがりびの猫眼庵ねこまなって店。それじゃよろしく」

夕暮れ時の大宮大路。

「結局、今日も掃除できなかつた……」

はあ、とため息。 仮にも内親王殿下とあろう御方があんな汚らしい御部屋に、という義憤と生来の綺麗好きのせいで、あの部屋に招かれるたびに掃除をしたい衝動に駆られる輝夜だったが、その度に紫苑にははぐらかされ、かわされている。

一度、紫苑が部屋を離れている間に机の上の整理を敢行したことがあつたが、翌日にはさらに酷い状態になっていた上に、「何処に何があるかわからなくなつたじゃない！」と怒られた。 どうやらあの酷い状態こそが、内親王殿下にとつては「どこに何があるかわかる」状態だつたようだった。 それ以来、もう半分諦めてはいるのだが。

それにしても変わったお方だ、と輝夜は思う。 平民、士族、華族、そして皇族にすら分け隔てのない態度で接し、趣味といい服装といい古来の伝統に囚われない。 故に保守的な人々からの評判は良くないが、京の人々からはそれ以上に親しまれるのが、御神楽紫苑という少女だった 「あのおみ足がたまらん」「絶対領域は正義」「踏んでもらいたい」など、妙な声も混じっているが。

整備されたばかりの街路灯が夕暮れの光の中で弱々しく瞬いている下を、輝夜は風呂敷包み片手に歩いてゆく。 目指す先は左京の南、かがりび横丁と呼ばれている一帯だ。

その横を、キイキイと木製の車輪が軋む音がして、古来の牛車に見立てて造られた乗合バスがゆっくりとすれ違っていった。 動力は符だ。 エル・ネルフェリアからもたらされた術式機関という考え方は、符を連関させて一つの機構を作るといった形となって応神に取り入れられ、開国から20年経つた今ではこのようなものも作られるようになったのだ。

「篝火横丁か……」

苦手なだけれどなあ、と輝夜は心中で呟いた。別段危険な場所ではなく、むしろ左京南部という繁華街の中にあつては最も治安がいい部類に入る場所だ。が、この京における魔術文化の中心地としての雰囲気、どうも自分には馴染まない気が、輝夜にはしていた。

とはいえ紫苑からの頼みごととあつては、疎かにするわけにもいかない。そうしていると今度は後ろから走ってきたバスに追いつかれ、彼女は小走りに前方の停留所へと急ぐ。

一銭硬貨二枚を料金箱に放り込んで車内を見回せば、座席は全て埋まつていて、乗客の何人かは吊革や柱につかまつている。そんな中で、輝夜は二本の足以外の支えに頼らずにいることにした。定期的に均されるとはいえ舗装されていない土の道は相当に揺れるが、彼女には平衡を崩さない自信があつた。

窓から見えるのは官庁か邸宅かという風景がしばらく続いたが、京の中央を横に貫く五条大路を過ぎると、一気に雰囲気華やいだ。昔ながらの町屋の中にぼつりぼつりと漆喰や煉瓦作りの建物が見え始め、商店の呼び込みの声や、流しの歌声が窓越しにも聞こえてくる。

大宮大路と六条大路の交差点付近にある停留場、そこが目的地に最も近いところだった。バスから降りれば、正面にある露店に並んでいる輸入物の香辛料が発する香気が感じられる。

横丁までの道には外来の装飾品や菓子を扱う露店も数多い。武家の娘とはいえ、輝夜も年頃。呼び込みの声の方にちらちらと眼をやりながらも、足は止めずに小路を目指す。

角を二回曲がれば、夕闇に覆われて薄暗い道を、宙に浮かぶ色とりどりの淡い光が幻想的に照らす小道が広がっている。まだ日が沈んでいない時間帯とあつて人はまばらだが、太陽が姿を隠せば、この一帯は東京の秋葉神社界隈と並ぶ皇国多数の魔術の街にその姿を変えるのだ。

足を踏み入れると、硬質なものと柔らかなものが入り混じったような不可解な感覚が輝夜を一瞬だけ包み、すぐに消えた。直後、輝夜の嫌いなあの空気が全身を包み込む。

魔術に関わる品物を扱う店が多いかがりび横丁は、事故が起きたときに備えて結界を張っているのだというが、これを通過するたび、輝夜はこの街について回る噂。「地図に比べてこの街は明らかに広い」だとか「空間が歪んでいる」だとか、そんなことを思い出してしまふのだ。

目指す猫眼庵は、紫苑の行きつけの道具屋兼材料問屋だ。どのような経路で商品を仕入れてくるのかは知らないが、質のいい品を安値で手に入れられるらしかった。

場所は街のはずれ、傾いた二階建ての古い建物だったはずだ。以前何度か紫苑に連れられてきた記憶を頼りに、輝夜はさらに街の奥へと向かう。

旧東市界限にあたる横丁の中央付近は、この一帯でも最も^{エーテル}霊子の密度が濃い場所だ。故に変異種や暴走符が寄り集まった魔法生物のような、人に危害を及ぼしかねないものが時々出没する。そのためこの付近は心得のある者しか立ち入らず、そういった人々だけが利用する少々「危ない」店が多く営業している場所でもあった。果たして、目的の店は街の中心の十字路に面した場所にあった。

古い二階建ての建物の入口に掲げられた申し訳程度の大きさの看板には、下手な字で「猫眼庵」と屋号が記されている。

暖簾をくぐれば、土間を挟んだ左右には金属フレームにガラスの羽目板をした大きな陳列棚が鎮座し、様々な調合材料や薬品が並んでいた。外の薄暮よりもさらに薄暗い店内を、薄赤い魔術光が封じられた鈍色^{にび}のランプが細々と照らしている。

「もし、猫眼庵殿はおられますか？」

呼びかけるが、土間の奥、畳敷きになっているところで火鉢が炭の爆ぜる音を立てているだけで、店主の姿は見えない。かわりに、どこからか猫の間延びした声が聞こえてきた。

「店主殿ー？」

「おや、いらつしやいませえ」

「っ!？」

後ろから聞こえてきた声に、思わず尻尾が逆立つ。輝夜に気配さえ感じさせなかった灰色の着物の小男は、元々細い眼をさらに細めて、にんまりと笑った。彼こそがこの店の主だが、もっぱら屋号で呼ばれているために本名はあまり知られていない。

「珍しいねえ、輝夜ちゃんだけかい」

「は、はい……。お届けものなのですが、紫苑様は御務めがあられますので、私が代わりを仰せつかりました」

言いながら包みを手渡す。ずしりと重かった包みの中身が気になったが、数回のこのような届け物の中身を聞いて酷く後悔した経験が、輝夜を思いとどまらせた。そのうちの一度などは、いまだ汗をかき続ける人皮で装丁されたいわくつきの魔術書が中身で、うっかり表紙に触ってしまったときの感触をその後三日は忘れられなかったものだ。

「そうかい、お使いご苦労様」

表情を崩さずに、店主。収まりの悪い赤茶色の髪の中で、猫の耳がぴくぴくと動いている。さらに上衣の裾から垂れ下がっている二股の尻尾が眼を引いた。猫人族は狼人族と並んで数の多い亜人種だが、このような二股の尻尾を持つている者は珍しい。

「お茶でも飲んでいくかい？」

「いえ、この後は稽古がありますので」

「頑張るねえ……」

そう言う店主の顔には、わずかながら憂いの色があった。

「殿下をお守りするためにも、修練を欠かさすわけにはまいりませんから」

「無理だけはしないようにねえ。それで身体を壊したり、怪我をしたりしちゃいけない」

「……はい」

今日、その無理をしたばかりだという事は、輝夜は黙っておくことにした。

「それじゃ、これお駄賃……ああ、そういえば」

「なにか？」

渡された十銭硬貨を袴のポケットにしまつてから、小首をかしげて問い返す輝夜。

「最近、このあたりで子どもが何人が行方不明になつてゐるみたいだねえ」

「子どもが……ですか？」

「そう、輝夜ちゃんと同じくらいか、もつと小さい子がねえ」

猫眼の間をしかめ、声を低くして、店主。表情からはあまり深刻さを読み取れないが、それはきつと常に細められた彼の目のせいだろう。

「最近はこの界隈の勝手がわからない新参も増えたからねえ。特に外国から来る連中が好き勝手して困るんだ」

「ですが、そこまでの事件ならば、魔導院も動くはずですよ。解決

まで、そう時間はかからないと思います」

「だといいけどねえ……輝夜ちゃんも気をつけるんだよお」

「お気遣い、ありがとうございます」

では失礼いたします、と型通りの一礼をして、きびすを返す輝夜。その背中に向けて、にゃーんと、猫が鳴きかける。

「……やっぱり、どっか危なっかしいんだよねえ」

既に店を出た輝夜の耳に、その声は届くことなく。

「殿下も、あれではさぞご心配なことだろうねえ……」

誰も居ない店内に響く声が途切れると、尻尾が二又に分かれた猫が一匹、店の奥の暗がりへと消えていった。

第一話 姫君と従者（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。 てるよぶです。
こんなものも始めてしまいました。 試行錯誤しながら完走を目
指して頑張っていきますので、どうぞよろしく願います。

改：ルビ修正、誤字訂正など

第二話 少女たちの憂鬱

皇族、内親王、第六位継承者、姫殿下、月夜見の姫君、皇国最年少の魔導師……

なるほど、形容やら接頭辞はいくらでも思いつく。いま挙げたものからもっと下世話なものまでね。

問題は、問題は、だ。

そんな言葉で表現しうる場所に、殿下は生まれた時から立ってはおられず、そしてその事を自身がまったくご存じないという事だよ。

皇国魔導院・左院別当、ゆげの たかあきら弓削鷹亮の述懐

翌日、輝夜はいつものように二条院を訪れ、いつものように『授業』を受けていた。

「……要約すると、この世界にあまねく存在する『霊子』、あるいはエーテルと呼ばれるものが術者の想いによってある配列を形作る。これが『術式』の正体よ。それに術者が己の意思と精神力を注ぎ込むことで効力を発揮し、現象として発現する。たとえば炎を出したり、ものを冷やしたりね。……大丈夫？」

それまでの紫苑の説明についていけず、昨日崩落した箇所 元通り雑多な本の山に戻っていたそこをちらちらと見ていた輝夜だったが、やっと要約を理解できて、こくこくと頷いた。それを見て苦笑する紫苑。輝夜は恐縮したように赤面して、表情を隠すようにカップに口をつけた。

今日の飲み物は紅茶だった。良い葉が入ったのよ、と紫苑

が上機嫌だったために、珈琲責めを回避しようと輝夜がリクエストしたものだ。香りもよく、味も苦くなく、また色々な茶菓子に合うこちらの方が、輝夜は好きだった。もつとも、一番気に入っているのは、結局のところ毎朝飲んでいる安い茶葉で淹れた煎茶だった。

「ちよつと駆け足過ぎたかな。とりあえず、応神の魔術学でわかっているのはこれくらい。いまいち要領を得ないんだけど……まあ、霊子っていうのも天魔戦争前の文献に存在が示されてたから『ある』って言われてるものだし、実験的に証明はできてないのよ。観察なんてもつと無理。このへんが今の技術力の限界なのかもしれないわ」

そう言つて、ぱたんと帳面を閉じる紫苑。表紙には几帳面な字で『魔術概論』と書かれている。輝夜は知らなかったが、それは紫苑の亡父、先代月読宮が娘にと著した教本だった。

「じゃあ復習。そもそも、魔術つてどういうものかしら」
ぴん、と人差し指を立てて、紫苑は輝夜に問う。輝夜は少しだけ考えるしぐさを見せたが、十秒もしないうちに答えを発することができた。

「意志力、精神力を物理力に変え現象を引き起こす技能……と以前に紫苑様が」

「正解。じゃ、何をどうして魔術の効果が現れるのか、わかつてる？」

「現出させたい効果を念じ、『術式』を練り、力を通わせ、起動する……」

「そうそう。だから制御が不安定で、現れる効果も人によってまちまち。術式を上手く練れないのが変に強力な効果を思つてしまつと、それこそ惨事を招くのよ」

術式は術者の想念、イメージによって形成される。つまり術者が起こしたいと考える現象に対して深い洞察や正しい自然科学的知識を持っているほど術は成功しやすいし、制御もしやすい。しか

し、イメージを上手く練ることができない術者や、現象に対して見当違いの認識を持つている術者が下手に大規模魔術を行使しようとするれば、意図しない術式が形成される可能性が高くなる。たとえばライター程度の火を起こそうと思つて魔術を使ったところ、巨大な炎が現出してしまった……といった事故が起こる。こういつたことは、京でも年に数件は起こつており、ともすれば大惨事になりかねないことから、魔術についての教育を受けていない一般人が、符無しで術を使用することは厳しく禁止されている。

「その点、符は便利なのですね」

「書いてある術式に魔力を通して起動させるだけだからね。金属符なら繰り返し使えるし」

「なるほど」

輝夜が頷くと、満足気に紫苑も頷く。そんな紫苑の表情を見るたび、輝夜は知らず嬉しくなるのだ。自身が認められたという喜びなのか、それとも純粹に紫苑の笑顔を見られたのが嬉しいのか、自身でもわかりかねたが。

「それじゃ今日はここまで。ところで、昨日頼んだ届け物だけど、

猫眼庵は何か言つてた？」

「いえ、私の前では何も」

「そう。まあ中身に不備はなかったはずだから大丈夫でしょう」

頷いて、紫苑は閉じた帳面を作業机の上に置いた。放り投げないあたり、昨日のことを教訓にしたに違いない、と輝夜は思う。

会話が途切れかけたが、そこで彼女は、昨日猫眼庵で聞いた話を思い出した。

「ですが、ひとつつ気になる話が……」

「うん？」

輝夜が切り出すと、書棚に手を伸ばしていた紫苑が、興味有りげに相槌を打った。

「子どもが行方不明ねえ……」

聞きながらページをめくっていた、白い指の動きが止まる。迷い無く本棚から取り出された一冊の表紙には、輝夜には読めない文字でタイトルが書いてあった。この乱雑な部屋の中にあつて、紫苑が「ものを探した」ところを輝夜は見た覚えがない。この十四歳の少女にしてみれば心底不思議なことだが、紫苑にとってこの部屋は、本当に「何がどこにあるか」わかる状況なのだった。

「私も外に出られるようになってからの状況しか知らないから、なんとも言えないけど。確かに、西大陸から来た連中がって話はよく聞くわ」

栞を挟んで本を閉じ、気だるげにソファへと深く身を沈める紫苑。

『カナン再臨』以前の西大陸では、こちらほど理解が進んでいなかったのと、聖女教会の教義のせいで、ずいぶんと魔術は迫害されていたらしいの。そのせいか知らないけど、研究のコトしか頭になくて、そのためならどんな事でもするって連中も多かったみたいでね」

聖女教会とは、西大陸諸国で大きな力を持っていた、かつてこの世界を覆っていた闇を払い平和をもたらしたという「聖女レフィリア」を信仰する世界宗教だ。この教会は魔術に対して否定的なスタンスを取り続けており、強力な政治的影響力を保持していた時代には、大陸全土で魔術師狩りが横行したのだという。故に西大陸諸国では魔術が心神以上に衰退し、かわりに合理主義に立脚する科学文明が発達した。この歴史の流れの中で、聖女教会は政治的な影響力を失っていったことは、皮肉なことかもしれない。

西大陸には皇国魔導院のような魔術師を監視・統括する機構が存在していなかった事も、紫苑の言葉にある状況を後押ししている。

研究のための互助組織は存在していたが、それも一般人のことを考慮するような性格ではなく、聖女教会による迫害から逃れるために『神秘の流出』を防ぐことが、結果的に一般社会に対する影響を限定的にしていただけだった。そんな組織にも馴染まなかった人々が魔術に対して寛容なエル・ネルフェリアや応神に流れてきた結果、確立されている研究倫理や法を把握できないまま、あるいは知ってなお犯罪を犯す、という事件が多発しているのだ。

「そういう輩って、地方の警察が相手にできるような連中じゃないから、タチが悪いのよね。　しかし、混沌度がうなぎのぼりの東京ならまだしも、こっちでそんな事をする奴がいるとは、困ったもんだわ」

組んだ両手の平を頭の後ろに回しながらの愚痴のような言葉とは裏腹に、紫苑の表情には、年頃の少女が浮かべるべきでは決してない類の笑みが浮かんでいる。　自身の選択が誤りだったのではないかという若干の後悔と共に、輝夜は冷めかけた紅茶をすすった。

「面白そうじゃない」

やっぱり、と輝夜は呆れと諦めが混じったような視線を、紅茶のカップの縁越しに投げかける。　向こうに見える表情は心底から嬉しそうだ。

みんな揃って私に無茶をするな無理をするなと言うが、一番無茶苦茶なこのお方の警護をしていて、無茶せずにはいられるものかとつくづく思う輝夜なのだった。　とはいえ、言うべきことは言わなければなるまい、と彼女は口を開く。

「ですが猫眼庵殿の言がまことならば、事は深刻。　魔導院の賀茂かも様や弓削様にも連絡した方が……」

紫苑はカップを置いて姿勢をただすと、かぶりを振った。

「無用よ。　というか、魔導院は今動けないわ」

「動けない？」

「そ。　昨日のことだから噂も京には届いてないし、たぶん情報統制が布かれるから公表はされないけど、今東京が大変でね」

ふふふ、と愉快そうに笑う内親王。

「なんでも、崇徳上皇の生まれ変わりだとかいう魔術師が、怨霊を憑依させた甲冑兵とか鉄巨人兵を大量に従えて、旧江戸城の東京市庁を襲撃したんですって。昨日の晩餐の途中に報告があつてね。

御病気の陛下も珍しくお出ましになられて、即座に禁軍投入を裁可なさつたわ」

そんな愉快とはとても言えない内容を楽しそうに語った後で、私も行きたかつたわあ、と紫苑は不満げに付け加えた。

「……『禁軍』が、動くのですか」

眼をみはり、身を半ば乗り出して、輝夜。紫苑は表情にいつそう愉快の色を深める。

「そう、禁軍。重砲兵級の火力と、騎兵に勝る機動力と、歩兵以上の即応性を一人一人が兼ね備える皇国の切り札がね。しかも四神の支隊長まで全員出撃だもの、これでワクワクしなかつたら嘘よ」

禁軍とは、皇国魔道院に所属する魔術師のみで構成された戦闘集団のことで、正式名称は「皇国魔道院・戦闘魔導団」という。

陸軍・海軍に次ぐ、皇国の第三の軍と言われているが、いかなる場合においても軍務省参謀本部の指揮下に置かれることはなく、常に指揮権は光皇自身が保有している。そのため皇帝の軍、すなわち『禁軍』と呼ばれているのだ。人員は百名に満たないが、それぞれが非常に強力な魔術師で、大半は敵地での単独行動を伴う諜報活動などに従事しており、京には有事の際の機動戦力として二十名ほどが常時待機している。その二十名を、東京に投入するところが昨晚決定されたのだ。

「まあ、だから京にはそのさらに上の決戦兵器みたいな人たちしか残ってないのよ。陛下の腹心に、子どもが行方不明程度の未確定情報だけで動いてもらうわけにも行かないじゃない？」

その理屈でいくと内親王殿下が動くようなことでもないんではなからうか、と輝夜は思ったが口には出さない。結局のところ、紫苑は「自分がやりたいからやる」というだけで、『禁軍』の戦力が

残っていないだの、情報の確度がどうなのだの、そんなことは無関係なのだ。輝夜は、紫苑と出会ってからの日々で、そのことは重々承知していた。

「それでは、いかがなさいますか？」

「動くにしても情報が足りなすぎるし、まずは情報収集ね。まあ、面白くなってきたら輝夜にも出番をあげるわ」

「……そのう、私の役目をご存知ですよね」

「私の小間使い。違ったっけ？」

しれつと言う紫苑に、輝夜ははあ、と溜息をつくしかない。彼女が非難がましい目つきで目の前のにやけ顔を見上げると、その視線を受けた紫苑は立ち上がるとわざわざ真面目くさった表情を作り、腕を組んで、敵かな調子で言葉を発した。

「冴月少尉」

「はっ!？」

いきなりの変化に声の上擦る。逆立つ耳と尻尾の毛が忌々しい。これがあるから、ますます自分の感情はこのお方に筒抜けなのだと理不尽な思いすら湧き出てくる。

「汝に陛下が賜い給うた大任、よもや失念してはおるまいな？」

「め、滅相も御座いませんっ!」

「申してみよ」

「右近衛少尉たる小官の任は 殿下の護衛にございます」

「然り」

ゆっくりと頷いて、紫苑は表情を戻す。そう、冴月輝夜は皇国陸軍・右近衛府所属、階級は少尉という軍人だった。中学生ながらに任官しているのは、彼女がこの二条院、仮にも皇族の住まいに足繁く通うにあたって相応の名目というものが必要だからだ。

「でもね、護衛役だったって、ただただ私の周囲に目を光らせてればいいってもんでもないのよ？」

「……と、仰られますと？」

「優秀な護衛っていうのはね、言わずとも主の意を汲んで、それを

間違はなく遂行するくらいのことはやるものなのよ」

「は、はあ……」

そう言われて、自分は果たして満足にそれを勤めてこれただろうか、と真面目な顔で考え込んでしまう輝夜。はぐらかした方はいつと、上から見下ろす姿勢のまま、周期的に振れる輝夜の尻尾を見て、にやにやと笑っている。

「当然、私があなたに控えていてほしいと思うときは、控えているべきなのよ。わかる？」

「はあ……って、紫苑様！」

気づいた輝夜が憤慨した面持ちで頭を上げ、こらえ切れなくなった紫苑は声を上げて笑いだした。

「……っ、あはは、あー、面白い」

「私は面白くも何ともありません！」

いかにも「怒っています」と肩をいからせる輝夜の前で、紫苑はまだ身を震わせて笑っている。ぷい、と輝夜が顔をそむければ、窓越しに、冬の装いに移りつつある二条院の庭園と、そびえる『塔』の白い壁が目に入った。今日も木枯らしは激しく木々の枝を揺さぶり、落ち葉があちらこちらへと散ってゆく。

「冬めいて、きましたね」

笑声が止んでからしばらくして、輝夜。

「そうね。東北では、もう雪が降ったそうよ」

輝夜の横に立って、紫苑。手にはいつの間にか、鶴の絵が入った扇子がある。

「寒くなりそうですね」

「そうね……」

音を立てて扇子を広げ、口元に当てる紫苑。その動作に何の意味があるのか輝夜には理解しかねたが、直後、紫苑は小さく、「でも」とつぶやいた。

「ゆっくり寒さを感じてる暇は、ないかもね」

「……？」

いぶかしげに、扇子に半ば隠された紫苑の表情をうかがう輝夜。
しかし、細められた紅い眼から、感情を読み取ることはできな
かった。

「それじゃ、また明日。 気をつけて帰るのよ」
平凡な文句とともに、笑顔で手をひらひらと振る紫苑。 新人の
番兵が自分のことを不可思議なものを見る眼でちらちらと見てくる
のにも構わず、輝夜は黙って一礼し、踵を返した。

紫苑はたまに気まぐれを起こして、こうして輝夜を門前まで見送
りに出てくることがあった。 別れの言葉を告げてから、しばらく
何も言わずに佇んでいるのもいつものことだ。 輝夜がちらりと二
条院の方を振り返ると、やはり今日も紫苑はずっとこちらを見てい
た。

長襦袢の上に一枚、打掛うちかけを羽織っただけで佇むその表情は、どこ
か寂しげだ。

まだ若い輝夜にも、御神楽家において紫苑が微妙な立場にあ
ることは容易に想像がつく。 そうでなければ、宮家の内親王とも
あるうお方が、どうして本邸ではなくて離れなどで一日のほとんど
を過ごすだろうか。

気になるところはまだある。 京の人々の間でその特異な容姿が
噂になり始めたのが、輝夜の記憶に拠れば四年前だ。 その以前か
ら冨月家と御神楽家の付き合いはあり、先代月読宮の娘の話を父が
していたのを輝夜は覚えているが、どんな娘か、ということを知り
された覚えはなかった。

また、紫苑はいつだったか、「自分は十四歳になるまで、一度も
屋敷の外に出た事が無い」と輝夜に話してくれたことがあった。

あれだけ目立つ彼女に関する風聞が出始めた時期が、自分がはじめて彼女と会った時期と一致するということからして、それは事実なのだろうと輝夜は思う。

これらの状況の原因は一体なんなのか。輝夜には、紫苑のもつ異質な風貌と、類を絶する魔術の才が関係しているように思えた。

魔術を使えば、ものを燃やすことくらい誰にだってできる。風を起こすことも、水溜りをつくることも簡単だ。剣術をなりわいとする家に生まれた輝夜とて、その程度の初歩の魔術は、制御を誤らないレベルで修めている。問題はその速度と精度だ。

そもそも魔術を使用する際には、さきほどの「授業」で紫苑の質問に輝夜が答えたとおり、得たい効果を念じ、術式を練り上げ、魔力を充填し、式を起動するという四つの工程を踏む必要がある、当然それ相応の時間を使う。そして現れる効果の精度は、たいてい大雑把なものだ。

昨日の珈琲を、輝夜は思い出す。紫苑はアルコールランプの先端に正確に火を灯し、サイフォン式の抽出機に一滴もこぼさず水を満たし、密閉瓶を少しも傷つけることなく小さな竜巻を巻き起こした。これほどの精度の術を、ものの数秒で三回も行使できる力量が普通でないと確信したのは、輝夜がいつか父親に連れられて訪れた、『禁軍』朱雀支隊長・焰崎兵吾（あまのまは）の自宅に、ごく普通にマッチが置いてあり、彼がそれを使って煙草に火をつけていたのを見たためだった。

一体、「御神楽紫苑」とは、どのような存在なのか？

疑問は尽きないが、そこに踏み込んでいくのは、臣下としての分を超えたことだろうな、とも彼女は思う。

そんなことを考えながら輝夜が二条大路を西へと歩いているうちに、朱雀門の前までたどり着いていた。京の北部中央、市街と大内裏（だいり）を隔てる門が、同じ名前の大路を見下ろすその場所は、門の向こうの官庁街から溢れてくる人々でこった返している。

その人ごみの中に、輝夜はふと見慣れない姿を認めた。朱雀門

の色と同じ、燃えるような紅色の髪を無造作に伸ばし、竜人族の証左である長い耳と短い角をもつ青年が、行き交う人波に揉まれるようにしてこちらに歩いてくる。身長は六尺を越えようかという長身で、回りを歩く人々から頭ひとつ分ほど突き抜けていた。そのため、小柄な輝夜の眼にも留まったのだが。

まるで鷹のような眼だ、と輝夜は思う。竜人族特有の金色の瞳から放たれる鋭い眼光は、油断無く周囲を探り、警戒しているように見えた。

よく見れば青年は、砂色の頭巾を目深にかぶった子供の手を引いていた。行き交う人々にさえぎられ、さらに頭巾のために顔はよく見えないが、頭巾の端から青年と同じ色の髪が覗いている。その髪の長さと同半分だけ見える顔つきから、妹かな、と輝夜は類推した。

二人はとうてい、旅行者には見えなかった。特に兄のほうか。京を観光に訪れたただの外国人にしては、なにぶん纏う気配が鋭すぎたのだ。二人組が何者なのか興味を持った輝夜だったが、あまりじろじろと人を見るのは失礼に当たる。二人から視線を外すと、自分のしたことに若干のばつの悪さを覚えつつ、輝夜は家路を急いだ。ひとつ、脳裏にひっかかるものがあった。

視線を外す一瞬前ちらりと見えた、少女の真紅の瞳に覚えた既視感。

はて、私はあの子と、前にどこかで会っていたか……？

自問するも、記憶は答えを返してくれなかった。

輝夜の姿が見えなくなつてから紫苑が踵を返すと、微妙な表情でこちらを見ている若い女中が視界に入った。おそらく何かの用

事があつて庭に出ていた人間だろうが、自身の記憶を検索してみても、該当する人物は見当たらない。

ふと、兄がまた何人か新しく使用人を雇つたと言つていた事を思い出す。その時はまたかと思つたが、実際のところ、紫苑と蘇芳の二人と父の代から残っている使用人達で管理するにはこの邸宅は広すぎ、手の回らない箇所が多々あつたため、正しい判断だと今は認めている。ということはこの女中は新人で、自分についても良く知らないのだろう、と紫苑は結論づけた。

よつて、実行する行動は、まずこの人物のことを自身の記憶に記銘するためのもの。

「あなた、名前は？」

言葉を発して問うと、女中は予想外だつたのか眼をぱちくりとさせた。さもありません、と紫苑は思う。この京に住まうたいの貴族は、自身の邸宅で働いている使用人、それも管理職でない下っ端の名など、基本的に気にはしないからだ。

「か、か、加藤理緒と申しますっ、殿下」

我に返つた女中は鯉のように数度口を開閉すると、バネ仕掛けのような素早さで頭を限界まで下げて名乗つた。頭の位置とは逆に、半分裏返つたような甲高い声。そのさまに、紫苑は何とも言い様の無い感情を覚える。

内親王、継承権第四位、月読宮の妹、皇国魔導院先代長官の娘、帝の孫娘 自分の立場や、ついて回るさまざまな肩書きの事を紫苑は知らないわけではないし、意識しないわけでもない。

しかし、それらは御神楽紫苑という存在がもつ属性の一部を表現するものではあつても、そのすべてを満たすものでは決して無い、と紫苑は考えている。この理緒という女中は、「御神楽紫苑」を構成する属性の一側面を視て、畏怖を覚えているだけなのだ。それが紫苑には不満だつた。

「顔を上げなさい、理緒」

「は、はいっ」

今しがた知った名を呼ぶ。声に若干の不快な感情が混じり、それを感じ取ったのか、女中がまたバネ仕掛けのように頭を跳ね上げる。顔面は蒼白で、手足は小刻みに震えていた。古参連中から一体何を吹き込まれたやら、と紫苑は呆れたが、それを表情には出さず、震える焦げ茶色の瞳をその真紅の視線をもつてじつと見据える。

……可愛い顔してるわね。

思考に混じったノイズはあえて排除しない。彼女は自分に正直に生きることにしているのだ。

「いま、貴女のことを憶えたわ。だから、貴女も私の事を憶えなさい」

ふるふると震えていた女中は、優美な微笑みとともに発されたその言葉に緊張を少し解き 罰の類ではないとわかったからか きよとん、とした表情で小首をかしげた。

……小動物っぽくていいわ。私の側に置こうかしら。

またしてもノイズ。何となくだが、紫苑はこの理緒という女中のことを気に入り始めていた。彼女に声をかけられて、逃げようとしなかった新人は久々だったのだ。

「私だつていつつも内親王殿下やつてるわけじゃ無いのよ。疲れるんだ、あれは」

「は、はあ」

「ここにいる私は、ただの『御神楽紫苑』。必要以上の礼儀は無用よ」

笑みを悪戯つぽいものに変えて言うと、紫苑はすたすたと歩き出した。肩越しに相手の方へと振り向き、ひらひらと手を振ってやる。背後で理緒が何か呟き、「変」だとかなんだとか聞こえたのを気にも留めずに、彼女は離れへと戻っていった。

やがて日も沈みかけたころ、使用人が運んできた夕食を適当に片付けた紫苑は、行動を開始することにした。

立ち上がり、何をどのように着ようか考えながら、応神のものはまるで違う服たちを和室の箆笥から取り出す。本邸にも彼女の部屋はあるが、見つかると色々面倒な洋装はだいたいこちらに置いてあった。

帯を解くと、締め付けるものが無くなった襦袢がはらりと肩から落ちる。一糸纏わぬ姿になると、畳まれた衣類の一番上から、彼女の肌と対照的な黒いレースの下着を取り上げ、てきぱきと身に着ける。豊かな胸が締め付けられる感覚に少し眉をしかめながら、シンプルな白のブラウスを羽織り、慣れた手つきでボタンを留め、下着と同じ色のニーソックスと、膝上まで丈が絞られた赤黒のタータンチェック模様のスカートを穿き、ブラウスの裾を外に出すとその上から鉾のついた革のベルトを締め、さらに鮮やかな赤色のリボンタイを襟元にあしらう。

着替え完了。続いて髪を整え始めた紫苑が覗き込んでいる鏡台には、個人輸入で取り寄せた、表紙にエル・ネルフェリア語の文句が踊るファッション雑誌が積まれていた。

エル・ネルフェリア王国唯一の国土である浮遊諸島カナンは、短く見積もっても千数百年間という年月の間、外界から隔絶されていた。そのため、人種・文化的な源流と考えられる西大陸に存在する各国とは、また次元が違った文化を形成している。

紫苑はその文化の中で形成されてきた独特の服飾センスがいたく気に入っていて、外出時にはエル・ネルフェリア製の服を好んで着用しているのだった。

「これでよし、と」

櫛を置き、最後の仕上げに黒い外套をばさりと音を立てて羽織り、伊達眼鏡を装着。眼鏡は赤いセルフレームの輸入品だ。こうい

つた紫苑の嗜好は、ただの外国かぶれだと言われることも多く、特に宮中の公家達からの評判は良くない。肉親の蘇芳や、日々接している輝夜からの反応も良いものとはいえないし、すれ違う人々からは奇異の視線が飛んでくる。が、当然、彼女は毛ほども気にしていなかった。

ちなみに、「月読宮内親王殿下の奇異な服装の趣味」は、皇家がらみのゴシップも躊躇無く扱うタブロイド各紙の読者を中心として、広く市中に知れている。ゆえに紫苑の行動範囲に住む住人から半ば名物扱いされているのだが、本人は知る由もない。

財布を外套の内ポケットに突っ込んで行動開始。勢いよく引き戸を開き、大股で庭園を横切って本邸へ向かう。古参の使用人とすれ違うたびにぎよっとした顔をされるのは何故だろう、と思う紫苑だったが深く追及はしない。記憶の中の最短距離を辿って、たとえそこが廊下でなくても構わずに、目指す場所へと突き進む。

最後の襖を勢いよく開け放てば、そこは彼女の兄の部屋だ。

「お兄様！」

「なんだ、騒々しい」

紫苑の呼びかけに対して顔を上げるのは、部屋の中央、文机に向かって何か書き物をしていたとおぼしき青年。線の細い身体を

簡素だが仕立てのよい着物で包んでいるこの貴人こそ、現在の月読宮、御神楽蘇芳だ。

「外出許可をいただきに来たわ」

「ふむ、やるからさっさと行くがいい」

そっけなく言って、彼は再び視線を文机に落とす。そんな態度をとった兄に対して何となく腹が立った紫苑は、蘇芳が何か言う前に空気を押し固めた即席の椅子を作って、そこに腰掛けた。

蘇芳の部屋は離れにある紫苑のそれと違い、純和風の装いだ。

畳敷きの室内には香が焚かれ、橙色の魔術光が灯された灯籠が、薄暗がりをぼくと照らしている。やはり大きな書棚はあったが、そこに収められているのは政治や思想、歴史に関する書物が大半だっ

た。

「相変わらずの手紙魔ぶりね」

「からかうような妹の言葉を無視するかのように、筆を運ぶ兄。

「今度は誰に送るのよ？」

「幽斎と、伊達と……それと、絢胤だな」

「ふうん、と頷いて、紫苑は名が拳がった三名のことを思い出す。

八人いる参議の首席である旧宮家の橘幽斎たちほかま、軍務卿で旧仙台藩主の伊達明宗だてあきむね、内務卿で長門藩出身の絢胤容堂あやたね。いずれも皇国政府の中核を占める人々だが、もう一つ共通点があった。

「……あれ、ね？」

「ああ」

紫苑が指を立てると、蘇芳は軽く頷く。短いやり取りだったが、それだけで兄妹の間で全てが伝わった。

「前々から思ってたんですけれど。あえて、平地に乱を起こす気？」

「平地なものか。この国はまだまだ大工事の半ばなのだ。それを、主上の御病気に乗じて元の木阿弥にしようとする企みは、到底許されることではない」

眼を細め、声を低くしての妹の問いに、兄は淡々と答えた。『連中』というのは、左大臣の九条頼常くじょうよりつね以下、光皇が半ば不在の現政府にあつて主導権を握りつつある国粹派の公家達のことだ。未だに尊皇攘夷を掲げてはばからない者すらいる彼らがそのような地位に着いたのは、ともすれば急激に過ぎる現在の改革に対して、一定の反対意見を述べる者が居たほうが良いという帝の計らいによるものだったが、帝が臥せりがちな今となつてはその判断が裏目に出る格好になった。

橘幽斎、伊達明宗、絢胤容堂、そして御神楽蘇芳。この四名の共通点というのはつまり、国粹派による専横を快く思わないという点において団結している、ということだった。

「まあ、論理の筋としては通ってるわ。手段の正当化に使えるか

はともかく」

「何か問題があるか？ 平地に乱というが、乱という程のものも起こるまい」

「確かに、連中の悪事の証拠なんて幾らでも掴めそうだね。おまけに軍務と内務が味方とくればね」

呆れ半分で吐息した紫苑に、蘇芳は初めて笑みを見せる。

「ずるいと、思うか？ 紫苑よ」

「まさか。 現実にルールは無いわ」

「だろう？」

同じように、口の端を吊り上げて笑う紫苑。

襖を開けた使用人がどす黒い空気に中てられてたまらず踵を返すのにも気がつかず、この高貴な兄妹はしばらく悪辣な笑みを浮かべていた。

ややあつて、紫苑は話を戻そうと表情を変える。

「それで、出かけていいのよね？」

「構わぬ構わぬ。 どのみち、私が許可しなくても出かけるのだから？」

「まあね」

悪びれもせずに言う紫苑に、今度は蘇芳が吐息した。

「だが騒動は起こしてくれるなよ、家一軒吹き飛ばすなどというのは、勘弁してくれ」

「ご心配なく。 目撃者も纏めて吹っ飛ばすから……というのは冗談だけど、今日の予定にはないわ」

「相変わらず物騒な事を言う」

紫苑の言葉が冗談に聞こえず、苦笑するしかなかった蘇芳だったが、やおら何かに気付いたかのように表情を険しいものにする。

「待て、ちよつと待て」

「なに？」

「……今日は、と言ったな？」

「ええ。 降りかかる火の粉は、元を吹っ飛ばしてやるに限ると思

わない？」

「優美な所作で立ち上がった紫苑は、そんな兄を見下ろして、意地悪っぽく言うのだった。」

第二話 少女たちの憂鬱（後書き）

「従者の日常」ではとにかく適当な感じの人でしたが、本来「御神楽紫苑」という女性はこういうキャラクターです。基本的に合理的思考と好奇心に基づいて行動する、学者気質でかつ天才肌、といつとこる。

改：誤字訂正・表現修正など

第三話 妖狐暮羽と貴族たち

午後七時　まだ、戌の刻と呼び習わす人も多い時刻。

篝火横丁は、すっかり夜の装いに切り替わっていた。

街路灯の淡い魔術光で照らされる中、軒を連ねる店や品を広げる露店からはひっきりなしに客引きの声が飛んでいる。一人でも多くの客を呼び込もうと躍起になっていた店主や店員たちだったが、横丁の入り口から歩いてくる姿に、みな一様に眼を止めた。

「おお、おいでなすったか」

「一週間ぶりくらいかね？」

薄闇の中にあつて、なお目立つモノクロームの姿。

すらりと伸びた足が動くたび、高いヒールがかつかつと軽快な音を立てる。白黒の中でひとときわ目立つ、鮮烈な紅い視線で周囲を睥睨しながら、彼女は喧騒を割るように大股で歩いてきた。

「え？ あ、あれ、御神楽内親王殿下ですよ……ね？」

それを見て、眼を丸くする新人の店員。横に立っていた年配の番頭が、ごほん、とわざとらしく咳払いをする。

「いいか新米。そう見えるかもしらが、ありや他人の空似だ」

「え、でも、あんな髪と目の色の御方なんて」

「……もしお前がそれらしい態度でも取ってみろ、何も買ってもらえなくなるんだからな。したら、給料からその分引くぞ」

「え、ええ？」

「ああ、たまに張り手が蹴りのおまけがつくが、そしたらもつと引くからな」

「理不尽だ!？」

そんな二人の前でヒールの音が止まり、くだんの少女は、にこりと笑う。

「こんばんは、四迷堂さん。何かいいもの入ってる？」

夜の横丁は、皇国最大の繁華街である祇園に勝るとも劣らない賑わいを見せる。祇園と違うのは、こちらは飲食店よりも書物、雑貨、服飾、薬品などの専門店が多いことと、親子連れの姿がそこに見られることだ。そういった人々の目当ては、西大陸やエル・ネルフェリアから輸入されてきた、ここでしか見られない珍しい品物だ。

では、今しがたこの横丁を訪れたやんごとなき御方の目当てはといえば。

「二本、ちょうだい」

白い指が品物を指す。その先にあるのは香ばしく焼けた、肉汁したたる腸詰め（フランクフルト）の串焼きが二本。愛宕山あたこの裾野で育てられた質のいい豚肉を使った腸詰めという触れ込みの屋台は、彼女の後ろにも何人か列ができている程度には繁盛していた。「あいよっ、二十銭だ」

屋台の親爺の威勢のいい声に、にっと笑って紫苑は硬貨を二枚手渡す。引き換えに、竹を割って作られた皿に腸詰めが二本乗って差し出されてきたのを受け取り、彼女は踵を返した。

「毎度ありー」

店主の声に、背中越しに手を振る。

「『ご一新』の前はこうやって堂々と豚肉を食べるなんてありえなかったっていうんだから、不思議よねえ」

「紫苑様……はしたのうございます」

紫苑が大きく口を開けたところで、一部始終を見ていた輝夜は、呆れが半分混じったような声でたしなめた。今にも串にかぶりつこうとしていた内親王殿下は、半眼で見上げる輝夜の視線に対して、不機嫌な表情を作る。

「うるさい、私はついてくるなって言ったでしょうが。それを門前で待ってて『私もお供いたします』とかね」

まったくもう、とわざとらしく怒ってみせてから、ぱりっと小気味いい音を立てて腸詰めを噛み破る。

「大体さあ、美味しいものは美味しいのよ。私が何であれ食べ方がどうであれ。じゃあ、どう食べたっていいでしょう?」

見せ付けるように、さらにもう一口。それを嚥下したところでふたつめの串を手にとり、紫苑は意地悪く笑う。

「さあ、『ごめんなさい』と言えたら、これをあげるわ。どうする?」

そうして、目の前にまだ湯気を立てる串を突き出してきた。

輝夜は思わず眼をみはった。狼人族の例に漏れず、彼女も肉は好きだ。ぱたぱたと尻尾が振られ、口腔内に唾液が溢れ出すのを自覚し、さつと頬が朱を帯びる。生理的反応ゆえに仕方が無いとはいえ、意思ではどうにもならぬことが恨めしい。

「う……」

「いらないの? それなら私がいただくけれど?」

にやにやと笑いながら、目の前の主は手にした串を左右に振ってみせた。焼けた肉と脂の放つ芳香と桜のチップの香り、それが可視化したかのような湯気が、感度のよい嗅覚を刺激する。しかしここで折れてしまえば、目付けとしての沽券にかかわろうというもの。ぎゅっと歯をくいしばり、目をきつく閉じて、輝夜はかぶりを小さく振った。

「何を我慢してるのかしら。別段、私はあなたに帰れと言っている訳ではないのよ? ただ、私の意に反してしまったことを謝れば……」

その反応を見た紫苑はさらに笑みを深めると、紅唇をほころばせ、さらに誘惑の言葉をつむぎだす。

「その罪を赦したうえで、このあなたの好物を賜ろう、と言ってい

るの」

微笑みを貼り付けたまま、ほうれほうれ、と串を鼻先に持つてきては引つ込める紫苑。この悪魔のごとき所業……！と、輝夜は内心で恨み節を呟きつつ、その香を鼻に届かせまいと、必死に息を止めて耐える。一方で、押し殺した感情を代弁するかのように尻尾と耳はぴんと立っていた。

いつまで保つかしら、と意地悪く主が呟くのを聞き流し、しかし彼女とて呼吸をせすにいられる時間はそう長くない。果たして限界が訪れ、輝夜は真つ赤な顔で目と口を開き、足りない酸素を補給するために大きく息を吸い込んだ。肉と脂と燻製の、食欲をそそる香りとともに。

もう、駄目だ。食べたい、食べさせろ、食べさせてください

そんな心中の悲鳴にも似た声と共に輝夜の意思は音を立てて砕け、彼女は呼吸を整えると、おずおずと一歩進み出、目を閉じて口をあーんと開いた。

「順番……逆よ？」

指摘され、輝夜の赤みを帯びていた頬がさらに赤くなる。自らの敗北を認めざるをえず、少女剣士は顔を覆う熱がさらに高まるのを自覚しながら、うつむいた。

「申し訳、ありませんでした」

「よろしい」

鷹揚にうなずいた紫苑は、期待に尻尾と耳をぴんと立てた従者の鼻先へと腸詰めを差し出す。それはやりとりの間に少し冷めてしまっていたが、それでも輝夜は喜んで口を開き、串ごと腸詰めをくわえこんだ。そのまま咀嚼すると、あふれだす肉汁と豊かなうまみに、知らず顔がとろけそうになってしまう。紫苑はといえば、半ば輝夜の口の中にある串を持ったまま、唾液と肉汁が口の端から漏れ出すのにも構わず一心に腸詰めをほおばる輝夜を、にやにやと観察していた。

「あ、輝夜、ちよっと私の目を見ながら食べてくれる？」

「は……？」

「いいから。 うん、いい上目遣いだわ」

屋台のかたわら　つまりは往来のど真ん中で行われた、ふたりの少女による一連のやりとり。　当然周囲の耳目は集まり、興味深げな視線が集中していた。　近くを通りがかった親子連れは足早に離れていったり、顔を赤くして二人を見ている人々が居たり。　さらに少ない何人かは、新しい領域を開拓したり。

そんな周囲の目を知ってか知らずか、輝夜に串焼きを食べさせている紫苑の意識は、冷静に周囲を観察していた。

今までにすれ違ってきた人々や、興味津々にこちらを見たり、あるいは足早に立ち去っていったりする群集の中には、女性や親子連れの姿も見えた。　無警戒に今の横丁を歩き回るあたり、行方不明事件の噂は広まっていないようだ、と紫苑は推測する。

「情報を集めるなら……とりあえず暮羽くれはのところこゝに顔を出さないと、か」

さすがにこの子をオトリにするのはねえ、と物騒なことを呟いて、紫苑は幸せそうな顔で口の中のものを飲み込んだ輝夜を一瞥した。

「よし、それじゃ移動するわよ。　たぶん、あつちあつちは私の意図に気付いてるから、今から行く場所で何か話が聞けるでしょう」

そう言っつて紫苑はさっさと歩き出し、輝夜は皿と串を手近にあっつたぐずカゴに捨てると、慌あわててその後を追うのだった。

酒楼、「天福楼」。　この本店のほか、祇園、羅生門および旧市域を囲む新市街に七、あわせて十もの店舗を持つ大手である。　庶民にとっては珍しい大陸料理が比較的安い値段で供され、かつ味も

また悪くないというこの店は、貴顕から下々まで、幅広い層の支持を得ていた。

二人が通された個室には暖かな色の魔術光が照らす中に大陸風の調度が整えられ、朱塗りの食卓の中央に置かれた花瓶には、鮮やかな色の紅葉をつけた枝が活けてある。　　こういった内装の心配りもまた、人気を集めている理由のひとつだった。

輝夜自身も何度か父に連れられて、祇園にある大きな支店に行つたことがある。　　大抵は忘年会などの大きな行事のときで、門下生や師範代たちも一緒だった。　　しかし、紫苑様は斯様な場所にどんな用事があるのだろうか、と、いぶかしげに、目の前に置かれた海鮮鮎かけ炒飯を見下ろしながら輝夜は考える。　　紫苑は夕食を済ませているため、軽めの点心と杏仁豆腐、そして杏子酒を注文していた。　　皇国の慣習においては、男女とも十五歳にて行われる成人の儀を境として、飲酒が解禁されるのだ。

「まあちよつと待つてなさい」

すまし顔で、白磁の匙の上に乗せた小籠包を口に運ぶ紫苑。　　箸で割つた箇所からあふれ出た肉汁の予想外の熱さに顔をしかめると、彼女は口をすぼめてふうふうと息を吹きかける。　　その一方で、輝夜は釈然としない面持ちのまま散蓮華を手にとると、彩り豊かな魚介や野菜の餡がかかった炒飯の山を崩しはじめた。

同じ屋号を掲げているとはいえ、結局は別の店であり、料理の味は少し違ってくる。　　海鮮鮎かけ炒飯は以前祇園の支店で食べたこととはあつたが、ここの方が美味しく思えた。　　さすがは本店ということだろうか、と輝夜が内心で得心していると、部屋と廊下を仕切る障子戸に、影が映つた。

「悪いわね、わざわざ」

紫苑が声をかけると戸は音も無く開き、現れたのは紫苑に劣らず白い肌に、煌びやかな金色の長い髪を腰まで垂らした長身の女性だった。

「紫苑様、この御方は……」

輝夜は眼を丸くする。白地に金糸で刺繍がほどこされた派手な着物をまとい現れた女性は、もはや人間ではありえなかったからだ。その耳こそ狼人族のものに近かったが、その尾は髪と同じ色の九尾。白い肌、金色の毛、そして九に分かれた尻尾。輝夜が思い当たる存在はただひとつ。

「そなた……おお、面影がある。冴月の娘じゃな」

思わず身構える彼女の機先を制するように、細い目をさらに細めて九尾は口を開く。

「そう構えずともよい、そなたの父君とは旧知での。聞いておらなんだか？」

「は……その、ええと」

目をぱちくりとさせる輝夜。目の前の存在は、誰がどう見ても伝説にある九尾の狐である。

「妾の名は葛葉暮羽。以後よしなに」

輝夜の困惑をよそに、冷たい印象を与える顔にわずかながら笑みをにじませてそう言うと、九尾は紫苑へと視線を向ける。

「久しいの。息災かや？」

「おかげさまで。お父様が亡くなったとき以来かしら」

「さよう。今はそなたの兄君が宮様だったかの」

「研究馬鹿だったお父様に似たんだかどうなんだか、あれは政略馬鹿になったわ」

「何かひとつを究めんとする気質は、よう似たとみえる。まあ、

月読の宮様がたは皆、あのようであった」

ぼかんとしている輝夜を他所に、旧交を温めるふたり。見た目相応の年齢の紫苑とは違い、九尾は所作のひとつひとつが老成して見える。それも、「輝夜が想像する通り」の九尾の狐ならば、さもありませんと思えることだった。

「さて、何の話だったかのう？」

「あら、とうとうボケた？」

とぼけた調子の狐に、紫苑も眼を細めて返す。

「戯れじゃ。それを何じゃ、妾を呆けたなどと……わかつておる、近頃この界限で起きておることである」

そう言ってから、狐はいまだに身体を強張らせている輝夜の方を扇子越しにちらりと見て、くすくすと笑った。

「ときに、そこな娘御のことは放っておいてよいのかえ？ 妾の素性に感じてこのかた、すっかり固まってしまつて」

「感付くも何も、丸出しでしょうに。しまつておけるんでしょ、その無駄に大きな九尾」

「そなたとは気心の知れた仲ゆえに、隠す必要もありやあせんと思つておつたが、失策だつたかのう」

杏子酒の注がれた杯を傾けながらにやにやと笑い合う二人に、輝夜は思った。ああ、このお二方はご同類だ、と。

さて、白面・金毛・九尾の狐といえば、天竺・唐土・そして本朝つまり皇国の三国にわたり妖異をなした大妖として、一般にも広く名を知られている。輝夜が葛葉暮葉と名乗った女性を恐れたのも、そのような逸話を聞き知っていたからだ。

それらの逸話・巷説では、玉藻前という名の九尾の狐は最後に那須に逃れ、三浦と上総の両将によって討伐されたが、殺生石とよばれる巨大な毒石に変じたといわれている。

そのようなことを、話の合間を見計らつて輝夜が恐る恐る問うてみると、当の九尾はただ苦笑するばかりだった。

「かの九尾とは遠縁じゃ、無関係とは言わぬが。妾はそのころ、まだ尾は二本だけじゃつたからの。葛葉狐の逸話は聞いた事が無いのかえ？」

「多分ないわね。ほら、安倍の血筋には妖狐の力が宿っている、なんて話なら聞いたことあるでしょ？」

「安倍家といますと……黒章さまの？」

輝夜の脳裏に思い浮かぶのは、魔導院首脳の一角を占める安倍黒章の、ふてぶてしい髭面だった。

「さよう、あれは我が不肖の子孫なる。妾が腹を痛めて生んだ晴

明は目も醒めるほどの美男子に育ったというに、子孫はああも下品になってしもうて悲しう思っておるのじゃ」

くつくつと笑う暮葉、あははと手を叩く紫苑。その一方で輝夜はどう反応したものが困っていた。安倍黒章といえば従三位・天文博士、輝夜にしてみれば父の縁で顔を見たことがあるとはいえ、雲の上のような存在だからだ。蘇芳と紫苑との会話に輝夜が居合わせても、大抵こういったことになるが、そう慣れられるものではない。

「さて、本題に移るといたそう。そこな娘も、猫眼庵に聞いておるのだったな」

「ええ、輝夜が聞いて、私に伝えてくれたのよ」

「ほう、輝夜とな。なよ竹の姫と同じ名とは、そなたの名付け親もずいぶんと奮ったものよのう。しかしてその鴉の濡れ羽色の髪に、愛らしい顔立ち。これは数年先が楽しみじゃな」

「え、あ、は……」

「顔を紅うしてしどろもどろになる様が、また愛いのう……と、また話が逸れるところだったの」

さらに輝夜が赤面するような事を言うと、暮葉はさつと表情を変える。続いて紫苑も、杏酒の杯を置き、緩んだ頬を引き締めた。

「横丁の行方不明事件。噂は広まっていないううだけど、一体何が起きてるわけ？」

「ふむ……耳に入れて快い話ではないぞ、良いのかや？」

「そもそも、私はそれを聞きにきたのよ」

「いやいや、殿下は斯様なことにはよく慣れてらつしやるであろうからのう、妾も安心できるのじゃが。輝夜、そなたのことよ。びくりと眉間が引き攣る紫苑を他所に、暮葉は輝夜に向き直る。

「まあ、軍人志願というあたり、覚悟はできておるのじゃろうが……」

「志願ではありません。この右近衛少尉・冴月輝夜、若輩なれど光皇陛下より賜りし任、この身朽ち果てましても勤め上げる覚悟に

「ごぞいます」

若干の緊張はあつたものの、淀みなく紡がれた言葉はまぎれもなく輝夜の本心だった。そう、彼女はそうしたい一心で、この場でついできたのだ。傍らで忠義を捧げる対象が「さすがに死んでからは嫌だわ」と呟いているのを聞き流しながら、輝夜は真つ直ぐに、目の前の大妖の金色の瞳を見据えた。

「……よからう」

頷いて、彼女は口を開いた。

翌日、光宮。

何かが静かに唸るような、どこか矛盾した音と共に扉が開く。手をかける場所さえない白い板が戸袋に吸い込まれて行くのを、御神楽蘇芳は無感動に見つめていた。最初こそ驚いたが、最早この程度のことには慣れてしまった。この、皇国において至尊にして至聖の存在がおわす白亜の巨塔には、建設から数千年建つてなお稼動し続ける神秘が溢れているのだから。

扉の向こうに広がっているのは、この三十五階の大部分を占める大広間だ。清浄な光で満たされ、真紅の絨毯が敷き詰められた部屋には、錦で縁取られた畳の座が十数。そして最奥には光皇臨席の場たる高御座^{たかみくら}。

そこには既に何人かの人間が座っており、彼らは蘇芳を恭しい礼をもって出迎えた。官位は公卿と呼ばれる人々の中でも最下位たる三位とはいえ、彼は皇族の中でも天照家に次ぐ家格をもつ宮家の当主なのだ。

「おお、殿下。妹君は息災ですか」

笑顔を浮かべて声をかけてきたのは、小太りといった風な青年。

参議・二条実篤（ごじゅうごねあつ）、年齢は蘇芳より五歳上の二十七だ。

「はは、あれの気性を二条殿はご存知でしょう。病魔や厄の方が願い下げでしょうな」

「これは確かに。私の貧相な想像の翼では、内親王殿下が御病気で臥せつていらつしやるどころなど、到底思い描けませぬなあ」

ともすると失礼極まりない実篤の言葉に込められた意図を、蘇芳は判断しかねた。この二条実篤という男は、まだ五十数歳だった父親の急死によって二条家の家督を継いだ、言わば『お坊ちやま』だったが、光皇や周囲がある程度の評価を与える程度の政治手腕は持ち合わせていた。そのことと家格の高さが合わさり、二十代の若さで公卿の地位に在るといふ結果を生んでいるのだ。

さらに言えば二条家は、守旧派と改革派の間での水面下の争いに關して中立を守っている。その中立が、勝者となるであろう側に恩を高く売りつけることを意図してのことであれば、この実篤はなかなか油断ならぬ人物ということになる。

しかし、やはり育ちのせいなのか、この男には裏表というものがあるがどうにも無いように蘇芳には思えた。先程の言葉にしても、失礼な皮肉と取られかねないものが、どうやら本心から出ているようなのだ。それはそれで性質の悪いことだが。

「いやしかし、先代の宮様が秘蔵されていたらつしやった深窓のご令嬢と聞いておりましたが、なんとも快活な美しさをお持ちだ！あの御方は、太陽の下に在られることが最も相応しく思えますな。

しかしあのご気性、亡き父君もさぞ手を焼かれたことでしょうなあ。兄君としても、楽ではないのではありませぬか？」

実篤が紫苑に初めて会った際の蘇芳に対しての言葉が、以上のようなものだ。恐らくはかなりの猫を被っていたであろう紫苑の気性を見抜いた慧眼は注目には値するが、あからさまな追従が混じった賞賛と、さらに後の言葉との整合性がなんとも取り難い。実際蘇芳の苦勞は絶えないが、普通面と向かってそれを指摘してよいものでもない。

これらの理由があつて、蘇芳はこの青年貴族に対する評価を定めかねていた。仮にそれだけの価値があるならば自陣に加える甲斐もあるうが、金を手に入れたつもりで掴んだものが真鍮では面白くない。

「おや、権ごんのあしひつ相つどの」

「おお、お早う御座います」

そばに現れた姿に、二人は揃つて礼をする。

神経質そつな細面を不快げに歪ませている相手は、九条宗重むねしげ

左大臣・九条頼常の子息であり、後継者と目される人物だ。蘇芳と同年代と政界では若輩ながらも、権大納言という大臣に次ぐ地位を得ている。権大納言の「権」は「定員外」の意であり、実質的な権限はそれほど強くないが、名門の後継たる彼がこの地位を得ているということの意味は大きかつた。（亜相とは、大納言の別称）

「宮様におかれましては、ご機嫌うるわしゅう」

表情を作り変え、皇族たる蘇芳に向かつて宗重は丁寧ていねいに礼をした。会話はそれだけで終わり、彼は足早に自身の席へと向かつてゆく。「やれやれ。私も嫌われたものです」

「権ごんのあしひつ相つ殿は左府様に輪をかけての外国嫌いですからなあ……」苦笑する蘇芳に、実篤もたるんだ頬を振るわせるような苦笑で返す。国粹派の中で純粹培養されて育つたような宗重は、ひどく外国由来の文物や外国人を嫌つており、そんな彼を蘇芳は内心で軽蔑けいべつしていた。向こうも向こうで、改革派とその旗手たる蘇芳を敵視する態度を隠そうともしない。もつとも、その程度の相手ならばかえつて行動を御しやすいから、むしろ助かるとも蘇芳は考えていた。

「左府様もいらつしやつた。我々も席に着くといたしましょう」

（左府：左大臣の別称）

九条頼常が議場に現れたのを見て、つかみどころのない笑顔を浮かべたまま、実篤が去つてゆく。蘇芳は宗重が歩いて行つた方を若干の感情が混じつた視線で一瞥すると、自身も席についた。

宗重について気になる点といえば、攘夷系の地下組織との繋がりが指摘されているところだ。昔はよかったと懐かしむ向きはいくらでもあるが、昔に戻そうと実力行使に走り出す過激な輩も少数ながら存在する。特に妹の紫苑は皇族の中にあつて特に西洋趣味に傾倒しているためか、何度が襲撃にすら遭つていた。それらの企みのすべては未遂。どころか、行使した実力以上の反撃に見舞われ、壊滅の憂き目に遭つていたが。

思考を中断。そこで、脈絡なく気になる点に思い至つた。

あの二条実篤は、自分と対峙したとき、やたらと妹のことを話題にするような。初対面するときも妹の事を問われ、そして何度かあつた接触の機会の際も、妹のことを気にしていた。そして、先程も。

……まさか。

導き出された推測は、あまりにも想像の埒外。蘇芳は下を向き、こみ上げる衝動をやつとの思いで押さえ込んでから、あたりを見回す。

「本日も聖上はお出ましにならないのですか？」

遠くで、右大臣・岩倉秀仁いわくらひでひとが内大臣・小野宮透おののみやととおるに問うている。

「やはり御玉体が優れない御様子。本日もご臨席はかなわぬとおっしゃられた」

「左様でございますか……」

憂いを含んだ表情で、座るべき者の居ない高御座を見やる右大臣。光皇が病に倒れ、御前会議という名称が形骸化してから、もう数ヶ月にもなる。光皇の裁可が得られにくい状況とあつて議論は紛糾することが多くなり、皇国の政治は半ば停滞の様相を呈しつつあるのだつた。

「聖上も現状を憂いてあらせられる。諸卿においては聖上の意をよく汲み、建設的な議論をお願い申し上げます」

周囲を見回し、内大臣は釘を刺す。彼の小野宮家は皇統整理令以前の宮家で光皇の信頼も篤く、透自身も光皇の秘書官たちを率い

る役職を与えられていた。

「では、始めると致そうか」

咳払いと共に、太政大臣・一条兼良いちじょうかねらが切り出した。一条家はかつて摂関を多数輩出した藤氏の筆頭という臣下の最高格だ。魔導院長官として光皇を支えた蘇芳の亡父と同じく、貴族の重鎮として、また光皇の有能な右腕として、これまで辣腕を振るってきた政治家だが、老境に入った今となっではいまひとつ精彩を欠く、と蘇芳は評価していた。

「先に、皆があまり割れぬ議題を評議するでしょう。まずは西大陸シユティーア王国式の新式軍制の導入について……軍務卿、説明を」

肅々と会議は進んでゆく。より機能的な新式軍制の導入についての議決、創設されて一年が経った新しい官僚試験制度の運用報告。そして次の、海外出身の人々に対する応神の法律の周知のための方策。ここで議論がにわかに沸き立った。

「やはり居留地制を撤廃すべきではなかったのではないか。我らと彼らの生活の有り様はあまりに違いすぎる」

「しかし、それは西大陸五力国の共同要求を容れてのこと。同時に片務的な治外法権と、あちらにおける皇国の民の居留地も撤廃されたのですから、反故にするわけにはいかんでしょう」

「東京では既に庶民の生活様式が変化しはじめたと聞く。これは神国の伝統の危機でもあるのだぞ」

茶番だな、と蘇芳は思う。光皇が倒れてから、外国や伝統が絡むといつもこうなるのだ。応神の独自性をあくまで守り通すべきか、諸外国から学ぶべきことを学び、よいものは積極的に取り入れ、結果として多少の変質はやむなしとするか。どちらの論にも一定の筋は通っているが、西大陸の列強やエル・ネルフェリアと互角の位置に立てるように、それも可能な限り早急に、ということを考えれば、採用すべきは明白だ。

しかし、これでは恐らく結論は出まい。この後にさらに厄介な

話題が控えている今、これにあまり時間をかけるのは得策ではない、と判断した蘇芳は、收拾をつけるべく発言する。

「確かに生活習慣や文化の違いからくる摩擦、そこから生ずる問題は無視しえませぬ。ですが、この場で一度に結論を求むるは拙速に過ぎると考えます。現在は各省からの散発的な意見が存するのみですが、関係各省から人員を出し合つて分科会を作り、その場でいくつか草案を作成し、主上の裁可を仰ぐべきと考えます」

「宮様の意見に賛同する。これは実際に制度の運用に携わる者達の意見を集めるべきであろう」

「我らでは方向性は提示できても、具体案の作成まではできかねますからな。出来上がったものを聖上に御覧戴くのが最もよろしいかと存じまする」

蘇芳の言葉に、橘・二条の参議二人が賛意を示す。

「では採決を行う。御神楽参議の提案に反対のものは挙手するように」

太政大臣に言葉に、手を上げるものは誰も居ない。要するにただの先送りを蘇芳は提案したのであり、省間協議の段階で自身の意見を捻じ込む余地はいくらでもあるからだ。

「では御神楽殿の提案を採用する。さて、では……本題だな」

太政大臣の表情には苦笑がにじんだ。この議題の議論には既に一週間を費やし、未だに結論は出ていない。光皇の裁可を仰ごうにも、議論は堂々巡りを繰り返しており、そもその提案が纏まらないのだ。

「東大陸本土への、わが国の進出について。皆の賢明な議論を期待しよう」

来たか、と蘇芳は居住まいを正す。一瞬議場がざわつき、すぐに静まった。

旧土族を慰撫し、反乱を武力制圧しつつ内治の安定を志向するか、あるいは不平土族を取り込んでさらなる陸軍師団増設を行い、東大陸進出の足がかりを確保するか。このふたつの方針のどちらを採

るかで対立が発生しているのだが、問題は、それぞれの方針に同数の閣僚が賛意を示していることだ。これは数年前にも御前会議において議論されたが、その際は内治優先という方針が光皇によって採決された。結果として、倒幕からその当時まで皇国陸軍の重鎮だった薩摩の佐々木行家他数名の閣僚が下野し、不平土族に祭り上げられて反乱を起こすという事件にまで発展している。

そのことが改めて議論されているのは、東大陸の北東部沿岸に、大規模な資源の存在が確認されたが故だ。精製すると水晶に似た透明な結晶体になることから魔晶石と呼ばれるそれは、魔力を貯蔵増幅し、任意に取り出すことのできる性質を備えている稀有な物質である。小さな魔晶石結晶を術式機関に組み込むことで、一般人が有する微弱な魔力を、大型車両を稼働させることができる規模にまで増幅できるため、皇国の産業革命において不可欠な資源と認識されているのだ。

このような理由から、内治派に属す蘇芳も、魔晶石の存在を無視することはできないと考えていた。今のところ魔晶石結晶の精製技術を保有しているのは応神一國だけだが、石炭を利用した産業革命を推進してきた西大陸の勢力も、魔晶石の性質に注目し始めているのだ。所有権の主張は、可能な限り迅速に行う必要があった。(陛下なくては、こうもなってしまうか)

蘇芳の中には忸怩たる念がある。これが平時ならば、意見が出尽くしたあたりで光皇による方針決定が行われていたのだが、あるいは、これが勅令政治というものの限界なのかもしれない、と蘇芳は思い始めていた。

そのころ、輝夜は蘇芳の妹に連れられて、事件の現場を訪れてい

た。

「ここか……」

あたりを見回して、紫苑が確認の呟きを発する。

「ただの路地裏に見えますが」

と、輝夜。彼女には、この場所は立ち並ぶ家や店の裏側にある

何の変哲も無い路地裏に見えた。しかし、主が導いた洞察は違う。

「いや、違う。魔術灯に魔力供給をしているレイライン　よう

は人工の地脈の交点ね、ここ。魔術師や妖怪がこっそり潜んで傷を癒すには適した場所と言えるわ」

ふむ、と輝夜は頷くしかない。地脈の有無など、常人に感じ取れるようなものではないからだ。魔力に対する鋭敏な感覚がなければ解りえない事をさらりと述べる主に、このお方はやはり特別なのだ、という思いが新たになる。

妖狐が言うには、この場所に死体が打ち棄ててあったのとこのとだった。行方不明事件は、その実連続殺人事件だったのだ。

死体の有様は酷いもので、血の量や残骸の形、質などからかうじて人間の子ともだと認識できる、というほどのものだったという。

むろん、身元識別のしようはなく、行方不明になった子供のうちの誰か、ということしかわからない。

「あれほど無残な殺し方をするからには、相当に飢えておったのじやろうな。或いは、そうすることに意味を見出しよった外道か」

苦々しげに、そう暮葉は言っていた。

「七、八割は欠けてたつてことは、ホントに『喰った』のかしら」

一方で紫苑はこのように評した。こちらの方がどうにも直球で、輝夜はげんなりした面持ちになったものだったが。

実際現場に漂う空気はどこか淀んでおり、鉄錆の匂いすらも内包しているように輝夜には思える。ふと、視界の端に見えた小さな白いものが写り、

「！」

よもや人骨かと慄然としたが、よくよく見てみればそれはただの

白い陶器の欠片だった。

「うーん、何も無いわね。片付けた時にも物証は残ってなかったみたいだしなあ……」

こちらに背を見せてかがみ込んでいた主が、立ち上がりながら言った。彼女はすぐさま銀の髪を翻し、歩き出す。

「次行くわよ」

しかし『喰われたような』女性が死んでいたという第二の現場にも、これといったものは存在していなかった。

そして第三の現場。ここではまた子どもが死んでいた。最初と違うのは、ほぼ原型を留めたままだったということだ。

血の匂いもしない。輝夜は若干の安堵感と、そして、今までとは違う周辺の空気に、少々の戸惑いを得ていた。

板塀、日が当たらない湿った土の地面、雑草や小石といった要素は、今までと大差ないにもかかわらず、だ。

なぜ気味が悪く思うのか、そもそもそれがわからない。前の二箇所は凄惨な現場であり、輝夜の嗅覚には未だに残るかすかな血の匂いすらも届いた。そこで感じた気味の悪さは、起こったことと血の匂いというものに誘発された、おそらくは生理的なものだ。一方、こちらは漠然としている。

「ここのは生命維持に必要な霊子を失っただけ……それなら」
そんな中で、にやりと紫苑は笑い、目を閉じて集中しはじめる。

輝夜にはその意味がわからない。魔術に関する先天的な感覚の差か、と改めて舌を巻く想いの輝夜を他所に、紫苑は自身の周囲に陽炎となって漏れ出る魔力や、熱が生む微風に煽られて広がる白い髪、額から垂れる汗にもかまわず、大きく息を吐いて肩を上下させ

「捉えた！」

快哉を上げた。にわかには顔色を変えた彼女のかたわらに、慌てて輝夜は駆け寄り、主の顔を見上げる。

「何かわかったのですか!？」

「そんな……いや、まさか」

問うと、紫苑は普段の彼女らしからぬ深刻な表情を浮かべ、あごに指を当てて考え込んでしまった。

「どうということなのですか？」

二条院に帰る途上で、輝夜は上目遣い気味に問うた。あれからしばらく考え込んでいた紫苑は四人目の現場を検分せず、そのまま帰ると言い出したのだ。御神楽紫苑という人間は確かに頭が切れるが、自身で結論を出して行動に移すまでの過程を一切説明しないために、周囲は彼女についていけなくなるのだ。もちろん、聞けば教えてくれるのだが。

「理屈としては簡単よ。吸血痕も性行為の形跡もなく霊子を抜かれたということは、相応の魔術を行使したということ。魔術が行使されれば、術者が術式に込めた魔力は霊子としてふたたび放出される。これにはね、行使者の特徴が出るの」

歩みを止めて肩越しに振り向き、人差し指を立てて講義口調の紫苑。

術式に込められる魔力は式が起動した際に全て消費される訳ではなく、周辺の霊子が魔術行使によって少なくなるのを補うかのよう
に、空間に一部が放出される。放出された魔力が周辺の霊子と完全に混ざり合って均一化するには三日程度かかると言われ、その間の残留魔力には行使者の痕跡が残るのだ。

内務省や魔導院はこれを利用して魔術を悪用した犯罪の捜査を行っている。そんな残留魔力だが、一方で魔導院が擁する最強部隊『禁軍』には、あえて自身が放出するそれに特徴を色濃く残すことで、相手に自身の存在をあえて知らせる者もいた。

「魔力の残滓から個人を容易く特定されかねない、だから魔術も符術も正直言ってこそそそした事には向いてない。力量のある魔術師の数なんてそう多くないんだし、ね」

やっぱり魔術の本領は大規模破壊よ、という物騒な呟きを聞き流しながら、輝夜は両手の拳を突き合わせた。

「ならば、今すぐにも下手人を捕らえに参りましょう！」

「それはダメ」

勢い込んだ言葉は、ぴしゃりと紫苑に却下されてしまった。

「……何故、です？」

正直意外だった。紫苑の性格ならば、ここでただ突撃あるのみ、即解決、だと輝夜は思っていたのだ。

「なんでって、相手は魔術師だもの。何の準備もなく戦えるような相手じゃない」

「ですが！」

輝夜は紫苑を見上げたが、立ち止まった紫苑は輝夜を見なかった。

「それにね、私は午後から公務があるの。舞鶴まで行かないといけない。だから、今日明日は動けないのよ」

「五人目が出ないと限りません！」

「それでも、皇族として最低限の責は果たさないといけないでしょう」

食い下がる輝夜からは、振り向かない紫苑の表情は伺えない。

平板な声は感情を押し殺しているかのようだったが、輝夜にはそれが殊更冷たく聞こえたのだった。

彼女はうつむき、拳を握り締める。

「……ならば、私一人でも」

「駄目！」

振り向くと同時に放たれた強い調子での否定に、輝夜はびくりと震え、それでも紫苑を見据える。こちらを向いた白い少女と、剣士と、二人の視線がぶつかりあった。紫苑の手が震えていることには、輝夜も、紫苑自身でさえも気付かない。藤色の視線の先の紅の瞳には、明らかな戸惑いと怖れの色があったのだが。

「……今は魔導院にだって人が居ないの。あなた単独での行動は

許可できない」

「私とて冴月の者、外道一人に……」

「とにかく、駄目！」

輝夜の言葉を遮ると、紫苑はもう話すことはない、とばかりに背中を向けて歩き出す。

「……は」

不承不承輝夜は頷き、その後を追った。

胸中に、ある決意を秘めながら。

第四話 蛮勇と代償

い草の香りは、嫌いじゃないわね。

紫苑がこの部屋に抱く感慨といえば、その程度のものだ。

何種類もの礼装が詰まった桐箆笥と、部屋着の入った行李、それと離れから持ち出した数冊の書物しかない部屋は、彼女がこの邸の主のひとりであるにも関わらず、邸内の自室で過ごすことがいかに少ないかを物語っている。

そこで出立の準備をしながら思い出すのは、先年に公務で訪れた、エル・ネルフェリアでのことだ。

はじめての海外公務であり、行き先がかの古代魔術国家エル・ネルフェリア本国とあって、彼女は蘇芳が引く程に浮かれていた。

一行はエル・ネルフェリアの王城たる水晶宮の何部屋かを滞在の場として供されたが、子供のようににはしゃいでいた彼女は、賓客としての不自由はないが窮屈な扱いに耐えかね、よく部屋を抜け出しては外に歩きに出っていたのだ。

「おや……？ 斯様な場所に、どなたかな」

背後から声がかけられたのは、水晶の透過光で青く染まった、宮殿の奥まった一角でのこと。人の気配がしない、静寂に包まれた場所で、その声はよく通っていた。

振り向いてその姿を目に収めただけで、相手が強大な魔術師だと理解できた。自身の背後に突然現れたように思えたのは、気配遮断か、或いは応神でも片手で足りる程の術者しかない本物の空間転移か。紫苑は若干の警戒と、それ以上の好奇心を胸に、現れた人物を観察した。

エル・ネルフェリア王家に共通する癖のないブロンドと、氷色の瞳に、長身だが華奢な体躯。物語から抜け出てきたかのような貴

公子然とした容姿は、完璧に過ぎて、それ故に言い知れぬ心地の悪さを感じさせるところがあった。

「その服装……いま逗留なさっているという、東の姫君ですね？」

「左様に。月夜見宮家の紫苑と申します。貴方は？」

「女性に先に名乗らせてしまつとは、これは失礼。ユリウス・レピドウス・クラウディウスです、外つ国の姫君よ」

クラウディウス家はエル・ネルフェリアの王室だ。歓迎式典の時に姿を見なかった第二王子の名前がユリウスだったかしら、と紫苑は自身の記憶を確かめた。

それから、互いの部屋で紅茶を飲みながら、それぞれの国を取り巻く国際情勢や魔術についての話をした。符術の行き着く最終形とも言える魔導機械のことなどは、特に興味深く聞いたものだ。

それはユリウスにとっても同様だったようで、応神特有だという符を応用した個人による多数術式並列制御のことについて、色々なことを聞かれた。

そこには異なる国の貴顕同士といったてらいやしがらみもなく、ただ二人の魔術を求道するともがらだけが在った。ただ興味の赴くまま、話題を二転も三転も四転もさせ、卑近な噂話から学問上の話題までも語り合ったあの数日間、黄金にも勝るほどの貴重な時間だった、と彼女は自らの中に位置づけている。そして、そのよくな時間を共有できる相手こそ、「友人」と呼ぶのだろう、とも。故に、御神楽紫苑の中では、ユリウス・レピドウス・クラウディウスは友として記憶されていた。

その友の痕跡が、凄惨な事件の現場で感じ取れたのだ。数週前に、病に倒れたという報せを受け取ったはずの、友の痕跡が。

輝夜め、あの調子だと絶対に納得してないな……と苦々しく思う。あの時の自分は動揺し、冷静さをいささか欠いていた。感情に任せた物言いでは相手の論を封ずることはできても、その心中まで

塗り替えることはできないということ、紫苑はよく知っている。
まあ、冴月の家にいるなら大丈夫でしょう、と、このときは少々
楽観的に考えていたのだったが。

それから数時間して日も暮れたころ、皇国海軍舞鶴基地の貴賓室
で、紫苑は退屈な時間を過ごしていた。

この度進水する戦艦『扶桑』は、皇国海軍初の戦艦であり、部分
的ながら皇国内の造船所で建造が行われたなど、皇国にとって様々
な意味で記念すべき艦だが、紫苑にしてみると、あまり興味を惹か
れるものではなかった。戦艦が一隻だけあったところで、ハツタ
リ以上の意味は恐らく無い、と彼女は思っている。

結局、戦力はそれを發揮しうる環境を整える戦略や運用法があつ
て初めて意味を持つ。そういう意味では、多数の人員を必要とし、
大量の資源を喰う大型水上艦より、個人レベルで重砲級がそれ以上
の砲撃力を發揮し、また他の戦術にも対応しうる魔術師の方が柔軟
性で勝る、と紫苑は考えている。もともと、魔術師の才は天賦の
ものであり、ある程度の水準を越えると努力では埋めがたいところ
があるのに対し、このような戦力は一般人に適切な教育と訓練を施
せば運用が可能となる、という利点があることは認めていたが。
しかも、魔術師は単独で水上には出られない。

逆に、この手の戦艦を沈められてこそ、って時代になるのかし
らね？

そんな事を考える。陸戦においては、後装式ライフルの普及に
よる射撃間隔の大幅短縮と射程の長大化により、並の魔術師の大多
数が役立たずの烙印を押された。あるいはこの種の艦が搭載する
艦載砲や、陸戦において運用される大型砲が、自分たち魔術師を凌

駕する時が来るのかもしれない。

そこまで考察を進めて、軍事のことをこつても考えるお姫様、つてもどうなんだろう、と紫苑は自嘲気味に苦笑した。とはいえ、彼女は自身の本質は皇族だとか内親王だとか、そういったものよりも、父親につきつきりで叩き込まれた魔術というものを探求する学究の徒だと思っていた。魔術およびその使用者の価値について、さまざまな側面から考察することは、むしろ自然なことだった。

それにしても、豪華は豪華だが、何も無い部屋だ、と紫苑は思う。白い壁と四方に立つ柱には金色の 多分メッキだろうと信じたくなるようなレベルのきらびやかな装飾がなされ、豪華な天蓋つきのベッドと、来客を迎えるためのテーブルおよび椅子一式が揃えられている。もちろん調度品各種はエル・ネルフェリアを経由して輸入された最高級のもの。扉の側には常に侍女が控え、恐らく紫苑が望めば、たいていの事は叶うだろう。

「そのあなた。紅茶を持ってきて頂戴」

「かしこまりました」

そう申し付けてみれば、完璧な答礼を返してショートカットの侍女は扉の外へと消えてゆく。しばらくすれば、香りも味も完璧な紅茶がここに運ばれてくるはずだ。この竣工式には設計に関わった海軍大国アルビオンの海軍軍人や技師たちも招かれているため、本場の味を知る彼らを満足させうる茶匠が呼ばれているのだ。

逆に、料理の方に入られた気合は紅茶ほどではないんだろうなあ、と紫苑は勝手な想像をする。アルビオンの料理はまっずいらしいし、こつちの水準程度の味ならあいつらは美味しい美味しいって食べるでしょうね、と。あ、でも応神料理って口に合うのかしら？ 合うわよね、どつちも魚がメインだし、と。

紅茶が届いた。相変わらず、侍女の仕草にはそつがない。

「ありがとう」

紫苑が優美な笑顔を作ってみても、侍女は表情ひとつ変えずに会釈するだけだった。初音とかいったっけ、面白くもなんとも無い

わ、と紫苑は意識から侍女の存在を抹消する。確かに側仕えとしては完璧かもしれなかったが、紫苑が自身の側にあるものに対して求めることは、そんなことではなかった。

ここには蘇芳いないし、理緒もおらず、輝夜もいない。魔導院やかがりび横丁の人々含め、紫苑が日がな親しくしている人間は誰もいなかった。なんと面白くないことだろう。弄る相手も、言葉遊びを楽しむ相手も、何かを教え込む相手も居ないのだ。もちろん読む本も、気が向いた時に使う調合器具や実験機材も、符製作の特別紙も、愛用の筆もペンも突っ掛けもクローゼットも服もコーヒースセットもティーセットも何もかもが無い。それらに変わる暇つぶしの種も、少しも見出せない。

仕方がないので、無機物よりは有機物のがマシよね、と思いつながら先程意識から排除した侍女の観察を再び開始する。相変わらずの鉄面皮は少しも揺らぐ、扉の横に控えて指示を延々と待っているように見えた。均整のとれたスタイルに白黒の侍女服を完璧につきりと存在感を主張している。完璧だった。

ここまで完璧だと、人形のようにすら見えてくるわね、と紫苑は思う。絶対に何かアラを見つけや、と意地になった紫苑は、目を皿のようにして観察を続ける。

果たして「アラ」はあった。それも紫苑の冗談めいた思いが的中する形で。生物に見えた侍女は、その実そうでなかったのだ。首筋から耳朵にかけて存在する、肉眼では判別不可能なほどの僅かな継ぎ目。まさか、これがエル・ネルフェリアの自動人形か、と紫苑は眼から鱗が落ちる想いだった。

この侍女は記録するに値しない、とした自身の認識を紫苑は訂正した。この侍女は、恐らくこの舞鶴基地の中であって、自分にとって最高に面白い存在である、と。

彼女はにんまりと微笑むと、直後にすまし顔をつくり、侍女に向かって手招きした。それに気付いた彼女は、無表情のまま足音も

立てずに近づいてくる。

「何か御用でしょうか」

紫苑は、ここは直球で攻めることにした。

「あなた、製造年と型番、それから個体名は？」

「A・Z・2997年製造、『なでしこ』型007番、個体名は

『初音』と申します」

質問には流暢な答えが返ってくる。別段、自動人形だということとを隠すつもりはないらしかった。

「此度は御神楽内親王殿下付の侍従を拝命しております。お困りの儀がございましたら、何なりとお申し付けくださいませ」

この下りは最初に聞いた。なるほど、あのときは名前を聞いただけだから、最初のふたつについては答える必要がないと判断したのね、と紫苑は考える。

「あなたはやけに無表情だけれど、自動人形ってのはみんなそうなの？」

「わたくし達『なでしこ』型は応神皇国向け輸出用として設計されましたので、皇国における活動に支障なきようデザインされております。奥ゆかしさが美德です」

「それと無表情は何か違う気がするなあ」

この子の設計者はどこかズレた認識を持っていたらしい、と紫苑は苦笑した。

「また、私達自動人形は奉仕する者として最適化されております。

故に自らの個性は最低限になるよう調整されているのです。接客任務にも対応できますので、笑えと主が命じられるならば、笑うことも可能です」

「ふうん。じゃあ、ちょっと笑ってみせて？」

という言葉に対して、初音はにこりと笑ってみせる。感情に類されるものがあるかはともかく、微笑むという機能は実装されているようだが、少し残念にも思えた。ここで大爆笑をするという展開を、紫苑はひそかに期待していたのだが。

「なるほど。……うん、面白いわね」

「面白い？」

さらに興味深い反応を初音は示した。紫苑の言に対して首をかしげたのだ。

「殿下は面白いと仰せられましたが、先程のわたくしの言動はライブラリの『面白い』カテゴリに属しておりません」

「ああ、そうか。なるほど……多義語に関しては一義的な解釈しかできないのね」

「仕様です。申し訳ございません」

そう言つて、夕霧は頭を下げる。多義語や同音異義語が多い応神語に対する対応の不備か、あるいは人工知能の限界なのかは知らないが、いつそ仕様と言い切るあたりが潔くて素晴らしい、と紫苑は頷いた。

「で、その『面白い』カテゴリにはどんなのが？」

「皆様を楽しませるに足るものが収められていると自負しております」

「へえ、どんな。ちょっと一つ披露してよ」

「ふとんがふつとんだ」

真顔で言う初音に、紫苑は少しくらりとした。多義語の多義解釈はできないのにいつちよまえに駄洒落機能はサポート済みか、と一体設計者は応神皇国をなんだと思つているのか。或いは、エル・ネルフェリアという国の風土がぶっ飛んでいるのか。

そこで、紫苑は頭痛を押さえ込むようにこめかみに手を当てながら、さらに問うことにした。

「……ところで、具体的に応神仕様ってどんなのよ？」

「少々お時間をいただければ、解説が可能です」

「お願い」

紫苑が頷くと、初音はこほん、と咳払いして口を開いた。

「原型の『リリー』型より頭髪をブラックに変更、肌の色味を若干濃く、身長およびスリーサイズを若干小さくしております。これ

は応神皇国の皆様の標準的な外見に合わせた仕様となります」

「ふんふん」

「さらに応神様式の衣装に対応。着付けプログラムのインストールにより、サポートも万全です」

「ほかには？」

「新開発スタビライザにより急回転時の安定性の向上に成功し、『よいではないか』に対応いたしました」

「え？」

「また、いかな状況においてもご奉仕活動を継続できるよう、頭部・胴部を分離しての自律行動をサポートしております。ハラキリおよびカイシャク機能も実装されており、主様の終のお世話も完璧にこなすことが可能です」

紫苑は今度は頭を抱えた。絶対に何か歪められて伝わっているであろう皇国のイメージ、この自動人形を開発した設計者、そしてそれを生んだエル・ネルフェリア、色々なものが心配になってきた。思えばユリウスと知り合った公務のときも、時々妙なおかしさが見え隠れしていたような気がする。

「これほどのアップグレードを施したにも関わらず、価格は『エルザ』型より据え置きの六万ソリドルです。皇国の単位に換算すれば、二十万円程度となります」

聞こえてきた金額に、さらに頭が痛くなる。二十万（現代日本換算で二千万）といえば、月夜見宮・御神楽家の家政をまる一年は維持できる額だ。こんなもん買った馬鹿はどこどいつだ、という思いがこみ上げてくるのを紫苑は感じた。私直々にその英断を賞賛してあげよう、と紫苑は心底からの笑顔で初音に声をかけた。

「初音、悪いけどマスターを呼んで」

が、帰ってきたのは意外な返答。

「おりません」

「うん？」

「わたくしはプロモーションのため、エル・ネルフェリア本国のゾ

ディアック・インダストリアル本社より派遣された機体です。”
日用品から飛空艇まで”をモットーといたします我がゾディアック・
インダストリアルは応神皇国を非常に有望な市場と認識しております。
先日、当社製品の輸出制限が本国下院の議決により緩和され
ましたので、わたくしを初めとした十六体の『なでしこ』型および
十体の『リリー』型自動人形が、皇国各地の主要施設にゾディアッ
ク製品のプロモーターとして派遣されることになったのです”
プロモーター自身が、プロモーションされる『製品』でもある、
というわけである。

「なるほどね……京では見なかったけど、あなたの姉妹」

「一部より強い反対があったと、聞き及んでおります」

ああ、また九条か、と紫苑は心中納得した。無理と無茶と神秘
が現役で稼働中の光宮の中で日々を過ごしているクセに、外国のも
のというだけで未知のものに拒否反応をあからさまに示す頑固な老
人の顔が思い浮かぶ。よりにもよつてこの種の存在の蚕食を一番
許しているのが、国家の中枢たる光宮なのだ。富国強兵を国是と
しているくせになんて様だ、と思っているのは、恐らく自分だけ
はない、と彼女は確信していた。

「現在は御神楽殿下を仮のマスターとしてお仕えさせていただいて
おります。殿下が滞在なさる間、誠心誠意ご奉仕いたしますので、
どうぞゾディアック社ともども、宜しくお願いいたします」

「そうね。あとで、京の二条院に目録でも届けて頂戴」

「承りました。では、わたくしはまた控えておりますので、必要
がございましたら何なりとお申し付けください」

思わぬ退屈しのぎができたことに満足した紫苑は頷いて、翌朝の
式典のことに集中するのだった。

「やあ、こんばんは」

ひとりでに開いた白い扉の向こう、昇降機の発着するホールの側に立っていた人物は、ほがらかにこちらに向けて声をかけてきた。

「これは月読宮様、斯様な所に何の御用でしょう」

皇国魔導院の両翼のうちの片方を預かる男、弓削鷹亮は慇懃にそれを受ける。挨拶の主は、月読宮家の当主、御神楽蘇芳だった。

「こちらへどうぞ」

察した鷹亮は、すぐ近くにあつた白い扉を指し示す。それに反応してか扉が開き、少人数での会議に利用されている小部屋への道を作った。会釈して蘇芳は歩き出し、鷹亮もそれに続く。

二人が部屋の中に入ったところで扉は閉じ、鷹亮は口を開いた。

「あまり御身を運ばせ給うな。鼠どもが、いつ気がつくとも限りませんぞ」

「それで釘を刺しているつもりか、鷹亮。人もおらんし、過日の通りにせよ。私もそうする」

座るよう促されてもいないのに椅子に腰掛けつつある蘇芳の声は、入ってきたときは質が一変していた。

「……まあ、言ってもお聞き入れくださらぬだろうとは、予期しておったがね」

鷹亮の謹厳そうな風貌には、諦めの色が濃い。彼はこの兄妹が幼少だった頃から、ほとほと手を焼かされてきたのだった。

「なら無駄なことは止めるのだな。安心せよ、無体はせぬ。今までどおり、汝らが集めてきた情報を、支障の出ぬ範囲で、かつ可能な限り私に提供してはくれまいか？」

そののどが無体ではないのだ、という思いも、やはり鷹亮がいつも抱いてきたものだった。

皇国魔導院の本局は、光宮の下層部、四階から一五階までを占めている。他に局員宿舎として大内裏の外れにいくつかの建物

を有しているが、この場所が皇国における魔術の総本山といえた。

魔導院とはつまり、魔術師と関連技術の監督官庁であるため、皇国における魔術がらみの情報のほぼ全てがこの場所に集まってくるのだ。また『禁軍』の本拠地でもあるため、皇国最強の戦闘集団が駐留する基地にも他ならない。

ということと蘇芳は、皇国最強の戦闘力と諜報力を併せ持つこの機関に、情報を得るために足繁く通っているのである。

内務省もまた、治安維持の他に内偵および外諜を目的とした機関ではあるが、卓越した実力を持つ魔導師たちを擁する魔導院にはやはり及ばない。軍事・情報の両面において突出した権能を持つ魔導院の存在こそが、光皇の強大な権力を支えているのだ。

しかし、魔導院はただ光皇その人へのみ忠誠を誓い、その力はただ光皇と皇国のためにのみ振るわれる。継承権を持つとはいえ、ただの宮である蘇芳には、魔導院の人員のただの一人に対してさえ、その指揮権を行使することはできない。

指揮することはできない。命令を下し、自らの意に従わせることはできない。では、「要請」ならば？　そう蘇芳は主張する。

屁理屈としか思えない言い分だが、事実として、魔導院の地位を定めた詔勅に、「協力を要請してはならない、また魔導院の者が他者に与力してはならない」などと解釈しうる文言は一言たりとも書かれていないのだった。

しかも、鷹亮やこの場にはいない安倍黒章たち魔導院の首脳は、口にもそ出しはしないが、光皇不在の「御前会議」において、九条をはじめとした守旧派が台頭してきているのを苦々しく思っている。彼らと彼らの前任者たちは、光皇が主導する帝政復古、およびその後の諸改革を成し遂げるにあたり、西大陸の列強の支援を受けた幕府勢力や雄藩勢力を押しつけるなど、政戦両略、明暗両面にわたって活躍した者たちだからだ。

陛下がご健康であられればな、と鷹亮は思う。しかし、光皇は病によって床に臥し、皆も老いた。ならば、この今代の御神楽を

はじめとした若い者達に託してみるのも悪くはない、そうも思っている。

「ときに」

数人の事務官たちが運んできた報告書や書類の束をめぐっていた蘇芳が、思い出したように口を開いた。

「『第零番例外居留区』、ようは篝火横丁ですが……その近辺で起きている事件ですが、鷹亮殿は何かご存知で？」

鷹亮の指示でせわしなく事務官たちが紙束を運び入れてくるせいか、口調は猫を被っている。こういうところがやはり兄妹なのだ、と彼は知らず苦笑した。

「……葛葉から、ある程度は聞いておりますが」

「妹が何かを掴んだようだ。舞鶴から戻ったら直ぐに動き出すでしょうが、早とちりの気がありますからな、あ奴には」

「ま、それでも私は特に心配するところは無いですな」

蘇芳の言葉を、鷹亮はさも当然といったように頷いて受け容れる。事実、彼はかの内親王が何かを掴んだ以上、どのような形であれ、事件が解決することには疑いすら抱かなかった。だが、それとは別の心配事がひとつ浮かび上がる。

「……ですが、それとは別に、ひとつ不安があります」

蘇芳が不思議そうな顔をした。こういう変なところで抜けているのも、やはり兄妹だからだな、そして親子だからだろうな、と鷹亮は常々感じている思いを新たにす。しかし自分は動くわけにはいかなかった。光皇の命なくして、魔導院はその力を振るってはならないのだ。建前では。

故に鷹亮は、その可能性を口にするだけに留める。

「内親王殿下が、随分と目をかけてらっしゃる、冴月殿の娘御。」

殿下は昨日の葛葉との会見に、彼女を伴って行かれたのでしたね」

「あれは渋っておりましたがね。門前で待ち構えられては、もう連れていくしかないとぼやいてましたよ。強情なところは誰に似たんだ、ととぼけていたので、お前だ、とも言っておきました」

鷹亮は確信した。本当に気付いていない、と。

「彼女　輝夜嬢は。この状況で何もせずに居られるほど、冷静でもないし、薄情でもないでしょうな」

その言葉を耳にした蘇芳の反応は劇的だった。虚を突かれて驚いているような、或いは解けないでいた問題があっさり解けてしまつて拍子抜けしているような、そんな顔をしたと思えば、急に頭を抱えて机に突つ伏してしまつたのだ。

「無謀と勇気の区別がつく年でもなし、そんな経験もなし。危ういはず」

鷹亮は容赦なく追撃の一言を発し、蘇芳は起き上がるとうめくように声を発した。

「今頃、紫苑は舞鶴にいる頃でしょうが……もし耳に入れば無理やり帰つて来かねない。そうでなくとも、明日以降のことが不安でならない」

「知りませんが、私は」

再び頭を抱える蘇芳に、鷹亮はやれやれと肩をすくめた。言葉

とは裏腹に、彼は既に手の者を動かし、輝夜の所在を探させている。冴月邸に居るならばそれでよし、そうでなければ早急に確保しなければならぬ。階級でみれば一介の少尉といえど、冴月輝夜は現在の皇国において微妙な位置にある存在であり、その身柄の無事はそれなりの重要事なのだ。

そしてふと真剣な顔に戻つて、鷹亮はひとりごちるように疑問を発する。

「それにしても、先方、果たして気付くものかな……」

「火遊びをしている場所が、火薬庫の真上だということに？」

蘇芳が返すと、鷹亮はやれやれと肩をすくめた。

篝火横丁の喧騒の中であって、それでも人の目の届かぬ、いくつも存在する死角。

輝夜がこの場所にたどり着いたのは、紫苑から教えられたあることを意識していたからだった。

「人払いの結界、結界術式の中でも割と簡単なものよ。効果は単純、この結界の内側には、人は『なんとなく』入りたくなくなる。

逆に言えば、その場所を強く指向する意思に対して、この結界は無力」

何も知らない部外者を立ち入らせない程度の用途なら、これが必要十分なのよ、そう彼女の主は言っていた。

そして輝夜は考える。事件の中心にいるなにかがこの横丁に居るとして、自身が居る場所に人が立ち入ってくることを、果たして望むだろうか、と。答えは否だ。かといって大規模な結界術式はすぐに露見する。

彼女はその結論に至ってから、自身が「ここには何もないだろう」と認識しかけた場所に、あえて脚を踏み入れていった。案の定、そこは人通りまばらな路地。しかも奥に進めば進むほど、「この先には行くな」と、自分の中の一部分が強く訴えかけてくるような気がした。

間違いない、と彼女は確信するに至った。事件を引き起こしたなにかは、ここにいる。

確信し、彼女は背負っていた袱紗を解いた。中から現れたのは、彼女の背丈には不釣り合いな、黒い拵えの鞘に収められた大刀。

「……頼むぞ」

呟きは、願うというよりは、決意のためのもの。彼女は自身の目の前に刀を持ち上げると、意思の籠った瞳で鯉口を切り、白銀に輝く刀身を露にした。

鞘は腰に差すには長すぎたため、袱紗をよじった即席の紐を使って背負う。いざとなれば、これも打撃のための武器となる。だ

が輝夜は二刀流を修めたわけではなく、また刀と鞘では重量も重心も違う。不意をついての一撃に使って終わりだろう、と思っていた。

輝夜は思う。……私は、何故ここにいるのか？

決まっている。勝つためだ。勝つて、そして

一步を踏み出す。また抵抗が強くなるが、この先に行かなければならない、という意思がそれをねじ伏せる。それから、また数十歩歩いて、曲がり角をひとつ折れた瞬間。

抵抗が、消えうせた。それはつまり、結界の完全な内側に入り込んだ、ということ。

「……！」

直感と行動は同時。背後に現れた気配を、瞬時に刃をもって迎撃する。鈍い金属音が響き、襲い掛かってきたものは一旦距離をとった。

確認の必要はないと輝夜は判断した。先に仕掛けてきたのは相手で、状況は全てが打ちかかってきた存在が下手人だと告げている。利き脚を軸にして振り向けば、そこには月光の照らす下、棒のような影を地面に落とす人物がいる。

二人の人間を文字通り『喰った』と思わしきものが青年の形をしていることが輝夜には意外に思えたが、こちらを見据える瞳には、確かな知性の光がある。

瞳の色は 主と同じ血の色。短く切りそろえられた髪は赤銅色。一目で皇国の人間でないとわかる容貌だ。

「貴様……何のために、四人もの人を殺めた!？」

叫ぶような問いと共に切っ先を相手に向け、半身を反らしてゆく輝夜。相手は動かないばかりか、表情には僅かに戸惑いすら伺えた。

しかし輝夜は答えを待たなかった。

「はッ！」

限界まで引き絞った弦から矢を放つがごとく、彼女は一息に刀身

を突き込む。腕を捻るように回転させたのは、貫通力をさらに増すため。

「！」
相手はそれを後方に退くようにしてかわす。かかった、と輝夜は心中で快哉を上げた。青白く輝く気刃が、切っ先から風切り音と共に翔んだ。

命中、敵の身体が「く」の字に折れ曲がって吹き飛んだ。鳩尾の急所を狙ったそれをまともに受ければ、並の人間なら悶絶することは請け合いの一撃。しかし輝夜はさらに追撃を重ねる。

脚甲の術式が光り輝き、後方へ飛んでゆく敵に追いつかんばかりの勢いで輝夜は疾る。引きずるように構えた刀を勢いをつけて振り上げ、追撃の衝撃破を飛ばす。

まともに受ければ、普通の人間ならば昏倒は確実。最悪、絶命しかねない連続攻撃だ。さらに輝夜は地を蹴り、衝撃破を飛ばすために振り上げた刀身をさらに大上段に構え、板塀にしたたかに打ち付けられた相手めがけて振り下ろす。

その一撃は、すつと伸ばされた異形によって受け止められた。

「!?!」

尋常の膂力ではありえない。振り下ろされる刀身を片手で掴み、微動だにさせないまま支えている毛むくじらの太い腕。人間のそれとはかけはなれたものを目の当たりにし、輝夜は今更ながらに眼前の敵手が恐ろしくなった。

そして響く、甲高い音。

腕に感じていた抵抗がなくなり、握る手が開かれたそこにあるのは、切っ先が消失した愛刀。

「……!?!」

にい、と敵が鋭い犬歯もあらわに嗤う。直後、足元で何かが乾いた音を立てた。

呆然とした輝夜が、それは折れ飛んだ切っ先が立てた音だと認識する間もなく、鳩尾に拳が突き込まれ、彼女の身体は力を喪った。

だらりと垂れ下がった手から、刀が落ちてからんと音を立てる。

輝夜を倒した何者かはそれには目もくれず、少女の華奢な身体を事もなげに抱え上げると、路地裏の闇へと溶けるように消えてゆく。

あとには、ただ、月光を反射して輝く折れた刀だけが残されていた。

第四話 蛮勇と代償（後書き）

やっと話が動き始めた感が。

正直説明が多すぎるかなとも思うんですが、でも説明しなかったらしなかったで恐らく説明不足になる予感。

「日常」みたいにノリで押し切るわけにもいかないし、難しい。

9 / 5 章編集にともないタイトル改訂、いくつかの表現を修正

第五話 硝子細工のケモノ

何と言うかな。

あ奴は不遜だし、傲岸だし、不敵だし、傲慢でもあるし、棘々しいし、そして勇ましく、気高い。

誰ぞ、あれのことを雌獅子と例えた者もあつたな。しかし……酷く脆く、そう、硝子の如き危うさ、脆さを持ってもいる。

本当に恐ろしいのはそこだ。その脆き硝子細工を、命知らずにも叩き割った者がいるとしよう。

その者は只では済むまい、鋭い硝子の欠片は容赦なくその手を傷つけ、血を流させるだろう。

ましてその硝子細工の内に、煉獄の火と形容できようほどの烈火が渦巻いている、となればな……。

御神楽蘇芳、妹を評して曰く。

「輝夜が!?!」

魔導院からの伝令が告げた言葉に、紫苑は激しい動揺を見せた。柳眉はきつとつり上がり、眼をかつと見開いて伝令の肩を掴む。

「お、落ち着いてください殿下」

「あの馬鹿……!」

紫苑は後悔していた……が、後悔は先に立たず、仮に立てたとし

てもどうしようも無かった。既にこの舞鶴行きの予定は確定していたし、皇族としての仕事をこなすことは、自身が果たすべき最低限の責任であると、紫苑は考えているからだ。自身の奔放な振る舞いが天照に許されているのも、こうして責任を果たしているが故だ、と彼女は思っている。

とはいえ迂闊だった。輝夜の性格を考えれば、自分が不在の間に動きかねないことくらいは容易に想像できたはずだ。もっと強めに釘を刺しておくべきだった、とか、蘇芳や輝夜の父にも協力を頼むべきだった、とか、そんなことが頭をよぎる。

いや、”IF”は厳禁！と紫苑は顔を上げ、青い顔の伝令紫苑への連絡に駆り出された『禁軍』玄武支隊所属の青年を八つ当たり気味にひと睨みすると、決然と立ち上がった。その秀麗な顔立ちは今にも泣き出しそうに歪んでいるが、細められた眼の奥の瞳だけは、烈火のごとき輝きを放っている。

思わず地団駄を踏みそうなほどにその感情は荒れ狂っているのだが、それで事は動かないことはわかりきっている。仮にそうすることで何かが進展するなら、この舞鶴基地の床をことごとく踏み抜く程度のことにはするかもしれない。か。

「今すぐ京に戻るわ。そのの、ええと……」

「『なでしこ』型007番、初音でございます」

相変わらず扉の脇に控えている自動人形の側に紫苑は歩み寄り、何事か耳打ちする。

「かしこまりました。復唱します」

「しなくて良いッ！とにかく体調が優れないだとかで押し通して」

「承知いたしました」

すまし顔で一礼する初音。どうしてあなたは、と紫苑は言いかけて相手が人形であることを思い出す。そこで、伝令の青年が我にかえった。

「し、しかし殿下！この後は祝賀晩餐会が」

紫苑の予定を思い出し、思いとどまらせようとする青年の一言は、

しかし火に油を注ぐ結果にしかならない。

「黙れ、下郎！」

「ひっ」

理不尽に道理を粉碎する怒声と共に、感情が具現化したかのような熱風が吹きつけ、絨毯の毛がちりちりと音を立てる。伝令が平謝りするのを聞き流しながら、紫苑は身に纏っている豪華な礼装の袖を引つ張ってみせた。

「初音、手伝いなさい。これ脱ぎにくいの」

「はい」

「あんたはさつさと出て、あとから私の荷物を京に運ぶ手配！」

「は、ははあっ！」

初音を従えてクローゼットの前に移動する過程で青年の尻に向かつて叱りつけ、その間に思考は高速で展開する。輝夜は何と遭遇したのか、まだ生きているのか、この無茶を押し通すことよって生じる御小言おこごんにどう対処するか、蘇芳はどんな言葉で私を嘲笑うか、それにどう返してやろうか、もし生きていたとして輝夜は私の顔を見て何と言うか、傷ついたであろう彼女にどう接するべきか、そして相手にどれだけ残酷な報復をしてやろうか、まとまりのない思考が入れ替わるように連続し、吐き出される結論は幾つかを除いてすべて「不明」。こんなにも自分の思考力はお粗末だったか、と紫苑はまた齒軋りした。

その表情からは、普段の余裕は微塵も感じられない。そんな彼女に一番驚いているのは、ともすると彼女自身なのかもしれない。何故こんなにも動揺しているのか、その根差すところを確かめるためにも、彼女は今急いでいた。

「お待ちなさい、姫君よ」

京の郊外、人気の無い街道を飛ばしていた紫苑は、その声を聞いて前方に立つ魔術師の姿を認識した瞬間、全身にみなぎる感情を魔力に変えて叩きつけたい衝動を抑えるのに全力を尽くさねばならなくなつた。

「ふう……私の首は皮一枚で繋がつたようだ」

肩で息をする紫苑の前でやれやれと肩をすくめるのは旧知の顔。

激情を押さえつけてなお、周囲に広がる早春の草原がちりちりと音を立てる。

「ユリウス殿下!？」

それは黒い棒のような姿だった。黒ずくめの司祭服と白い肌の中で、切り揃えられた金色の髪と蒼氷色の瞳だけが色を主張している。目の前の姿は、エル・ネルフェリア王国第二王子ユリウス・レピドウス・クラウディウスという属性を持つていたはずだが、何故このような場所にいるのか？そして、路地裏で感じ取つた、あの魔力の残滓。

「……解らないことだらけだわ!」

銀色の髪を振り乱して吼えれば、今度は草が千切れて火の粉と化した。

「混乱してますねえ。無理もないとは私も思いますが、なんとか押さえていただけますか。山火事になりかねない」

「相変わらず迂遠な物言いが好きでいらつしやる。用が無いなら退いてくださらない!？」

「いえいえ、お伝えしたいことが。まず、私は『例の件』の調査を仰せ付かっているのですよ。姫殿下なら、きっと私の痕跡を捉えていらつしやることと思いますが」

「……正解ですわ殿下。それで何か掴めました?」

口調くらいは平静を保とうと紫苑は努めたが、その目論見が成功しているかどうかは自信がなかった。笑顔もきつと引きつっている。

「まずひとつ。今回の件の犯人は……自己変容術者だ。非常に特異な形態の魔術であるが故に、先天的な素質無しで行使することは難しい。被害者は、彼ら彼女らに親しい者に変容した犯人によって、人気の無い場所に呼び出されたようですね。それからもうひとつ、他者から霊子を直接奪わねばならぬ程に傷ついていた。ここ数日は落ち着いている様ですが」

「霊子を奪う……そうか、喰ったということは、そういう意味もあるか。私は食人嗜好か吸血依存だと思ってた……」

「術式暴走で構成霊子をかなり失ってしまった、ということでは
ないかと」

魔術学においては、物質の根幹は霊子から成るとされる。

応神においては、数少ない天魔戦争以前の文献に残されている物質創造魔術の記録が論拠の、あまり主流とは言えぬ説だった。が、現代の魔導王国エル・ネルフェリアを支える物質変換術が「物質を構成する霊子を操作する」という、かの説の裏づけとなるものだったため、一気に定説となったのだ。

魔術行使の際には通常、周囲の空間に存在する霊子を内部に取り込んで貯蔵した”魔力”を消費するが、万が一魔術が暴走した際に、魔力を消費し尽くし、自身の構成霊子までが術式に吸われてしまうことがあるのだ。

「構成霊子を三割以上失った存在は崩壊を始める。人間とて例外ではないものね」

「それを止めるには霊子を他所から奪う他ない。人間には人間が最も適する」

「……故に喰らった。それで？」

「私はそれを追っていた。 昨晚、貴女の従者が交戦し、敗北した場面に、私は寸でのところで間に合わなかった……」

その言が、紫苑の感情を封じ込めていた扉が打ち破られる切欠となった。 圧力すら感じるほどの魔力が紫苑から解き放たれ、ユリウスの頬に一筋の汗が伝う。

「安心なさい、彼女は無事だ。 奴は何者かからの指示を受けて行動しているらしく、倒れた彼女を何処かへと連れ帰ったのです」

「利用価値があると踏んだ……ということ？」

紫苑の脳裏に真つ先に思い浮かんだのは、兄ら改革派の政敵、国粋派の領袖たる左大臣・九条頼常のでつぷりとした顔だ。 とはいえ、老練な政治家として鳴らしたはずの九条が、しかも兄ではなく自分に対して、こうも短絡的な手段に出るものだろうか。 そう紫苑の冷静な部分は思考する。 確かに自分の西洋趣味は宮廷内で良く思われていないし、言動は反発を招くこともしばしばだが……。

「それで、どこに」

「……残念ながら、お伝えして良いと言われたのはここまでです」
冷たくなってゆく気配と共に、ユリウスはかぶりを振った。

「……殿下は一体、何処の飼い犬になられたのかしら。 友人として情けなく思いますわ」

す、と目を細め、紫苑は挑発の言葉を投げかけてみた。 しかし相手は苦笑を返してきただけで、それ以上の反応を示さない。

「まあ、京に戻られたならば、先方から何かあるのではないですかね」

その言葉が終わるのを待たず、飛行術式を再展開し、紫苑のつま先は砂煙と、そして火の粉と共に浮かび上がった。

「……行くのですね」

「殿下。 貴方の飼い主が、何を考えているかは私の知ったことじゃない……けど」

「けど？」

「降り掛かる火の粉の元は、跡形も無く吹き飛ばす。 殿下もどうぞ、ご留意下さいな……！」

前方に展開するのは五重の加速術式。 言葉を切り、空を蹴って一歩踏み出した紫苑の姿は、ひとつの術式に触れるごとに速度を増し、解き放たれた矢のごとき速さで疾駆してゆく。

「輝夜……！！！」

焦燥と、共に。

「さっさっさー、っと」

寒々しい風が吹き抜ける十一月、夕刻の往来。紫苑が居ないこととで日ごろの仕事から解放されている理緒は、竹箒を手に門前の落ち葉を掃き集めていた。

騒々しい主だったが、居なくなってみると案外寂しいものだ。

それに日ごろから同僚や先輩達が噂しているほど怖い人でもなかったし。

「お帰りになられるのは明日だったつけ。舞鶴に一日御泊りになって、明日の昼発たれるんだよね」

これでは自分が寂しがっているみたいだ、と可笑しくなって、彼女は内心で苦笑した。

そうこうしているうちに、門前にこんもりとした落ち葉の山ができてあがる。市で薩摩芋が安かったということと、そこで理緒は思いついた。邸内に財布を取りに踵を返そうとした際、遠くに見える影が、なぜか目に入った。

ぼろのような服を身にまとった、白い肌と、青みがかった銀色の髪。

「あれ、って……」

思い当たるのはただ一人。ただ一人だが 何故こんなところに、しかも、あんな姿で？

理緒が疑問を感じている間にも、影はずんずんとこちらに近づいてきており、はっきりと顔が認識できるまでになる。向こうも気づいているのだろうが、表情は柳眉が吊りあがった、一言で言えば凶悪なそれから少しも変化しない。

あ、あれ、私何かしたつけ、いや別にそんなことはないはず、と理緒は思わずここ数日の自らの行状を振り返りはじめた。

そうこうしている間にも彼我の距離はどんどん近づき、真紅の視線に射竦められたかのように動けなくなってしまう彼女の目の前に立ったぼろぼろの服をまとった内親王は、ただ一言だけ、

「……ただいま」

と告げ、門の内へさっさと入って行ってしまった。

「お、おかえりなさいませえ……」

かたかたと震える理緒はそれしか言うことが出来なかったが、「視線で死ぬかと思った」と、後に同僚に語るところだった。

「お帰りなさいませ、紫苑様」

倒れて寝てしまいたくなる自身に活を入れ、本邸の自室で服装を整えて向かった中庭。葉もほとんど残っていない池の中洲に、示し合わせていたかのように求めていた姿は在った。在って欲しい姿だったが、ユリウスの言が事実ならば、在るはずのない姿でもあった。

「ただいま、輝夜。まったく、心配させて……あれほど一人では動くなつて、言ったじゃない」

ともすれば暴発してしまいそんな感情と全身を包む疲労感とを、意思の力で抑え込み、紫苑は泣き笑いの表情を作る。

ことは慎重に成さねばならない。出力の調整を誤れば全てがおじゃんだ。慎重に術式の構成を思考しつつ、それと悟られぬように眼前の姿に歩み寄る。

「いえ、私の方こそ……軽率でした」

「ホントに悪い子だわ」

右足から踏み出して近づいてきた姿に目を細める。身にまとう応神の女性用軍衣の少尉を示す襟章、何よりも胸元に刺繍された「冴月」の紋が、それが輝夜のものだと物語っている。ごめんね、輝夜、あなたの一張羅駄目にしちゃうわ、と紫苑は内心で詫びて、

そして、行動した。

「そうね　お仕置が必要よね」

言葉を契機として、術式は発動した。展開された式に堰を切ったように魔力が流れ込み、術者が望んだ現象を世界へと顕現させる。「?!」

姿が、驚きと恐怖の表情を輝夜の顔に貼り付けて飛び退ろうとして、着地した先で平衡を崩しよるめく。あつたはずのものが消失したことで、体の平衡を取り辛くなったのだ。自身の右腕が丸ごと消失していることにそれが気づいたのは、その後だった。

否、”焼失”していた。袖の断面は黒く焼け焦げ、ぶすぶすと音を立てている。熱を感じる暇もない一瞬で、それだけのことが成された。

「良く出来た変装だったわ。自己変容術、見るのは私も初めてだった。疑っていないければ、或いは騙されたかもね」

それを成した術者は、口元に獰猛な笑みを浮かべ、自らの敵に射殺さんばかりの視線を向ける。

「けれどミスがひとつあった。単純といえばとてもとても単純なものだけねど」

ざ、と紫苑の履く草履が地面とこすれて音を立てる。輝夜の姿をしたままのそれは、苦痛と狼狽の表情のまま一歩後ずさる。

「あの子、左利きなの。利き足もね。簡単でしょう」

教授するような口調。そして次の式が起動され、十数のまばゆい光弾が彼女の周囲に浮かび上がる。

激痛に顔をゆがめた敵の姿が”溶けた”。ぐにやりと鉛細工のように変形し、中型の四足獣のような形態へと変容する。右前脚は欠けていない。輝夜の軍服が、抜け殻のようにぱさりとそこに落ちた。

「サイズは小さくなるけど、欠損部位の再構成も可能ということ？面白い」

一瞬だけ学究者の顔になった紫苑が、心底からそう呟いた。そ

うしている間に、獣に変態した敵は文字通り尻尾を巻いて逃げ出すとする。

「良おし」

想定通りの反応だ。即座に光弾を開放し、さらに眼前に加速術式を展開。追尾術式を仕込んだ光弾は、“当たらない程度のスレスレの距離”を何度も行き交い、相手の危機感を煽ってくれるはず。思考しつつ、クラウチングの体勢に入る。

「さあ……あなたは利口な犬かしらね」

そして、追跡を開始した。撃ち放った光弾は十六、その光跡を追い加速術式を突き抜け、まずは二条院の塀に飛び乗り走り出す。

敵も四足の形態のまま加速術式を前方に展開、しかしその形成スピードは紫苑に比べると遅い。それでも二重の式を起動しさらに加速するが、紫苑はそれに対して別の式で応じた。

舞鶴から京への強行軍をして理解したことだが、ただ”自身を加速させる”だけでは、身体にかかる負荷が非常に大きい。輝夜が符を通じて行うような筋力強化よりは幾分かマシだが、空気の抵抗や地面から伝わる衝撃が確実に体力を奪うし、服もボロボロになってしまふ。故に、紫苑が採った新たなアプローチは、負荷を削るというもの。

自ら眼前に展開した術式を突き抜けると、身体がふっと軽くなるのを感じる。自身にのしかかる空気抵抗、そして重力をも軽減する術式を一瞬で紡いでみせた内親王は、軽やかに塀を蹴って飛び上がると、敵の眼前に着地してみせた。

騒ぎに気づいた往来がにわか騒がしくなる。塀の下方を一瞥すれば、通行人たちが怪訝な顔でこちらを見ていた。視線を戻し、泡を食って急制動をかける敵に対して数条の熱衝撃波を放つ。それらはどれも命中せずに足元の塀の瓦やさらに下の地面を吹き飛ばしただけに終わったが、立ち上った土煙が敵の姿を紫苑から見え辛くした。

悲鳴が上がり、蜘蛛の子を散らすごとく二条大路を人々が逃げ

まどう。敵は土煙に紛れて大路に降り紫苑を撒こうとしたが、最初に彼女が放った光弾がそれを許さない。わざと追尾を弱められた十六発の魔術が、四つ足で地面を蹴って逃げる敵の数瞬前まで居たところを正確に射抜いてゆく。シャボンのように弾けた光弾から、飛沫のような残滓が飛び散り、夕暮れの往来に光を振りまいた。

光球が穿った地面の軌跡を紫苑は追う。敵は四足の先端だけを蹄に変え、さらに速度を上げた。朱雀大路との交差点をターン。

京の目抜き通りは人でごった返していたが、もとより大型犬程度の大きさの敵はその中をすりすりすると抜けてゆく。

一方で紫苑は大路の半ばで立ち止まり、敵の視界と感覚から外に出た。牽制の攻撃はもう放たない。人ごみに紛れて、自分を撒けた。そう思わせるために。敵の身体に付着させた魔力残滓を追えば、居場所は即座にわかる。都の人ごみの中から小石程の自身の痕跡を捜し出す。禁軍級の魔術師にしか出来ないような芸当だが、紫苑にはそのうちの、しかもかなり上の方にいる自負があった。物心ついてから父が亡くなるまでの十四年、かつて皇国最強と呼ばれた父のもと、ずっと厳しい教育と訓練とを受けてきたのだから。

全身が重い。ほぼ一日中魔術を行使し続けたせいで、三日分の魔力を使い切ってしまった。だけどね、と紫苑は胸中で呟いた。

あんたを、飼い主ごと消し炭にしてやる程度は、余裕だわ！自身を鼓舞しながら、紫苑は黄昏の都を疾駆し、京のほぼ中央に位置する邸宅の屋根の上で深く集中した。自らの存在を周囲に溶け込ませ、拡散させてゆくような心象を想起しながら、感覚を広げてゆく。

馴染み深い、自分の魔力を見つけた。脳裏に浮かぶ京の地図に、それは白い光点として明滅している。敵手を捉えた紫苑の心の水面は、しかし少しも揺らがない。彼女はただただ冷静に目標の位置を追い、予測される目的地を割り出すことに注意を注いだ。結

果、相手はどうやら京の西、嵯峨野や嵐山といった方面へと向かっている判明。

そのあたりには、九条家の山荘があったはずだ、と紫苑は自身の記憶を探る。記憶から探し出したその位置とたがわぬ場所で、意識内の光点は移動を止めた。

思わず笑みが漏れた。こうまで上手く行くとは、そしてまさか本当に九条の手の者だとは。

にいと口の端を歪めた紫苑は屋根を蹴り、黄昏の空を矢のように飛翔する。目指す場所はただひとつ。

恐らく、輝夜が現れたのは想定外の出来事なのだろう。しかし、九条頼常が宗重のどちらか、短絡的なこの手段からして十中八九宗重の思いつきめいた差し金で、輝夜はその場で殺される事なく拉致され、その外見は自身を暗殺する道具として使われたのだ。

紫苑としては、それだけで死に値した。

自身が行く先にはきつと罠がある。あるいは宗重は想像以上に阿呆で、成功を確信していて何も用意していないかもしれない。

紫苑にとっては、どちらでも良かった。立ちふさがる障害があれば、そのすべてを自身の炎で焼き払ってやるまでだ。

そして、宗重を、輝夜を殺さずに居てくれた事への最大限の感謝を込めて、丁寧に茶毘に付してやるう、そう意思を定める。

「ふふ、あはは……あははははッ!!」

含み笑いは、哄笑に変わり 硝子細工の獣は、今まさにその内に秘めた獄炎を溢れさせんとしていた。

そこは奥嵯峨と呼ばれる山中の、小さな山荘だった。伝統的な書院造に従った趣のある佇まいで、周囲はさる大貴族の所領として、

人々の立入りは禁じられている。その貴族の氏は藤原、姓は九条といった。

その床の間には、二十半ばに差しかかるつかという年頃の、神経質そうな青年の姿がある。

「ふむ……」

白い石を手に碁盤に向かっている彼だったが、意識はその盤上には無い。考えているのは、昨日手に入った思いもかけない収穫物がもたらす成果についてだ。

話に聞く溺愛ぶりを考えれば、”餌”に標的がかからない可能性は低い、と彼、九条宗重は踏んでいた。そもそもこの事態は完全に想定外のことだったが、それを期に常日頃から天誅を下さねばならないと考えていた相手に対して行動に出ることができたのだから、それもまたよし、というものだ。

なにしろ、その標的にはずっと辛酸を舐めさせられ続けてきたのだ。宗重自らも関与する、さる攘夷組織は”西洋かぶれ”の人物を襲撃するという事件を繰り返してきたが、紫苑を標的とした襲撃だけはことごとく失敗し、そのたび構成員が目減りしている。

今度こそは、成功するかもしれん。などと胸算用をしている彼の耳元に、どすんと、何か重いものが落ちる音が響いてきた。

「……？」

不審げに振り向いた彼は、恐ろしいものを目にするようになった。

「ごきげんよう、権臣相ごんのあしやうどの」

たちのぼる陽炎、吹き寄せる熱波。白銀の髪を揺らめかせ、御

神楽紫苑がそこにいる。

「わたしの不出来な従者が、どうもお世話になっているようで」

彼は反射的に逃げようとした。感情や打算抜きでの、本能的な恐怖を感じたが故だ。しかし、賢明に足を動かさずとしても、腰を持ち上げようとしても、少しも身体は動かない。貼り付けたような笑顔の中で微塵も笑ってなどいない、紅い視線に影を縫い止められてしまったかのようにだった。

「あら、面白いお顔とお声。　そんなに私がここに居るのが意外だったかしら」

逃走あたわずむなしく口を開閉させる宗重に、嘲弄まじりの声が浴びせられる。

嘲りの表情も露な内親王の、着物の裾からのぞく白い足の下には、黒い塊があつた。　それが何か、彼には理解はできなかったが、それが恐ろしいものだとは、はっきりと感じられた。

「お返しするわ」

彼女はそれを蹴つて寄越した。　宗重はこちらに飛んできた黒い塊を、反射的に抱きとめ、それに視線を落とす。　西瓜大の黒く丸い物体、ほとんど炭化した球体のある面にはいくつかの落ち窪んだ穴が見え

「ひ、ひッ!？」

「随分便利な部下だったみたいだけど、そうなっちゃ誰でも同じよねえ」

くつくつと紫苑は嗤う。

「こ、こ、殺したのか」

「異なことを。　相手を殺そうとするって事は、殺されても文句を言えないってことよ」

ああ、死んだらどのみち何も言えないか、という言葉に続いて振ってくる邪気のない笑声。　部下だったものを抱え、座ったままの姿勢で宗重は数歩後ずさった。

「輝夜はどこ」

「え、えあ」

言いよどんだ瞬間、隣にあつた碁盤が消し炭になった。　周囲の畳を道連れにして黒い塊と化した元・碁盤を横目に、宗重は震え上がる。

「どい!」

「お、奥だ。　奥の部屋に」

そうして、奥の襖を指差した瞬間、彼の身体を猛火が覆い尽くし

た。そのことに気付く暇すら与えられず、彼の意識は煉獄のごとき熱量によつて刈り取られてしまっていた。この瞬間、この動乱における最初の公家の死者として、九条宗重の名は、恐らく本人にとつては不本意ながらも、歴史に刻まれることとなった。

「輝夜！」

襖を開けた先の座敷に、静かに横たわっていた少女を見止めた紫苑は、足がもつれそうになるのにも構わず駆け寄り、その華奢な身体を抱き起こした。首元に手を当ててみると、確かな拍動を感じる。とりあえずは、生きている。眠らされているのか。サラシが巻かれた膨らみかけの胸が、弱弱しいが規則正しく上下しているのを見て、紫苑はほつと安堵の息を吐いた。見える範囲には、傷跡もない。

あらためて輝夜の姿を見れば、白い肌に、サラシと下帯しか身につけていない。髪を縛っていたリボンも解かれ、美しい黒髪は流れるままになっている。脳裏によぎった嫌な想像を、紫苑はかぶりを振って振り払った。大丈夫だ、さつき焼いた奴は少女趣味とかではなかったはずだ、と。すこぶる自分勝手な言い草だが、もし輝夜が傷物になっていたら末代まで本当に呪つてやろう、と彼女は思っていた。

これ以上、こんなしどけない格好をさらしておくわけにはいかない。誰が見ているわけでもないが、輝夜は自分と違って、まっとうで、まっさらでなくてはいけないのだ。そんな事を想いながら、紫苑はぐったりとした輝夜を抱きかかえる。

「帰りましょう」

穏やかな寝顔を覗き込みながら優しく言葉をかけて、術を紡ぐ。物質転送術式、大盛り（人間二人分）。常人では術式の複雑性、制御の困難さ、消費魔力量の三点で行使しえない術を、しかし紫苑は扱える。

彼女がたまに、自分は何者なのだろうか、という疑念に囚われる

ことがあるのは、こういったことの異常性を紫苑自身も十二分に認識しているが故だ。

しかし今は、疑問に沈む時間はない。

「私たちの家へ」

言葉を最後の鍵として術は成る。生じた真空に空気が流れ込む独特な音を残し、二人の姿は炎に包まれゆく山荘から消え去った。

第五話 硝子細工のケモノ（後書き）

どうみても悪役です

ほんとうにありがとうございます

9 / 8 誤字修正

第六話 "・冴月輝夜"・の事情

『奥嵯峨の九条家山荘、焼失す!』 『権大納言・九条宗重卿、行方不明』 『国粹派の大物、倒る!』

といった見出しが新聞に躍る、翌朝。

窓から入り込んでくるやわらかな光に照らされた輝夜が、わずかながらに眼を開く。その視線の先には、見慣れない天井があった。「はっ!?!」

がば、と勢い良く身を起こして、周囲を確認する輝夜。桐箆の隣には洋風の箆筒、さらに隣にハンガー置きがあつて、丈の短いスカートや、黒いストラップスがかかっている。ハイカラな鏡台の上には化粧品箱が置かれ、口紅や香水、さらに輝夜にはわからない何かがいっぱい入っている。大きな書棚には、魔術書から小説まで雑多な本が。天井には夕暮れと共に灯る魔力光ランプ。

そこまで確認したところで、僅かにかかる重さに気付いて視線を下ろせば、ベッドサイドの椅子に座つて、見知った姿がくうくと寝息を立てていた。上半身は、半ば自分にもたれかかるようにそして自分はサラシに下帯だけ。サラシは一度解かれた形跡があるし、下帯は下帯で紐が微妙に緩く。紫苑が身体を拭いたからなのだが、彼女は知る由もない。

「!?!」

かあつと頬が熱くなった。こ、この状況は何だ、と理性と感情が目まぐるしく回転を始める。自身の状況とこの部屋と目の前で寝ている人物についての考察のはずが、ついにはその悟性は天空をぶち抜いて、流星の舞う極天で全銀河的な事象を考察しはじめた。

つまりは、思考らしい思考になっていなかった。

「お、落ち着け、落ち着いて私」

頬をぱんぱんとはたいて輝夜は振り出しに思考を戻した。よし、段階を追っていこう、まずは現状を確認しようか。ここは二条院の離れにある、紫苑様の御寝室で。私はそのベッドに寝ていて何故か半裸で、脱がされた形跡もあって。そして紫苑様が隣でお休みになっている。

「……ええと？」

やはり状況は把握できなかつたし、脳内での補完もできなかつた。輝夜にはその先の知識はなかつたのだ。そんなこんなで彼女が眼を白黒とさせていると、上半身にかかる重みが、むず、と動いたように感じられた。「あ」と輝夜が言う間に、茫洋とした目つきで、銀嶺が首をもたげる。

「……んっ」

胡乱げに、こちらを見つめるこの部屋の主。冷静で、沈着で、しかし表情豊かで快活な姿しか見たことがない輝夜にとって、寝起きの紫苑の姿は新鮮なものだった。ああ、この方でもこんなには……とされるんだな、と。

「かぐや……？」

「紫苑様……よだれが」

だんだんと、その血の色をした瞳が焦点を結んでゆく。

「あ……寝てたのね、私」

窓の外を見て、つぶやく紫苑。それを呆けたように見ていた輝夜は、音を立てて頬を張られるのに、反応もなにも出来なかつた。

「馬鹿」

頬がじんと痛む。こちらに向き直った主の瞳は、水底に沈んだ紅玉のように、うるんだ光をたたえていた。

「あれほど一人で動くな、って……」

「え、あ、はい、申し訳ありません」

「馬鹿！ あんた、死にかけたのよ！？ 私がどれだけ心配して……」

……

それ以上、紫苑の言葉は続かなかつた。輝夜の胸に顔を埋めた彼女は、嗚咽を漏らすばかり。

「え、あ、紫苑様……?」

今日をはじめての事だらけだ、と思考する輝夜は、やはりどこかずれていた。そしてやっと、昨晚の事が彼女の脳裏に思い出されてくる。

どうして自分がここにいるかも、大体察しがついた。私の失態のせいで、この方は泣いているのか。そう思うと、言葉が出ない。

「私のことを護るとかって、いつも口うるさいクセに……! 死んだら全部ご破算なのよ! 誰かを護ることだって、新しいことを識ることだって、もう出来ない!」

「あ……」

「勝手に突っ込んで行って勝手に死ぬなんて、そんなの……無しよ。許さない……」

瞬間、輝夜は理解した。自身のしたことが、どれだけ彼女を不安にさせたか。彼女が、自分のことをどれほど大切に想い、自分の身を憂っていたのか。

「申し訳……わたしは、何て」

紫苑が顔を上げ、その紅い鮮烈な視線が輝夜の藤色の瞳と交錯する。心臓が跳ね上がるのを輝夜は感じ、速鐘のように高まる鼓動が自身を駆け巡るのを知覚した。

「心配、したんだから、もう、本当に」

嗚咽まじりの声が耳朶を叩く。輝夜は申し訳なさを感じる一方で、何故かこの美しい主の涙と泣き顔を見られたことが、何か特別なことのように思えていた。

「馬鹿……」

「……そろそろいいか?」

「蘇芳、様?」

そんな場所にのそりと現れたのは、この屋敷の主たる月読宮だった。彼は輝夜にすがったまま振り向いた妹の壮絶な視線をやれやれと受け流す一方で、伴っていた使用人に命じ、一式の軍服をベッド横のテーブルに置かせる。

「とりあえず、着替えは用意させた。冨月中将殿には私の方からも謝罪しておいたが、叱責は覚悟しておくのだな」

いつもの淡々とした口調。しかしそれが輝夜にとってはありがたかった。

「何よ、気を利かせたつもり？ 私から輝夜のお父様には謝ろうと思つてたのに」

「明らかに冷静ではないお前に任せられるか」

む、と見るからに紫苑がむくれる。普段ならば口喧嘩が始まるころだが、そこを思案げな表情の輝夜が遮った。

「父上は」

「……ん」

蘇芳が、輝夜の顔を見る。輝夜はその黒い瞳に対して、伏目がちに続ける。

「何と、申しておりましたか」

「……娘がご迷惑をおかけして申し訳ない、と。君に対しては、私はなにも聞いておらん」

「そう、ですか」

蘇芳はありのままを述べたが、それは常に良きこととは限らないという場合が、世の中にはままある。蘇芳の言葉を噛み締める

ようにうつむいた輝夜は、そのままずるとベッドから降りると、「失礼いたします」という言葉とともに、着替えを胸に抱えて隣室へ行ってしまった。

紫苑が非難のこもった目線で蘇芳を見上げたが、蘇芳は表情を少しも変えない。気まずい沈黙をよそに、隣室からはしばらく衣擦れの音がしていたが、やがて輝夜が顔を出した。

「紫苑様、ありがとうございます。此度のご恩、けっして忘れ

ません」

真新しい軍服に身を包んだ輝夜が、ぺこりと頭を下げる。

「……ええ、またね」

ベッドサイドの椅子に座ったまま、泣きはらした顔に笑みを浮かべて、紫苑はそう答えた。

しばらく後。

自宅の道場で、輝夜はひとり立ち尽くしていた。

「私は、何をしていたのだろう……」

虚空に問うても、当然答えは返って来ない。

答えは自身の中に既にあった。義憤だとか正義感だとか、そんな何かに突き動かされ、無謀な行動をした。それが全てだ。何の気まぐれか、命は取られなかったが。あときは捨て鉢だった気もするし、何としても勝つつもりでいたような気もする。かといって、勝つたらどうなる、という事を考えていた訳でもなかった。一大決心をしたはずだったあのときの心中ですら覚えておらず、測れもしない自身がおかしくなつて、彼女はふっと自重するように笑った。

紫苑がつきつきりで治療にあたつたためか、身体の調子はすこぶる良い。改めてお礼をしなければ、と思う。

「ん……？」

ふと道場の入口の方に気配を感じ、振り向く。そこには、小柄な自分よりさらに小さな影があった。この冴月家で輝夜より小さな者は、一人しか居ない。

「ねえさま……」

「……小太郎」

おずおずと近寄ってくる、十歳以上歳の離れた弟の名を呼んだ後、輝夜は何と言葉をかけたなら良いかわからなかった。

「すごく、しんぱいしました」

くりくりとした大きな黒い瞳は、ただ無垢に彼女を見上げている。その視線に耐えられず、彼女はかがみ込んで、その小さな身体を優しく抱きしめた。眼を合わせないように。

「すまない。本当に……」

それだけしか言えない。彼女が弟に持っている感情は、かなり複雑なものだった。この弟が、自分から大切なものを奪った弟が、しかし可愛らしく、いとおいしい。仮にこの子を恨めたとしたら、憎めたとしたら、そんな考えが浮かぶたび、彼女は自身の心弱さを恥ずる思いに襲われるのだ。

「ないてる？」

舌足らずな声が、輝夜の心を包んでゆく。

「なかないで。あねうえがないてると、ぼくもないちやいそう」
答えるかわりに彼女は鼻をすすり、弟の背中に回していた手で目を拭う。そして、しっかりとしろ、と頬を叩いた。この弟の前で、この姉が弱く在るわけにはいかないではないか、と。

そして笑顔を作り、立ち上がる。弟と今度は眼を合わせるようにして顔を見下ろし、くしゃくしゃと頭を撫でてやった。

「さて、父上のところにいこう。小太郎はこれから稽古か？」

「うんっ」

精神的な余裕を少し取り戻してみれば、外で門下生たちががやがやと騒いでいるのが聞こえてきた。明り取りから差し込む光の角度から、彼らの稽古が始まる時間だとわかる。大方稽古に来たはいいが、私のただならぬ様子を見て入るに入れずいたのかなあ、と輝夜は少し申し訳なく思った。

小太郎も、その中に混じって稽古を受けることになっている。

輝夜もまた、基礎の稽古は彼らと同じようにこなしてきたものだった。冴月家の者とはいえ、特別扱いはされないのだ。とはいえ、

さすがに二歳の子供なので、内容はそれ向けになる。

「精進するんだぞ」

「はいっ」

元気よく返事をする小太郎の頭をぼん、と軽く叩いてから、輝夜は道場入口へと近寄っていく。小太郎が入ってきた時のままに半開きになっている扉の端から、何人かの頭が慌てて引っ込んだ。

自分の泣き顔が丸見えだったことに気付いて思わず赤面したが、何とかすまし顔を作って扉を開ける。

「貴公ら、覗きとはよい趣味だな」

引き戸を開けた先に居た数人の少年たち　輝夜より年下もいれば、年上もいる　に向かつて、輝夜はそう言葉を投げかけた。

慌てて道を作るその中に自分の面倒を見てくれていたこともある師範代の顔を見つけ、輝夜はげっそりとした面持ちで嘆息した。

「藤田どのまで、何をされてらっしゃるのですか」

「いや、まあ、その……」

藤田と呼ばれた輝夜より十ほど年上の男性が、しどろもどろに後ずさる。

「私はこれより父上にご叱責いただきに参ります。……そうです

ね、その後、一手手合わせを願いたく」

「う、うむ」

気圧されるように頷く師範代に彼女は一礼し、母屋の方へと歩を進める。

その後姿に藤田は視線を向けていたが、ややあつて門下生たちの稽古を始めるべく、手をひとつ叩いてぼかんとしていた子どもたちを我に帰らせた。

視線を移す前、遠ざかってゆく輝夜の背中が、ひどくか細いものに見えていた。

輝夜にとって、父・冴月直義は越えることのできない壁のような存在であり、常に父を模範と考えて彼女は自らを鍛錬してきた。

剣士として、軍人としての父の実力と実績は非の打ち所がなく、女ながらに時期当主として彼のようになるう、彼のように在ろうと輝夜は努力を重ねてきた。

あるいはそれは父への尊敬を越えて、盲信に近いものがあつたかもしれない。その父が悩み、苦しむ一人の人間だと知り、もはや自分を導いてはくれないのだと悟ったとき、彼女はそれを受け入れることができずに、複雑な反発心を抱くことになったのである。

畳敷きの部屋で、正座で向き合う父娘の間に漂う空気が重いのは、つまりはそういうことだ。

「宮様から、大方の経緯はうかがった。よく、無事で戻ったな」

「……此度のこと、まことに私の不徳の致すところ」

正座のまま頭を下げる輝夜。土下座に移行しようとするところを直義が手で制した。

「いや　いい。確かに、お前の判断は戦う者としては軽率だった。真に強き者となるには、敵手に己が勝ちうるか否か、見極められねばならん」

「はい」

返事こそするが、輝夜がその言葉の意味するところを理解できているとは言い難い。 ”勝てない戦いをしない” という事が強い、ということを理解するためには、彼女はまだ若く、そして直情なのだった。

「だが、人として、お前がしたことは決して間違つてはおらんと俺は思う。しかしだ、自分の命を粗末にしたということとはだな……」

昔ならば快刀乱麻を断つという言葉を具現したかのような一言で、自分を奮い立たせてくれたのに　そう輝夜は思う。

「ともかくだ。心配したのだぞ　俺も、香も」

「……義母上が、ですか」

しまった、と思わずこぼれた言葉を輝夜は悔やんだが、もう遅い。含まれていた疑問と、それ以上の皮肉は、父にも伝わってしまった。

「ん、む」

ばつの悪そうな顔をする父。そんな父を見るのが輝夜には辛かった。

「失礼して、よろしいでしょうか」

「ん、あ、ああ……」

立ち上がって一礼し、輝夜は父に背を向けた。最後まで、彼と眼を合わせることは、なかった。

「何であんなことを言ったのよ。輝夜……いや、冴月の事情、知ってるでしょ？」

輝夜が寝ていたベッドに腰掛け、足をぶらぶらとさせながら、紫苑は半眼で兄に問うた。問われた兄は兄で、紫苑が座っていた椅子にどっかと腰を下ろし、片肘について妹に対している。

「せめて何か、あの子を気にかけるような事を言ってた、とでもしておけば」

「……お前は、彼女に対して少し甘すぎるな」

ぴしゃりと。蘇芳は紫苑の言葉を遮った。

「私に、すぐ露見する嘘をつけ、というのか？」

「……でも」

「他家の事情にあまり干渉すべきではないからな」

蘇芳が言うのはあくまで原則論だ。しかし相応の理由と正しさがあるから、原則は原則となりえるのだ。その程度、紫苑にも当然理解できている。

”冴月家の事情”、それは基本的に男系長子相続を行う武家ならば、ままあることではあった。

冴月家の現当主、冴月直義ただよしには数年前まで男子がなく、子は死別した前妻との間にもうけた輝夜ひとりだけだった。輝夜が剣士として非凡な才能を示したこともあり、輝夜は冴月家の跡取りとなることを期待され、また彼女もその期待に応えようとしていた。

紫苑と輝夜は父同士の友誼が縁で知り合い、互いにとって数少ない友人となった仲だったが、その頃の輝夜はこの二条院に入り浸るようなことはなく、当主としてふさわしい教養と実力を身につけるべく日々励んでいたのだ。

そんな輝夜を取り巻く状況が変化したのは、奇しくも彼女が最少での師範代免状取得を成し遂げた一昨年、二九九六年のことだった。七月、直義と後妻との間に男児が生まれたのだ。彼は小太郎という幼名を与えられ、健やかに成長していった。その一方で輝夜は半ば自動的に”冴月家の家督相続者”としての立場を失うことになったのだ。

そんな輝夜に、父は冷淡なように振舞った。わけではない。今まで次期当主として厳しく接してきた娘に、新たにどう接するべきか、わからなくなってしまったのだ。戦場においては無双を謳われ、よき指揮官でもあり、またよき剣の師でもあった彼だが、家庭においてはただの寡黙で口下手な男に過ぎなかった。後妻のほうはといえば、わが子が可愛い、ただそれだけ。それまで実母という抛り所を失いながらも、冴月家の次期当主にふさわしい者たらんと努力してきた娘は、最も多感な時期の入口にあたる十二歳で、それまで邁進してきた目標と、その努力の意味と、家庭における居場所とを一度に失ったのだ。

その状況を憂えた紫苑は蘇芳に働きかけ、彼は近衛師団内に要人警護のための隊を創設することを御前会議にて提案し、輝夜を紫苑の警護役としてあてがった。皇族の側仕えとなるにあたって必要なことだったとはいえ、成人もせず士官学校を出ているわけでもない輝夜の左近衛少尉任官は異例で、蘇芳が参議・親王という立場をかさに着た、と取られかねないことだったが、軍内のポストが増え

ることにも繋がる人事ゆえに、大蔵省以外から反対の声は出なかったのだった。

しかし、蘇芳はこの措置を半ば後悔していた。妹の「友人」であつたはずの輝夜が、このことによつて「従者」としての立場に縛られてしまつたのではないか。そう思うことが、一再ならずあつたのである。

「それで、やはりお前か？」

「そうよ」

さらりとした、疑問というよりは確認めいた蘇芳の問に、紫苑もまた事も無げに答える。

「左府は息子が山荘で何をしてたか知らなかつたんですつて？」

「ああ。宗重卿は、お父上たる左府殿にすら自らの関与する組織についての情報を漏らしていなかつたようだ。あの左府殿のことだ、うすうす感づいていながら見逃していたのだとは思つが。

大立者が倒れた今、不穏分子は一掃してしまふべきだという意見も内務からは出ている」

「そうね……この間私を襲つた奴は、形態変容術なんて珍しいものを使つてた」

だらりとさせていた足を組みながら、紫苑、

「魔導院が把握している魔術師に、そういうのがいないか。珍しい技能だから、たぶん何かしら情報はあるでしょ。洗わせたら？」

ふむ、と蘇芳は頷いて立ち上がる。

「お前も、すこしは自重することだな。此度の事件にお前が首を突っ込んだ結果が、これだ」

「……そうね。そこは反省してる」

やはり輝夜を暮羽のもとに連れていくべきではなかつた、という後悔が紫苑の中にはある。

自身が刺客に襲われる際、輝夜も大抵はそこにいて、大抵は無傷でその場を切り抜けることができていた。しかしそれは、武士崩

れや武器を持っただけの一般人を相手にして、という場合のことだ。魔術師相手の戦闘ということの意味を、自分も輝夜も軽く考えていたのではないか。

その末に今回の事が起こったとすれば、きっとそれは必然的なものだったのだろう、とも紫苑は思う。

「けど、無事で本当に良かった……」

……この、心底からの安堵がこもった言葉が、いまの紫苑のまぎれもない本心だった。

翌日、光宮。

外からは継ぎ目も窓も何もないように見えるこの塔だが、内側からは京を見渡せるような窓がそこかしこにある。三十五階の大広間を囲む廊下の外周は全てが窓になっていて、数箇所休憩所のような場所が設けられていた。

そのうちの二箇所では、”たまたまばったり出くわした”数人の男女がテーブルを囲んで談笑している。

「火薬庫の上で踊っていた御仁は、見事に果ててしまいましたな」

鷹亮がそう言うと、蘇芳はぴくりと片眉を上げた。

「その物言い、知っていたな？」

「魔導院として不介入を決定してはおりましたが、焰崎などは出て行く気満々でしたぞ」

談笑　その実は遮音結界を展開しての情報交換だ。

「しかし、仮に露見してしまえば妹君の立場は悪くなりそうじゃのう」

扇子で口元を隠しながら言うのは暮羽だ。扇情的な着流し姿だが、尻尾も耳も今日は隠し、髪の色も変えている。彼女は京に住

まう妖物の代表として、非公式ながら参内を許されており、折に触れて光皇への助言もしていた。

「左大臣殿はいかに？」

「今日の御前会議には姿をお見せにならなかった。しばし喪に服されるのだそうだ」

と、蘇芳。

「まあ、後継者と目しておった息子にああ死なれてはのう。次男坊はまだ政事に携わっては居ないのでなかったか」

「五位修理亮しゅりのすけではあるが、ま、名目上のものだな」

「工部省がありますからな」

カップをとりあげ、中の緑茶を蘇芳はすすった。近くの給湯室で淹れたそれは、あまり美味しいものではない。

そこに、息せき切って駆け込んできた者がいる。遮音結界の力場に阻まれた彼女は、慌てたように見えない結界を叩いた。

「おや……？」

蘇芳は名前は知らなかったが、魔導院に赴いた時によく見かける鷹亮の秘書官だった。

彼女は鷹亮が結界を解除すると、何事か彼に耳打ちし 鷹亮の顔色が変わった。

「どうされました」

「何かあったのかや？」

蘇芳と暮羽が揃って問うと、鷹亮はひとつ咳払いをして、神妙な面持ちで答える。

「泰華宮様が、亡くなられたそうだ」

蘇芳と暮羽は、揃って顔を見合わせた。

「主上、小野宮で御座います。お招きに応じまかりこしました」
同刻、光皇の寢所には、侍医が止めるのも聞かずに床から半身を
起こした光皇の命で、内大臣・小野宮透が呼ばれていた。

光皇・天照八十四世　かつて幕府を倒し、西の薩摩・長州・土
佐・肥前、北の会津・米沢・最上・仙台といった雄藩を切り従えて、
長らく武家の手にあつた政権を自らの手に取り戻し、さらにその後
の諸改革を自ら主導した”大帝”である。そのやせ細った弱々し
い身体に往年の覇気は見て取れず、しかしその眼には未だに英明な
光があつた。

「ご玉体に障るといけませぬ。どうかご自愛くださいますよう」

「よいのだ」

「は……？」

「自分の身体のことだ。わかるのだよ」

ひざまずいたまま、内大臣はいたたまれぬ思いになった。病魔
に冒された光皇にとって、こうして喋ることすら、多大な苦痛を伴
う行為なのだ。侍医が処方した痛み止めがなければ、起き上がる
ことすらかなわない。いわんや、政務を執ることなど最早もつて
の外だった。

それでも摂政が置かれぬことには、いくつかの理由があつたの
だが

「泰華宮が、死んだそうだな」

「は……」

脳裏に思い出されるのは、旧友の”敵か”という言葉をそのまま
表したかのような顔だった。数日前までは元気そのものであり、
将棋を指したりもしたものだ、あまりにも突然の死のように内大
臣には思えた。

「早いものよ。余も他人の事を言えたものではないが」

光皇も泰華宮もまだ六十代。老境に差し掛かったばかり、とい
えばそうだった。

「余もまた老いた。ましてこの身体だ、自ら政事を総覧する、な

どという過日のごとき働きは最早できぬだろう」

「そんな事は……」

「よいと言ったぞ。……故に命ずる。摂政を置くのだ。律令に則り、その者をして余の代行とし、余のもつ全権を与える」

「……恐れながら主上、その儀は！」

面を上げて何かを言い募ろうとする内大臣を、光皇は震える手で制した。

「こうして命ずるならば時期は選べるが、死ぬ時期は選べぬのでな。対外情勢が安定してある、今のうちが良いと余は考える」

「ならば、せめて立太子の儀式をなさいませ！ さすれば」

「ならぬ、それは新摂政がはじめに行う任とする。余の考えがわかるか、透よ？」

頭を垂れたままの内大臣にも、光皇の声に笑みが含まれていることがわかる。同時にその意図するところを察し、彼は慄然とすると共に、得心もしていた。このまま御前会議における二派の水面下での暗闘が続き、後々まで尾を引き続けるならば、ここでそれを顕在化させ、片方を断ち切ってしまうべきだ、ということをお光皇は暗に言っているのだ。

「あえて……相争わせようか？」

「然り。余は少々急ぎすぎた、と最近思うのだ。故に、ひとつ選択の機会をもうけたい」

「……よいのですね？」

「余は、命じたぞ」

「では、そのように致します。……主上の御意のままに」
さらに深々と頭を垂れて、老臣はそう言明した。

退出してゆく旧友の後姿と、入れ替わるように戻ってくる侍医とを見比べながら、老いた光皇はひとつの安堵を得ていた。

彼にとつての二つの心残りのうち、ひとつがこれで終わったのだ。

「……紫苑よ」

もうひとつのことを思い浮かべながら、彼はか細く呟く。
「あれは、余を恨むだろうな……」

窓の外の空には、暗雲が厚く垂れ込めていた。

第六話 "・冴月輝夜"・の事情（後書き）

これにて一章終了となります。　ここまでお付き合いいただいた方、ありがとうございます。

読み辛い部分、わかりにくい部分、多々あったと思いますが……。

次回からは第二章、紫苑サイドに主に焦点が当たります。

新たな登場人物も加わって、硬い会話ばかりだったのがもう少しライトになる……と思います。

では　コンゴトモヨロシク

第七話 赤毛のまればと

「……ちっ！」

飛来した銃弾が、外套に穴を空ける。追手との距離はおよそ三百メートル、走りながらという不安定な体制でマスを撃つならばそう命中しない距離だ。

ここは街からそう遠くない場所。こんな場所で撃つとは、連中とうとう痺れを切らしたか、と追われる彼は歯噛みする。

迎え撃とうという考えもなくもない。実際、彼ひとりならば、有象無象の傭兵が何人いたところで、敗北はありえない。しかし彼は、その選択を採らなかった。

「お兄ちゃん……」

腕の中の存在が、不安げにこちらを見上げてくる。自分と同じ燃えるような紅毛、そして血のように紅い瞳。彼女を護るということが、今の彼の至上命題なのだ。

彼女を抱えながら、背負った大剣を振り回して立ち回る。不可能ではないが易くもない。

「大丈夫だ」

徐々に相手との距離は開きつつある。このまま走り続ければ、いずれは振り切ることができるという確信はあった。

とはいっても、もう、あの街には戻れないのかと思うと多少の寂しさを覚えるのも確かだった。古臭いくせに新しく、はみ出し者の自分たちも自然と存在できたあの街に。

水が流れる音が聞こえ、川か、と彼は思案する。山道に差し掛かっているこの場所では、それほど大きな川ではないだろう。橋が架かっているなら飛び越えればそれでよし、架かっているところであえて道を違えることで、夕闇に紛れて相手を幻惑することができる、かもしれない。

そう考えたところで、彼の表情が強張った。流水の音に混じって、人の足音が、それも二人分聞こえてきたのだ。
「ちっ！」

舌打ちし、彼は橋が見えてきたところで立ち止まる。距離は前方の二人の方が近い。

抱きかかえていた少女を片手で抱えなおし、彼は背の大剣を利き手で掴む。二人を排除し、ここを突破するために。

しかし、その二人がいるはずの前方から聞こえてきた声は、彼の予想から外れたものだった。

「そこのお兄さん。助けは必要？」

時は、少々遡り

三方を山地に囲まれた言わば盆地の、南には宇治川。そんな自然の要害と言える立地に、都は存在している。

それぞれの山地は、西を愛宕、北を貴船、東は比叡と代表する山の名をとって呼ばれていた。

その比叡山の中腹、さる宗派の総本山からは少し離れた林で、二人の少女が戯れている。

「次、直射砲撃七！ それそれっ」

銀髪の少女　紫苑が楽しそうに笑いながら、白く輝く光条を次々と下方に向かって撃ち降ろす。

「く、あ、おおおッ！！」

そして幾分か小さな黒髪の少女　輝夜は、およそ少女らしくない声と表情で、必死に飛び回る。地を蹴ったそこに一本が突き刺

さり、避けた先に飛来したもう一つをかわし、斜めに飛んだ先にあつた木の幹をさらに蹴って、三角飛びのように虚空に躍り出る。

「悪手、そこで回避行動が取れるの!？」

叱責と共に光芒が放たれる。立て続けに三本、それを黒髪の少女は袷紗を解いて抜き放つた刀身で散らす。

「お、やるう」

勢いのまま、先にあつた木を蹴って下方へと方向転換、その軌跡を光の矢が貫いていく。空中で身を一回転させて天地を逆転させ、枯葉の積もつた地面へと脚からの着地に成功。そのまま彼女は走り出し、目の前に迫る光を横つ飛びで回避。

「OK、それじゃあ次、曲射炸裂弾、八！」

戯れと言うには、過激な戦闘演習。それが、二人の新しい習慣だった。

先日、不覚をとつた際の戦闘は、後々振り返ってみると随分と不出来なものだった、と輝夜は思っていた。

何しろ冷静さを失い過ぎ、そして直線的過ぎた。速度の乗つた突きは有効打だったようだが、それ一辺倒となつたことは十二分に反省しなければならぬ。

……といった訳で、紫苑と共に郊外に出たの訓練を思い立ち、退屈していた紫苑も二つ返事で輝夜の提案を受け容れたのだった。

「まさか、こつとも早く成果を確かめる機会が来るとは……」

「最後の方、かなり動き良くなつてたわよ。良かったじゃない、早速試せて」

両手を外套のポケットに突っ込んで仁王立ちする紫苑の姿は、隣に立つ紅毛の男と同等に堂に入っている。その赤毛はいえ、輝夜よりさらに小さな、フードを目深にかぶつた少女を傍らに立たせ、訝しげな顔つきを隠そうともしていなかった。

助けに入つてやったのに、と輝夜は内心で憤慨しているが、追われる身に突然の助力ともなれば、不審に思わない方が無理というも

のだ。そういった相手の事情まで慮ることは、今の彼女にはできなかった。

「まあ、安心するといいわ。あなたは妹さんについててあげて」
不敵に笑う彼女は、こちらに向けて殺到しつつある敵など、まるで塵芥のように思えているに違いあるまい。そんな様子を輝夜は横目で観察しつつ、新たな相棒の柄を両手で握り締める。

輝夜が見るに、敵はこちらを相手と見ていないらしかった。追いついてきた敵の顔には嫌らしい笑みが浮かんでいる。余裕たつぷりにこちらをねめつけ、銃を構えずに舌なめずりをする余裕まであるようだ。

ならば教えてやろう、自分たちがいかな存在を相手にしたのか
そう輝夜は自らを奮い立たせた。

「征きます」

決意を込めてそう告げると、紫苑は力強く頷く。

「よし、征きなさい！」

号令と共に、輝夜は一陣の風になった。

今回は狭い路地裏だったがゆえに、採りうる行動の選択肢はそう多くはなかった。が、今回はある程度開けた街道筋だ。自分もよく動けるが、相手からも自分がよく見えるということ。

故に、輝夜の選択肢に、ただの直進ははじめから無い。

敵は七人、しかし烏合の衆だ。彼女はしばらく直進し、敵がこちらに銃口を向けたのを確認すると、軽やかに横に跳ぶ。

「速ええぞ！」

「加速」

着地した先で式を起動。無理矢理跳躍の勢いを殺し、さらに反対側へ。そして着地した場でまた制動をかけ、反対側へ跳ぶ
無論、少しずつ跳躍距離を変えることも忘れない。

銃の狙いを乱しながら距離を詰めてくる輝夜に対して、敵は慌てて銃士ふたりを下がらせ、矛槍や刀を構えた男たちが前に出てきた。

輝夜はさらに速度を上げる。

高速での左右機動による幻惑、そして

「夢幻！」

声と共に、脚光にいくつも彫り込まれた式のうちひとつに意思が通い、効果を発現させる。

「ふ、増えたあ?!」

その効果は残像の現出。自身が移動した場に、自身と同じ姿をした像を数瞬の間、残す。紫苑が構築したそれは、輝夜の動きが一瞬停止する場所に像が残るように構成されていた。

残像は攻撃目標を誤認させ、そして輝夜自身の攻撃タイミング、攻撃地点をも予測し辛くさせる。完璧な幻惑は不可能だが、相手に一瞬でも逡巡させることができれば十分だ。

それが十分な隙となるのだから。

「ッ！」

一人目の目の前で停止。あつという間に距離を詰められたことに刀を持った男は驚いている。その表情のまま、あるいは驚愕の度合いをさらに強め、男は崩れ落ちた。その背後には、刀を横薙ぎに振り抜いた輝夜が立っている。

「遅い」

呟き、残像を残して再び彼女は跳んだ。残像めがけて数人の男たちが群がるのを、背後から輝夜は視る。そのうちの一人の背中めがけ、彼女は気刃を叩きつけた。

身体を「く」の字に折り曲げ 通常には曲がらない方向に

男が吹き飛ぶ。その中に躍り込んだ輝夜はさらに一人、銃を持った男の喉笛を斬り裂き、血の雨が降り出す前に離脱。

「こ、こいつ……!!」

浮き足立つ残り四人。その様子を離れて見ていた紫苑は、好機とばかりに術を紡ぐ。

「さあ、デカいの行くわよッ！」

景気のいい声と共に、輝くエネルギー球が放物線を描いて打ち出

された。声を合図として輝夜は全速力で敵中を離脱、距離を離してから振り向いてみれば、着弾・炸裂しようとする光球と、雪崩をうって逃げ出す男たちの姿があった。

結局、紫苑が最後に放った術は、ただの目くらまし用のかんしゃく玉のようなものだった。大きな音と光を出して、それでおしまいという代物だ。平時ならば、彼女もこういった「穏便な対処」をするのである。

「さて……と。理由を聞かせて貰おうかしら？」

西大陸の共通語であるラティノ語で問う紫苑。それに対して紅毛の青年は首を振り、「応神語でいい」と告げた。

「で、なんであんな連中に追われてたワケ？ 一応助けたわけだし、後ろ暗いことがあっても見逃してあげるけど」

と、そこで紫苑は、フードの少女の方に目をやる。びくり、と震える少女を、紫苑はしばらく興味深げな目線で眺めてから、
「……この子をさらって来たっていうなら、それも無しね？」

冗談めかした口調とは対照的な剣呑な目つきで、赤毛の青年の方を見据えた。

「怖いなオイ。この国の女らしくもねえ」

「お生憎様、私は異端なのよ。色々とね」

「まあ、そんなやましいことは無いんだが。俺たちは」

そして、青年は自分たちの身の上を話し始めた。

人を斬る感じには、あまり慣れたくはない。そう輝夜は思う。思っているが、慣れつつあるのも事実だった。

仕える主が保守派の中でも最右翼、国粹派とも呼べる者たちに

狙われており、一切ならず輝夜が居合わせる場においても襲撃があったのだ。その度に彼女は紫苑の剣として立ち回り、何人かの敵手を屠ってきた。今日のような傭兵は、戦意を喪失すれば逃げ出す分マシと言えるかもしれない。

刃が敵の喉笛を切り裂いた時の感触が、まだ手に残っているような気がして、輝夜は眉をしかめる。そんな時、紫苑は彼女の頭や肩に何も言わず手を置いて、気持ちが悪くまでそうしていくのだ。

巨大な朱塗りの柱が、重厚な桧皮の屋根を支える朱雀門。大内裏と市中を隔てる要所も、日曜の夕方とあって人はまばらだった。

この奥にあるのは官庁街であり、今日という日は全国的に休日なのだ。維新後の改革でエル・ネルフェリアや西大陸に倣って導入された新習慣だが、大つぴらにだらだらと休めるとあって、保守派からも表立って不満は出ていない。

「……なるほど、そのような経緯が。承知致しました、その場は我々が預かり申す。処理はお任せください」

『禁軍』青龍支隊長、本多忠俊が紫苑に頭を下げている。隣に肩に紫苑の手が乗った輝夜が立ち、さらに後ろに先ごろ助けた紅毛の兄妹。そしてここは朱雀門にある近衛府の詰め所前だった。

さすがに街道筋に死体を三つも野晒ししておく訳にはいかない、と一行は都に帰着するとまずここに立ち寄り、処理を任せられる人物を呼んだのだった。

輝夜が後ろを振り向けば、二人連れの兄の方は少し居心地が悪そうな顔をしていた。それもそうだろうと思う。恐らく彼らは、京の市中かそのごく近くおいて敵に捕捉され、それから逃れるために京から離れる方向へと走っていたのだろうから。

「これでよし、と。それじゃ家に案内するわ」

忠俊が光宮に戻って行くのを見届けた紫苑が、三人の方を振り向いて言う。視線の先には、狐につままれたような表情の兄妹。

青年と少女の身の上を一通り聞いた紫苑は、彼女の奇矯な言動に慣れた輝夜をして驚かせる提案をしてのけた。この二人を、自身の邸宅で匿おうというのだ。同時に彼女は二人に向かって自身の身分、つまり皇室の内親王であることも明かしていた。急転直下の展開に二人が困惑するのも、輝夜にはさもありなんと思えるのだった。

とはいえこれは紫苑の提案であり、紫苑がすると決めたことだ。ならば何を言っても覆ることはあるまい、と輝夜は何も言わなかった。

赤毛の兄の方はアレスと名乗り、妹の方はアレシエルと兄が紹介した。後になって思い出したことだが、以前に朱雀大路で見かけた妙に目立つ紅毛の二人連れは彼らだった。兄の方は竜人であり、妹の方は猫人のようだ。人間と亜人種の血筋が入り混じって久しい今となつては、このようにきょうだいの間で現れる形質が異なることは、珍しいが絶無でもない。

輝夜からは、傭兵だという兄のほうは実力者に思える。街道筋で垣間見た様子からして、あの大剣を片手で自在に操る臂力と技量は、自分をゆうに越えるものだという確信もあった。

彼らが何故追われているのかというと、アレスがとある戦場で手傷を負わせた相手がどこぞの貴族だったらしく、ああしてたまに傭兵を差し向けられるのだという。自業自得じゃないか、と輝夜は思ったが、戦場に出て傷ついたからといってその相手を恨むその貴族にも、覚悟が足りない、とも思う。

ともかく、自分より強い者と戦うことは、自分の足りない部分を発見する良い機会だ。紫苑の提案が容れられれば、彼は二条院にしばらく逗留することになる。その時に折をみて手合わせ願おう、と輝夜は考えていた。

妹の方は人見知りの気があるようだった。未だに輝夜は彼女の声を聞いていないのだ。フードを目深にかぶり、兄の砂色の外套

を小さな手でぎゅっと掴む姿は、輝夜と同年かひとつ下程度である。彼女の姿を、ずっと幼く、小さなものに見せていた。

朱雀門から二条院へと歩く道中も、彼女はずっとそうしている。そのこげ茶色のフードが、自分を包み込む殻であるかのように、そして傍らに立つ兄が、自分を護る親鳥であるかのように、ぴったりと彼に付き従っている。

横目でその様子を見ると、紫苑の僅かに後ろを歩いている輝夜自身の姿が少し重なって見えたが、輝夜はそれは違うと心中で否定する。

アレシエルは兄に護られている。しかし私は、この高貴な主を「護る」つもりでいるのだ。その差は、たぶん大きい。

そんなことを考えながら歩いていると、二条院の正門にたどり着いた。優美な白い門と、その奥に見える広大な庭園と邸宅が一行を出迎える。

「……ここ、本当に、ほんっとーにお前の家か？」

「何、今まで疑ってたの？」

「当たり前だろ。ああ、でもたった今確信できた。いい生まれ

の連中つてのは頭がお目出度いと相場が決まってる」

「ふうん？」

「いきなり初対面の相手に『私は姫です』なんて少っしもらしくない外見で言って、信用されると思うくらいにな。ああ、確かにこ

こはお前の家だろうさ」

そんな会話をする二人を見て、番兵が目丸くして、それから輝夜の方を見てきた。輝夜はその驚きと不審が入り混じった視線を受けて、諦めたようにかぶりを振る。要するにこれもまたいつもの気まぐれの一つであり、こうなってしまった以上、私には如何ともし難いのです、というような意味を込めて。

たぶん、紫苑はこのアレスという赤毛の青年を気に入っているのだろう。応神皇国の人間は、紫苑がその様な扱いを望まないとかっついていても、皇室の一員を相手にするとあって、少し腰が引けて

しまつものなのだ。恐らく一番長らく側にいるであろう輝夜やこの家の従者たちでさえそうだ。一方でアレスはこの国の人間でないからか、紫苑が皇族であるということに少しも頓着していないように輝夜には見えた。

何せ言葉に遠慮が無い。あんな皮肉を紫苑に言えるのは、彼以外には恐らく実兄の蘇芳だけだろう。そんな存在の到来を、紫苑はどう思うのだろうか。

「ちょっとココで待ってて、話つけてくるから。輝夜はついてきて頂戴」

前方で紫苑がそう促すので、輝夜は小走りに後を追った。恐らく蘇芳は渋るだろうが、最終的にはうんと頷くだろう。なんだかんだで、彼は妹に甘いところがあるのだ。

蘇芳の私室の襖を開けるなり、紫苑は言い放った。

「二人増えるから。よろしく」

「は？」

エル・ネルフェリアで書かれた政治学の本を読んでいた蘇芳は、いきなりの言葉にあんぐりと口を開けた。

「だから、居候二人追加。ちょっとワケありなんだけど、ここなら安全でしょう？」

「話が見えんのだが……」

「どーせ空き部屋ばかりなんだし、有効活用しようってことよ。

あ、家賃取って賃貸つてのもアリかしら」

「少尉……すまないが、説明を頼む」

階級で呼ぶということは、上位者からの命令である、と言うことだ。輝夜は「はっ」と一礼し、こうなった経緯をかいつまんで説

明した。特に紫苑は口を挟んでこず、にやにやと笑っている。

最初は頷いていた蘇芳はやがてこめかみを押さえ、やがて頭を抱え、話が終わると長い長い溜息をついて、顔を上げた。

「……なるほど。ふむ、前々から言おうと思っていたのだが、今日こそは言つてやろう。なあ紫苑、妹よ」

「なあに、お兄様？」

こめかみが引き攣った笑顔に対するのは、大輪の華のように咲き誇る満面の笑みだ。

「この大戯けめ」

「ありがと。じゃ、私は二人をどつか空き部屋に案内しないといけないから、これで失礼いたしますわ。チャオ」

それだけ言つて、紫苑はひらひらと右手を振りながら後ろ手で襖を開き、ひらりと踵を返して去つてゆく。妙に上機嫌なのは、兄の困り顔を見ることができたから、だろうか。残された輝夜は、ぼうつとそんな事を思う。

「この微妙な時期に……」

「蘇芳様らしくもない。いかがなされたのですか？」

再び頭を抱える蘇芳に輝夜が問うてみれば、他言無用だぞ、と前置きしてから、彼は現在の光宮内の事情を語りはじめた。

「聖上の容態がさらに悪化されてな。最早、過日の明晰な御判断は期待できぬ。その際に、内府（内大臣）殿が、陛下が最後に出されたという詔勅を発表なさつたのだが、太政官の非常権限をもつて摂政を任じよ、とあつた」

「……それは」

「候補のひとりとは私。もうひとりは、先日お隠れになられた泰華宮様の跡継ぎだ。その有栖川道幸殿の、奥方の父親は九条頼常。

あとはわかるな」

「守旧派、改革派の双方が摂政候補を押し立てて争うことになつた、と？」

輝夜にも、この程度の皇国の現状認識はできている。

「そういう事だ。偶然にしては出来すぎだが、継嗣問題も絡んでな。知つてのとおり九条左府は長良親王の外祖父、我々に近い綾小路大納言は篤良親王の外祖父。或いは陛下は我々を直接相争わせるおつもりだったのやもしれん」

「それは……」

自嘲気味に蘇芳は笑う。輝夜はその力のない笑みが何なのか測りかねていたが、ともかく色々と大変なんだなあ、ということは理解できた。そこに紫苑がさらなる厄介ごとの種かもしれないものを持ち込んだのだから、戯けと言いたくもなるのだろう。

「そこでだな……いや、止めにしよう。これ以上は愚痴になる。君に話しても詮無いことだ。すまん」

「いえ、私のような者を信頼していただき感謝しております。決して外には洩らしません」

「頼むぞ。市中をこれ以上不安がらせる訳にもいかん」

士族に謝る皇族というのも、それはそれで稀有なものだが、蘇芳は自らの過誤や失敗を認めるのに常にやぶさかではないのだった。

こうして輝夜に詫びることも初めてではない。

故に輝夜は思うのだ。お二人はあまり似ていない兄妹と言われるが、変わり者という点ではそっくりだ、と。

蘇芳の部屋を辞して廊下に出ると、若い女中がちょうどこちらに向かつて歩いてきていた。

「理緒殿？」

「あ、輝夜ちゃん」

この屋敷に勤め始めてからまだ一ヶ月程度の彼女は何故か紫苑に気に入られ、よく個人的な用事などを任されている。自然、輝夜と顔を合わせる機会も多く、名前で呼び合う程度には互いを見知っていた。

「殿下に呼ばれたんだけど、輝夜ちゃんは何かご存知？」

「心当たりが、ひとつあります」

「……厄介ごと?」

輝夜がこくりと頷くと、はあ、と女中は小さく吐息した。

「最近、みんな私にあからさまに優しいんだ。苛められるよりは
ずつと良いんだけど、なんだか妙な気分」

「主人に贖される新人」という立場に凶らずもなつてしまった
理緒だったが、相手が紫苑とあつては、周囲の理緒への視線が「捧
げられた生贄」に対するそれになるのも致し方ないことだった。

彼女に紫苑の無茶振りが集中する分、周囲の負担は軽くなるのだか
ら。

とりあえず理緒に同道することにした輝夜。その向かう先は離
れではなく、邸内に幾つかある客用寢室の一つだった。

「ん、来たわね。輝夜も一緒か」

果たしてそこに紫苑の姿はあつた。そして、所在なげに佇む紅
毛の稀人ふたりも。

「あのう殿下、そちらの方々は?」

「お客よお客。理緒、今日から貴女をこの二人の世話役に任じる
わ」

「えっ」

ぼかんと口を開ける理緒。

「経緯を飛ばして結論のみを仰せになるのはおやめくださいと、何
度……」

輝夜はやれやれと吐息し、ジト眼を紫苑に向けつつ指摘した。

「ほら、お二方も着いてこれてらっしゃらないではありませんか」

彼女が示す先、赤毛の兄はむつつりと押し黙り、フードを取った
妹は眼をぱちくりとさせて周囲を見回している。

「おおかた『ついて来い』の一言だけでここまで連れてきて、その
ままそこらを歩いていた方を捕まえて理緒殿を呼びにやらせたので
しょう」

「訂正させてもらうけど、その間私は厨くしやと公文所くもんじよと衛兵詰所に顔を
出して話を通してきたんだからね」

「……その三箇所も、『二人増えるからよろしく』くらいで済ませたのですね？」

「よくわかったわね」

輝夜はまた大きな溜息をついた。理緒もまた俯き加減に頭を抑え、なにやら呟いている。

「お前……」

「何よ？」

「馬鹿なんだな」

やっと居候する当事者たるアレスが、微妙な表情で口を開いたかと思えば、まろび出たのはそんな言葉だった。

「はあ？ この天才に向けて、よくそんな口を利けたものね」

「自分でそんな事を言う奴は紙一重の向こう側って決まってるだよ」

二人の間に挟まれたアレシエルは、ええとええと、と左右にキョロキョロと首を振っている。普通ならば不敬も不敬だが、相手が相手なので輝夜も理緒も、通りがかった使用人すらも何も言わなかった。

「ねえ、輝夜ちゃん……なんであの赤毛の人と殿下、あんなに仲良さそうなの？」

「私にはわかりかねます……」

そんなやり取りを交わすと、ふたりの従者はお互い疲れた顔で、不毛な口喧嘩をしばらく眺めているのだった。

第七話 赤毛のまねびと（後書き）

第七話でした。 お読みいただきありがとうございます。今回から数話は新キャラふたりの顔見せ回という感じに。

第八話 それぞれの距離感

幼少の私にとって、世界とはこの白い土塀に囲まれた屋敷と等しかった。

来る日も来る日も、自分の強すぎる力を制御する術としての魔術を教え込まれる日々。

時には父に怪我をさせてしまうことすらあって、そんな日は自分の力が嫌で嫌でたまらなくなった。

十二歳になってしばらくしたある日、私は禁を破り、屋敷の外へと飛び出した。

その時に初めてこの眼で見、この体で感じた広い世界。

それは想像していたよりも、ずっとぼろぼろで、ずっと不揃いで、ずつつとごちゃごちゃで。

一言で表すなら、汚かった。

それでも、それでも私は　もっと『世界』を知りたい、もっと遠くへ行きたい。

確かに、そう思ったのだ。

赤毛の兄妹が二条院に滞在するようになってから数日した、午後
の冴月家。

広い敷地の片隅にある道場の中からは、小気味よい乾いた音が次々と響いてくる。

「そこまで!」

乾いた音と共に木刀が宙に飛び、鋭い声が響きわたった。回転しながら落ちてきたそれが道場の床を叩くのと同時に、わっと周囲が色めき立つ。

「つつ……流石です、お嬢様」

両手を上げて降参の意を示している角刈りのがっしりした男は冴月流師範代の藤田、その喉元に木刀の切っ先を突きつけているのは輝夜だ。緋袴と白衣という装束の彼女は、張り詰めていた息を吐いて木刀を下ろすと、深く会釈する。

「お見事。その『残像剣』、今日こそは破ってくれようと思ったのですがね」

同じく緊張が解けた藤田は、ぱんぱんと手を叩きながらそう敵手を賞賛した。

敵手の視覚を幻惑し、自身の攻撃タイミングと攻撃位置を予測し辛くさせる。それは判るが、輝夜の跳躍の速度が速すぎるために目の前に出現した像へと視線が一瞬だが固定されてしまうのだ。

その一瞬で輝夜自身は死角へと移動し、見えない位置から攻撃を繰り出してくる。そこで殺気が表出するため、ギリギリでなんとか対応できるレベルではあるが。

およそ一週間だけでこれほど腕が上がるものか、と藤田は内心舌を巻く思いでいた。残像もそうだが、輝夜の高速移動の拳動が見違えている。元々、冴月流は相手に反撃をさせない電光石火の拳動と一撃を旨とする流派だが、今の輝夜は門下に並ぶ者の居ない領域まで達しているように見えた。

紫苑との実戦形式の訓練の成果だが、さすがにそこまでは藤田は知らない。

「これを、自力で繰り出したいものですが」

肩で息をしながら、そんなとんでもない事を言う輝夜。それは

つまり、符に頼ることなく相手の視覚に留まるような残像を残せるようになりたい、という事に他ならない。

「そのための速さというのはどれ程のものか、さっぱりですな」

「ええ、私も見当が」

苦笑し、木刀を腰に差す輝夜。ここ数日の試合で、輝夜は藤田に勝率五割をつけていた。門下生たちからも口々に「あれは反則」という声が聞こえ、輝夜としてもこれに頼ってばかりではいけない、という思いもある。それゆえの「自分でできたら」なのだが。

道場を辞した二人は、ゆっくりとした足取りで冴月家の庭園を散策していた。輝夜の表情に精彩が欠けているのを見てとった藤田が、彼女を連れ出したのだ。

「秋深し、ですなあ」

「ええ……」

はらはらと散る紅葉の中、藤田は切り出した。

「ときに、ここ数日はずっとこちらにおられましたな。二条院には出仕なさっておられないのですか」

「え、あ……はい」

とたんに表情が沈み、俯く少女。

「気乗りがしないのです。紫苑様には申し訳ないと思うのですが……」

どういうわけか、ここ数日二条院へと足が向かない輝夜なのだった。昨日などは紫苑から彼女を気遣う文面の手紙まで届いたため、自室にそれを置いて拝みさえしたのだが。

「何故かは、その、自分でも……よく、わからないのです」

このままでは、そのうち紫苑がこちらに来るだろう。その時に

どこも悪くない自分の顔を見て、彼女は何を思い、何を言うだろうか？

そんな事を想像すると、輝夜はたまらなく胸が締め付けられるような気がした。

「ははは……」

しかし藤田は、からからとそれを笑う。

「なっ……藤田殿？」

「いや、お嬢様も年相応のお悩みを抱えていらっしやる様で、安心してました」

むくれる輝夜を見て、藤田はなお目を細める。その口の端ににやりと笑みを浮かべ、

「なにぶん、某には剣にしか関心がありでならないように見えておりましたのでね」

「うっ」

「まあ、自分の心中ですら、と申すよりは、自分の心中こそ最も測りがたきものです」

そう、輝夜の方を見ずに言う藤田。視線は池を泳ぐ一羽の鴨に向いている。彼は、最近聞こえてくる「二条院に紅毛の男が居候として滞在しはじめた」という噂も、輝夜の心境の変化の一要因なのではないかと睨んでいた。そういった変事には「あの内親王殿下」が絡んでいるのはほぼ必定であり、その「紅毛の男」を彼女が招き入れたのなら、何かと紫苑にくっついていた輝夜としては面白くないんだろう、と。

「うっむ……」

輝夜は眉をしかめて押し黙ってしまった。

「では、私は道場に戻りますので、これにて」

ぼん、と輝夜の背を叩いて、彼は道場へと戻っていく。面倒を見なければならぬ子どもたちは、まだまだ多いのだ。

自室の天井を見上げ、うーむ、と輝夜は唸る。藤田は「自分の心中が一番わからない」と言っていたが、まさにその通り、輝夜は自分がなぜ二条院に行きたくないのか、結局のところまったく判っていないのだ。

傍らの文机には、数冊の本。翻訳された軍学書の中に、何冊か小説の類も混じっている。いずれもここ数日の間に篝火横丁の書店で買い求めたものだ。「もう戦争は頭でする時代よ。軍人も訓練ばかりしてりやいって時代じゃないの」という紫苑の言葉を思い出したからだが、そこで何故か、選んだ本の中に小説が混じったのだ。

やはり、何故かはわからない。ただ読みたくなつたからだ、と言うのはあまりにも簡単だが、一言だけでは済まされない何かがあるような気は輝夜自身にもしていた。何せ真っ先に読み始めたのがその小説で、軍学書にはさっぱり手がついていないのだから。

先日、横丁近くの商店街で会った理緒から聞くところによると、紫苑はあのアレスという紅毛の男に色々と外国の話を知っているのだという。生まれてこのかた家の中、十四まで外に出ることのなかった彼女はきつと、外の世界への憧れが人一倍に強いのだろうと輝夜は思う。きつとあのアレスに、未だ知らぬ国や街、そして人の話を聞いているとき、紫苑は眼を輝かせ、あの白い頬を興奮にわずかに赤らめて……輝夜の一番好きな顔をして、話を聞いているのだろう。

そこまで考えて、無性に腹が立ってきた。あの顔をこれまで近くで見ていたのは私のはずだ。新参者にその場所を譲つてなるものか、と。

「ええい、考えても埒が開かん！」
すつくと立ち上がり、帯を解いて緋袴と白衣を一息に脱ぎ捨てる

輝夜。ほっそりとした肢体を包むのがサラシと下帯一枚になるのにも構わず、彼女は箆笥から綺麗に畳まれた濃紺の袴と上衣の一式を取り出す。上衣に袖を通し、袴を腰まで上げて紐を締め、壁の衣紋掛けから白地に赤で皇国の国章が染め抜かれた陣羽織をかけ、飾り帯ですべてを留める。そして愛刀を刷き、鉢金を締め、陣羽織に留められた階級章と部隊章を鏡で確認して頷いてから、最後に群青色のマントと羽織とを肩章で留めた。

それは近衛の正式軍装。脱いだ衣類を片付けると、まるで戦場に赴くような表情で、彼女は部屋を飛び出してゆく。快刀乱麻と言ふよりは、やぶれかぶれ、という様だったが。

私は皇国軍近衛少尉、御神楽紫苑内親王殿下付を光皇陛下より拝命した身。

紫苑様の側にあるのは、もはや義務であり必然である。
何を気後れすることがあるうか！

……彼女は心中でそう自らを鼓舞し、一路二条院へと向かうのだ。
った。

光宮という場所は、はつきりいつて異質だ。

大理石でも漆喰でもない不可思議な白い建材といい、高さ百数十米に及ぶ中央の尖塔といい、列柱や迫持^{アーチ}を多用した建築様式といい、およそこの応神という国に似つかわしくない。しかしこの白亜の大伽藍、記録に残る皇国史が始まる以前からこの場に建っていたことは確定的であり、やはり此処に在ることが自然だという、一種矛盾した状況をこの現代に呈しているのだ。

ではこの謎多き建造物は、一体どのような存在が何のために建てたものなのか、そしてその当時のこの世界はどのような有様だったのか。どのような人々がどのような暮らしをし、どのような生物が息づき、どのような空が、どのような雲がこの大地を見下ろしていたのだろうか。それらをはつきりと語れる者は誰もいない。天魔戦争以前の世界については現存する記録が少なすぎ、故にその往古の世界のことについては、現代に生きる者は思考を巡らし、想像を広げることによって想いを馳せるしかないのだ。

戦前の世界についての不自然なまでの記録の少なさには、何らかの意思の存在をすら疑っているが、無いものは無いのだ。たとえ、広大な光宮低層部の十階ほどを占めている国立図書館で探し回ろうとも。

とはいえ、ここまで焦がれてるのは私くらいだろうな、と御神楽紫苑は思考を打ち切り、遙か高みの尖塔の頂点から視線を外した。その視線を、今度は周囲に移す。

大内裏の風景は正直なところあまり心癒される類のものではない、と紫苑は思う。花崗岩の石畳で作られた道と、その周囲を占める白黒の玉砂利、そして馬鹿馬鹿しいほどに巨大な白亜の『塔』。これらで構成された白黒の世界の中で、各官庁の朱塗りの柱と桧皮の屋根が、わずかな彩だ。以前はもつと荒れていて、「御一新」に際して大改修が行われ、創建当時の壮麗さを取り戻した……と兄は言っているが、砂利の隙間から生えるカタバミやタンポポといった雑多な草の方が、よほど見ていて心を楽しませる。それらもこの十一月半ばとあって、すっかり冬の装いに切り替わっているのだった。

寒風が吹き抜ける。着物の裾がばたばたとしたためくの鬱陶しく思いながら、彼女はしばらくその場に留まっていた。

「殿下」

ややあって、背後からかかる声があった。

「あら、お疲れ様。 わざわざ悪いわね」
振り向けば、こちらに向けて歩いてきている青年の姿が目に入る。
待ち合わせていた人物が現れたのだ。

官庁街である大内裏と市外との間は、朱雀門をはじめとするいくつかの門と、申し訳程度の城壁によって隔てられている。その白壁の土塀に寄りかかると、紫苑は一言三言何かを唱え、指先で小さく九字を切った。

「これでよし。 遮音結界を張ったわ。 いつも通りにして頂戴」
「有難てえ。 敬語は窮屈なんだよなア」

煙草をくゆらす長身瘦躯の青年の名は、焰崎蓮次ほむらゆき れんじと言った。 禁軍『朱雀』支隊を光皇より預かる身だが、庶民からの抜擢とあり、また粗末な身なりと立ち居振る舞いのせいで保守派からは蛇蝎のごとく嫌われている。 魔導院現体制における実力主義を、いろいろな意味で象徴する存在といえよう。 彼自身魔導院の日常業務は窮屈なのか、部下に仕事を放り投げて、よく市街を「警備」に出ているのだった。

「で、最近どう？」
「ま、どうもこうもねえよ、あの一件以来『朱雀』は不満たらたらだ」

あの一件 紫苑の中では輝夜の騒動のせいですっかりかすんでしまった、東京での反乱のことだ。 反乱自体は『禁軍』の働きによって迅速に鎮圧されたものの、その経緯をめぐり、奇妙な噂が流れているのである。

「連中の砲戦陣地なんかは全部俺らが砲撃叩き込んで潰したんだぜ？ ん？」

「朱雀は火力投射が本分だものね」

「そんで市中を掃討してた本多の旦那の『青龍』と桜田門で合流して、さア城内に突っ込むぜ、ってとこで瑞樹が制圧完了って言うてきてよオ。『白虎』が抜け駆けしやがったのかと思っただが、風見の奴は一橋で待機してたって言いやがる。おかげで不完全燃焼も良いトコなんだよ」

噂というのは、『禁軍』には公表されていない第五の支隊があり、東京の反乱鎮圧に際して主力となったのは彼らであった、というもの。蓮次の言い分からして、どうやら事実らしい、と紫苑は考える。

「喋れてすつきりって感じね」

「応よ」

ぶはあ、と彼は紫煙を吐き出した。

年齢も比較的近く、また火炎を最も得意とする魔術師同士という縁で、蓮次と紫苑はそれなりに付き合いがあった。魔導院の重鎮たちとは違い、彼女が自由に外に出られるようになってからの、比較的新しい付き合いだったが、気安い間柄の年上の男性の友人として紫苑が認知しているのは、今まではこの焰崎くらいのもだった。

「一本もらえる？」

「ん。ほらよ」

差し出された箱からは、白い棒がひとつ突き出している。ありがと、と礼を言っただけで紫苑はそれを受け取り、口にくわえると指先に火を灯し、点火。そして、すぐに咳き込んだ。

「……俺が言うのも何だけどよ、やっぱり止めた方がいいんじゃないかねえのか」

「大きな、げほ、お世話よ」

身体を震わせながらも強弁する紫苑。

「身体、あんまり丈夫じゃ無いんだしな。コイツは毒だぜ？」

「だから、余計なお世話って言うてんでしょうが。帰るわよ」

「お前が呼んだんだろが、ん？」

半眼になる蓮次を他所に、紫苑は憮然とした面持ちで指の間に煙草を挟み、口から離す。

「緘口令」

「また藪から棒にだな。 それに関しちゃあんまり喋れねえぞ」

「……今回が初めて？ 違う？」

「あ？ ……俺はココに来て日が浅いから知らねえし、本多の旦那も何も言ってるない。 上の人は、まあ、わかんだろ」

「そりゃね。 私も怖くて聞けないわ」

「お前が怖いときたか。 明日は雨どころの騒ぎじゃねえな」

蓮次はそう言って、けっけ、と可笑しそうに笑う。 ひどく馬鹿にされたような気がしたが、不快感をつとめて表に出さないようにして、紫苑は門の向こうに広がる青空と、その中心を貫く光宮の塔を見上げた。

光皇の容態はいよいよ悪化し、明日をも知れぬ状態であるらしい。その事はどうにも、この国の行く先を暗示しているように思えない。 縁起でもないが。

「それじゃ、帰るわ」

「ああ、気をつけるよ。 連中……」

その言葉を視線で黙らせ、紫苑は白壁から身を離して歩き出す。 ひらひらと振られる手から放り投げられた煙草は、一瞬後に術式に捉えられ、ひと塊の炎と化して消え去っていった。

そうして戻った二条院の桧皮葺の門前には、完全装備の輝夜が立っていた。

むっつりとした顔で門柱に寄りかかって、なにやら本を讀んでい

る。表題は『舞姫』。なんともはや、という思いの紫苑。あの子ああいうのも読むのねえと若干新鮮な気分になりつつ歩を進めれば、気配に気づいたのか、輝夜がはつと顔を上げた。

耳をぴんと立たせてこちらを振り向く視線は輝いていて、そして正面からもわかるほどに、尻尾は大きくぶんぶんと振られている。

狼人族、という種族名はいささか格好が良過ぎるのではないか、いつそ犬人でいいんじゃないか、と、こういう輝夜の有様をみるたび、紫苑は思うのだった。もつとも同じ狼人族である知り合いの幾人かは、こうも簡単に尻尾を振ったりはしないが。

彼女は急いで肩にかかっている雑嚢に本をしまつと、こちらに駆けてきて、勢いよく礼をした。

「お帰りなさいませっ」

「えー、ああ、うん」

紫苑も慣れないものだから、そんな生返事を返してしまう。外出から帰っても、出迎える門番や居合わせた使用人などがする挨拶は、どこかぎこちなく、義務的だった。それに、紫苑は常に離れで輝夜を迎え入れる側であり、こうして喜色満面に出迎えられるという経験は無かったのだ。

「今日はどこに行かれていらつしやつたのですか？」

「国立図書館でちょっと調べ物をね。ついでに蓮次にも会つてきた」

「焰崎様に？」

「相変わらずチンプラだったわ」

しゃちほこばつた敬礼をよこす兵が護る門をくぐる際、二人はそんなやりとりを交わす。

「にしても、今日は『授業』の日じゃないでしょ？」

「はい。ですが私は紫苑様の衛士。ならば紫苑様の側にあつて、御身を護りまいらせるべきかと」

「熱心ねえ」

その言葉はどこか他人事のようにだったが、輝夜は「はいっ」と頷

く。良い傾向ではないな、と紫苑は内心で呟いたが、それを出しはしない。

怖かったのだ。それは彼女らしからぬ感情だったが、確かにそう思ったのも事実だった。

離れに戻っても紫苑はそこに落ち着かず、洋装の外着からゆつたりとした臙脂色の着物に着替えると、すぐに母屋へとその足を向けた。

その行き先は、先日からの居候ふたりの居室。そのことを悟った輝夜の顔が、あからさまに曇る。

「話を聞きにきたわ」

「帰れ」

ふすまを開けて、室内に二人が居ることを確認するなり、即そのたまった紫苑に対する返答は、これまた即答だった。

「もうネタが無いって昨日も言ったろ。クレドの香辛料市場でスリを叩きのめした話もしたし、ヤスバースのあくどい女術をとつちめた話もした。キランの港町で船長のおっさんに付き合わされて樽酒ひとつ飲み干して死にそうになった話もな」

クレドとは東大陸の南西に浮かぶ島嶼群にある、香辛料貿易の中心都市。ヤースは南大陸の大半を支配するムーア朝の王都。そしてキランは大陸間貿易の中継地点として栄える、東大陸東南部のジャングルの入り口にある港の名だ。

「シユティアの『黒の森』で遭難しかかった話も聞いたし、アルピオン海軍の艦に乗り込んで要塞攻略に参加した話も聞いたわね。

もつと聞かせて」

「お前な……」

呆れるアレスを他所に、紫苑は隅に積んであった座布団を手繰り寄せ、どっかりと座り込んだ。それを見たアレスはあからさまに嫌そうな顔をする。

「別段、そんな血湧き胸躍る冒険譚、なんてものじゃなくていいのよ。いや面白かったけど。貴方が知っていて私が知らないすべてのことを教えて欲しいって言ったじゃない」

「んな抽象的なリクエストに答えられるか。人にものを頼む時は、もつと解り易くするもんだ」

そんなやりとりを主人と居候が交わしている間、輝夜の視線はなるべくそこを避け、この部屋にいるはずのもう一人を捜す。

異国での居候暮らしとはいえ、二人の環境はそう悪いものではないように輝夜には思えた。そもそも、兄妹ともども応神語での会話に不自由しない程度にはこの国に滞在していたのだから、外国は基本的に板張りの床と寝台、そして脚の高い机と椅子で暮らすにしても、畳の暮らしに幾分か慣れてはいるはずだ。

しかもここは二条院。造りは古来の寝殿造りに時代ごとの改装を加えてきた古めかしいものとはいえ、畳は数年毎に総入れ替えをするし、来客用の布団は常にふかふかだし、各種調度も相応の歴史を閲してきた再高級品。当然、出される茶も料理も美味い。つい先日まで使われていなかった部屋のなかきつちり片付いて、家具もきれいに磨かれていたりあたり、理緒はよくやっっているようだ。

その隅っこに、捜していた姿はあった。背の低い屏風で仕切られた、手毬やら、あやとり用の紐やら、お手玉やら、そんなものが雑多に散らかっている一角。理緒が気を利かせて用意したと思しき空間に、小さな赤毛の少女は座っている。彼女は今、色紙を手を折るうか頭を捻っている最中だった。

私にもあんな時期があつたのかな、と輝夜はふと懐かしい心持になった。思えば物心ついた頃から剣の修行に明け暮れる日々だったが、それでも母が存命であった頃は、空いた時間、こうして少女らしい遊びをしていた気がするのだった。

「あ、そうだ。料理作つてよ料理」

「またお前はワケのわからん事を言い出すな。頭ン中何か涌いてるんじゃないか」

「好奇心が湯水のごとし。でさ、異国の料理、それも気取つた奴じゃなくて普通のが食べたいのよ。ココじゃ精々大陸料理か、馬鹿に高価なルテティアの宮廷料理しかないんだもの」

大陸料理とは、海をへだてた応神の隣国、第四周王朝の料理のことだ。往古より交流のあるこの旧き大帝国の料理は庶民にも人気があり、京の各所で酒樓が営業している。そしてルテティアとは、躍進著しい新興工業国家シュティーア帝国の西にある古い王国の名である。それはそうと、また無茶を、という心境は輝夜も同じだった。このままこの会話が進行すれば、紫苑は厨房へ赴いて直接『お願い』しかねない。それは使用人たちにとって命令と同義だ。彼らと紫苑の間の微妙な空気は良くわかるだけに、これは止めねばならないか、と輝夜は口を挟むことにした。

「紫苑様、今日これからというのは急に過ぎます。もう厨では本日の御夕食の準備が始まつている時間ですから、今からですとあちらの作業に支障が生じましょう」

「そうね」

正論をぶつけると、この主は案外あっさりと首を縦に振るのだ。

ほつと輝夜が旨をなでおろすと、アレスが視線だけでこちらを見て、右手の親指を小さく立てた。よくやった、と言いたいらしい。

お前を助けようと思つたわけじゃない、と懨然とした面持ちで顔を背けたあと、輝夜も部屋の中、紫苑のかたわらに、折り目正しい正座で腰を下ろす。

「じゃ、今度使えるように頼んでおきましょう」

アレスが目に見えてげっそりしたのを見て、ほれ見ると輝夜も吐息した。

雑談に移行した二人を他所に、輝夜はもう一人が居るほうに視線

を向ける。いま彼女は、色紙を手に弄ぶのをやめ、折りはじめたところだった。

鶴か、と工程から出来上がりを推測し、輝夜は意外に思った。

折り紙に慣れていない者が折るには少し難しいそれを、少女は慣れた手つきで進めていくからだ。

「……？」

視線に感づいたのか紅毛の少女は頭をもたげ、そして目が合った。びっくり、その小さな肩が震える。彼女が人見知りだとアレスに聞いたことを思い出した輝夜は、とりあえず笑顔を作ることにした。困ったように、にこりと笑う。

……少し間を置いて、少女はくすりと、可笑しそうに微笑んだ。

敵対的な意思が無いことは理解されたようだ、と輝夜は心中で頷き、今度はさらなる接近を試みることにした。その仕草は、山の中で小動物を見つけた時のそれに近かったが。座ったまま上体を崩し、尻尾をぴんと立て、畳に手をつけてそろりと距離を狭めると、少女の興味は折りかけの鶴から輝夜に移ったのか、きよんとした面持ちでこちらを見てきた。試みは成功したようだった。

「何を折ってるんだ？」

第三の接近は、問い掛け。

「……とり」

少女は何度か折られて菱形のようになった色紙を一瞥して、そう言った。またも意外な答えだった。折鶴は折鶴であり、ふつうは「鳥」とは呼び習わされてはいない。よく見れば、彼女の周りにはいま折っているもの意外にも、何羽かの折鶴が羽根を休めている。

「好きなのか？」

「うん、とりは好き。むかし、教えてもらったんだ」

あの兄にか、と輝夜は一瞬だけ思ったが、想像してみると死ぬほど似合わない。誰か別の人間だろうか。しかし、二人は諸国を遍歴してきた兄妹のはずだ。一体どこで誰に、と輝夜は疑問を感

じたが、どうでもいいのか、とすぐに頭の片隅に追いやった。

鶴は、輝夜としても好きな鳥だった。白黒、そして一点の紅で構成された優美なありさまは、よく知る高貴な存在を思い起こさせる。天照家の象徴でもあったが、それ以上に、輝夜には鶴という鳥が自身の主の象徴に思えるのだった。

「それはな、『鶴』という鳥なんだ」

「つる？」

輝夜が言つと、少女は首をかしげて問い返してきた。

「白と黒の羽根に、かんむりが紅い、綺麗な鳥。見たことはないのか？」

「……わかんない。でも、似てるかも」

「なにと？」

「教えてくれた、ひと」

輝夜はそこで軽い驚きを感じた。自身とこの少女が鶴について似たような想いを得たことと、「鶴に似ている」と形容しうる、白と黒、そして鮮烈な紅を持つ存在が自らの主以外に存在することに。「その人というのは」

ちらり、と視線を反対側に向ける。目を輝かせ、頬を上気させて丁々発止のやり取りを交わす、子供のような主の姿が見えた。ちくり、となにかが痛むのを黙殺し、姿勢を元に戻す。

「あの御方に似てはいなかったか？」

「紫苑お姉ちゃんに？ そだね、そう……かも」

うーんと首を捻って考えこむ少女を見て、輝夜は当初の目的を思い出した。この自分とあまり年が変わらなく見える少女と、友好的な関係を成立させるために一連の行動を試みてきたはず。今すべきは、彼女に誰が折鶴を教えたかの考察ではない。

「冴月輝夜」

「うっ？」

「私の名前。 たぶん、顔を合わせる機会も多くなると思うから、な」

思えばこうして自己紹介をするのは、いつ以来か。若干の気恥ずかしさを覚えつつの久々の名乗り。

「うんっ」

それを受けて、少女 アレシエルは、はにかんだように微笑んで頷き返すのだった。

「あっちも無事に友達になれたみたいね。よきかなよきかな」

「何を遣り遂げたような顔をしてやがる。何もしてないだろお前」

一方、正座で湯呑みを手を持つ紫苑はその様をみて満足げに頷き、胡坐をかいているアレスは呆れたように突っ込んだ。

「良いじゃない。あの子の成長を見守る姉のような心持なわけよ、私は……うん美味しい」

「ずず、と湯飲みを啜り目の前に置く。注がれた煎茶は理緒が淹れたものだ。」

「お前みたいなお姉貴が居たら、俺だったら間違いなくグレるね。断言してやろう」

数年来の友人であったかのような会話を交わす二人。事実、紫苑は奇妙なほどにこの紅蓮の髪の風来坊と波長が合った。理由は不明なれども、いずれはつきりさせなければならぬ、と感じてはいる。

「失礼ねえー。この知性溢れてかつ麗しい美貌を誇る姉に対して何を言うのかしら」

「それはいいとして性格が最悪じゃねえか」

「は？」

「とりあえず、善良な人間は、少なくとも自分の事をそんなふうには褒めないな」

「でも貴方は私の言を否定しなかった。認めるのね？」

「……まあ、吝かじゃない」

輝夜が聞いていたら斬りかかってきそうなやり取りだったが、幸か不幸か、彼女はアレシエルと二人でお手玉に興じている。器用

に三個の玉を操る彼女の手際に、アレシエルは関心しきりだった。

片方が軍服でなければ、違和感無く仲の良い友人に見える。

「……やれやれ」

「ん？」

「いや、何だ。つくづく俺は強引な女に縁があるなと思ったただだ」

「何よそれ」

紫苑は無然とした表情で、アレスを小突いた。それは自分が「強引」と、呆れたように評された事に対する抗議だけではない、もっと別の感情が混ざった表情だったが、そこまでしか表情を浮かべる紫苑には解らない。自身の感情を分析できないのは彼女にしてみれば珍しいことで、奇妙な心地の悪さを覚えた。

さながら、自身を内側から焦がす炎のような。知識欲や好奇心を満たそうとする際に燃え上がる灼熱のそれではなく、もっと昏い、どろりとした。

思考中断。自身の内面の探求もまた興味深いことだが、その感情の分類には時間がかかりそうだったから。

「ときに」

代わりに発するのは、いたずらっぽい態度を作つての、もっと現実的な問いだ。

「……私の前の『強引な女』に興味があるんだけど」

「お前ホントに容赦がないな、こればかりは駄目だ。駄目」

問われた側は、げんなり、といった顔。その表情のまま、彼は顔の前で、両手の人差し指をつかってバツを作った。しかしその程度で引き下がる紫苑ではない。さらに笑みの度合いを深め、正座のままずりずりとアレスににじり寄る。

「何か聞かれたくない嫌な思い出があるのね？」

にやりと底意地の悪い笑みを浮かべ、紫苑はアレスの鼻先に、白い指を突きつけた。

「そう思うならほつといてくれ……って、顔が近い」

うなだれるアレス。　ことさら彼は、紫苑の紅い瞳を覗き込まないようにしているように見える。

「いや、ここは何としても聞き出すところよ」

すると紫苑は、正座のままアレスの横に移動するという器用なことをやってのけ、肘でつんつんと彼を突く。

「さー、キリキリ白状しなさい?」

「やっぱお前最ツ悪だよ畜生。　っていうか離れる、おい、だから近い!」

「なによ照れてるの? え?」

こんなやり取りのなかで、紫苑は明確に、楽しさという感情を得ていた。

じゃれ合いと言葉の応酬、今までの人間関係の中では得られなかった体験。　どこか「皇族」と「臣下」をどうしても意識してしまふ人々とは違う、まったく障壁やしがらみのない関係。　すなわちアレス・イエルと御神楽紫苑という個人同士のそれは、今までになかったものだからだ。

「お、お、お、おい貴様あ!」

そこに、こちらを見た輝夜が猛然と割って入ってきた。　息を荒げ、紅潮した顔の彼女は、いつでも抜き放てるとばかりに利き手を刀の柄にかけている。

「紫苑様から離れる、すぐに!」

その鬼気迫る様子がどうにも可笑しくて、紫苑は今にも噴出しそうな表情を隠すのに、うつむくという手段を採った。　そしてその選択は輝夜から彼女の表情を隠すという予定通りの効果を発揮し、予定していなかった作用を引き出す。

「おのれ、紫苑様に何をした!?」

「何もしてねえっていうかこの状況はこいつがだな……」

これは棒読みで「助けて輝夜」とか言うべき状況だろうか、と脳内からの提案を紫苑は吟味し、血を見かねないということ却下。

成り行きを見守ることにした。

「そんな、言葉にできないほど酷いことを!？」

「おま、こら、紫苑、なんとか言え! お前の腰巾着の誤解が酷いことになってきてやがる!」

状況はさらに悪化した。いきり立つ輝夜の腰のうしろから、ひよっこりとアレシエルが顔を出したのだ。

「お兄ちゃん、腐れげどー……」

「お前もかアレシエルそれからお前どこで覚えたってーか笑ってるなってことは解ってるよなお前っ!？」

ちらりと見えた少女の表情は、確かににやにやとした笑みだった。この人見知りの妹は、実際のところそれなりに「子供らしい」性格のようだ、と紫苑は認識を新たにした。心を許した相手に対しては素の性格が出るのだろう。そして子供は純粹で、故に配慮とか容赦とかそういういったものがないものだ。

「よおしガキ共め今すぐ黙らせてやるそこを動くな」

「何だと、やる気か! 丁度手合わせをする機会が欲しかったんだ、表に出ろ!」

「なんだ乗り気じゃねえか、ケツまくって逃げると思ったんだがな。いいだろう……教えてやるよ、格って奴を」

にらみ合ったまま、ずんずんと部屋を出て行く二人。どうでもいいが、あんまり庭を荒らさないでもらいたい、と思う紫苑だった。

第九話 相對者と見守る者

相對し、改めて”敵手”を見据える。熱していた頭が芯の方から冷えていくような感覚を覚えながら、輝夜は袱紗ふくさを解いた。

自らの主たる内親王ないしんのうと客人との、じゃれるようなやり取りに思わず割って入ってから流れは今にして思うと自分でも恥ずかしい。

が、それでこの赤毛の剣士と剣を交える機会を得られたのならば、怪我の功名というべきだろうか。

「さてと」

剣士 アレスが、こちらに声を投げかけてきた。革のベルトに吊られた鉄塊と見紛うほどの大剣を鞘ごと取り外し、手に担う。

なにやら複雑な機構が施されていると思しき柄には、使い手の髪の色と同じく、燃えるような輝きを放つ輝石がはめ込まれていた。

「で、本当に、やんのか？」

発された問いは、挑発めいた確認だった。かねてからこの相對を望んでいた輝夜は、無言で頷き、そして一礼する。

「お願い申す」

「……やけに素直じゃねえか」

アレスは毒気を抜かれたような顔をした。先程までの自分の様子からしたら、これは予想外だったのだろうなあ、と内心で自嘲気じちゆうき味に輝夜は苦笑する。

「実は、かねてより、あなたと手合わせしたいと思っていた」

「ほう」

相手の視線に、こちらを値踏みするようなものが混じった。いま自分は試されているのだ、という実感に身がこわばる。むろん、ここで引くわけにはいかない。

「受けていただけだろうか」

輝夜はアレスの視線を正面から受け止め、真っ直ぐに視線を返しながら、利き手に刀の柄を握り、鞘さやに包まれた切っ先を相手に向け

る。その様子にアレスは何か感じるものがあつたのか頷くと、大剣を己の正面、腹をこちらに向けるようにして、防御の構えをとつた。

「一発打ち込んで来い。それで決める」

その言葉にも、輝夜は走り出さない。かわりに、柄を持つ手を組み替え、両手でそれ担う。

「はッ！」

利き足の踏み込みと共に気合一閃、大上段から斜めに振り下ろされた刀が虚空を切り裂く。刹那遅れて、快音と共にアレスの持つ大剣が震え、彼はわずかに瞠目した。

風が二人の間を吹き抜け、晩秋に紅く色づいた落ち葉を運んでゆく。

「……その歳でそいつを使えるんなら、大したもんだ」

声には楽しげな響き。残心に移りつつあつた輝夜は、剣の陰に見える口元が、笑みを形作っているのを確かに見た。

「あなたの故国にも、この技が？」

「対魔術師の切り札の一つだけあつて、有名な剣豪は、いや、大抵の武器の名人ならその技は使う」

「伝えられる価値のある技は、洋の東西を問わないということか。」

剣聖上泉伊勢守、新当流の塚原土佐守、幕府初代剣指南の柳生但馬守、いずれもこの『無走り』を使いこなしたと

いずれも歴史に名を残す剣豪たちの名前を挙げる輝夜の目には、憧憬の光がある。同時に、自らもいずれ、父や、ひいてはかの大剣豪たちと肩を並べる偉大な剣士となる、そんな幼いが真摯な決意の色もあつた。

「いいぜ」

それらを見て取つたのか、アレスが頷く。輝夜も表情を引き締

め、体勢を残心から再び構えへと移行する。

「付き合つてやるよ」

直後、鈍い刃鳴りが、晩秋の庭園にこだました。

未熟な少女剣士と、練達の赤毛の傭兵ようへいの激突を、紫苑は興味深げに眺めていた。そして思い出すのは自身の過去だ。いつだったかは誘導術式を付与した十二発の魔力弾を、誘導を逆手にとった亡父に事も無げに避けられた。そのほかの亡父の友人達にも、ただの誘導弾は通用などしなかった。つくづく魔導院には人間の皮をかぶった化け物しかない、と今でも思うが、そのあとで移動を制限するような軌道の熱光線を組み合わせる事を思いつき、さらに挙動の異なる何種類かの誘導弾に目くらましの無誘導弾を混ぜ、総発射弾数を十倍に増やすという思い付きを実行に移してからは、彼らが白旗を掲げる番だった。

そんな思い付きをあっさり実行できるあたり殿下の方がよほどバケモンですな、とは亡父の悪友筆頭だった左院別当・弓削鷹亮の弁だ。彼に続いてうんうんと頷き、反則だ何だと抗議を始めたいい年した中年どもをまとめて熱衝撃波で薙ぎ払った遠い日の自分。それができるなら、小細工無用の速く強力な一撃が一番ということがよくわかった。

思い出していて何か疑問を感じなくもなかったが、きつと気のせいだと片付けた。気を取り直して、目の前で繰り広げられている勝負に再び意識を戻す紫苑。

「はああッ!!」

気合の声を上げ、輝夜は八双はっそうの構えで一直線にアレスに向けて打ちかかる。術式に込める魔力は最初から最大だ。走るというよりは跳躍と言える勢いで、右半身向けて振り下ろされた刃を、アレスは左足を軸にした最小限の回転でかわし、その勢いのまま一回転して大剣を振り上げる。斜め下から、着地した輝夜の背を狙っ

た一撃は、輝夜が利き手に刀を持ち替え、空いた右手を地について身を沈めることで空を切った。彼女は地についたその右手を軸にしてアレスの側に向き直ると、脚の勢いで砂利が跳ね上げられる。

「風よッ！」

それを一瞬の風圧でベクトルと速度を与え牽制とし、下方から刀を振り上げた。煌く軌跡は、しかし一步下がったアレスに届かない。

「確かに、速えな」

楽しそうにアレスは口の端を吊り上げる。

「速さは攻防一体、そう教えられた」

バックステップで距離をとって風圧刃を打ち込んでくる輝夜を目で追い、その寸分たがわぬ軌道上に大剣を置いてやりすごす。

「確かにな」

そして返礼とばかりに、彼は大剣を軽々と大上段に振り上げ、虚空を断つように振り下ろした。放たれた、自身のものより数段上の威力に見える風圧刃を、輝夜は受けようとはせずに横っ飛びで回避する。

「あんまりさあ、うちを壊すようなことしないでよね」

「紫苑様、結界を張ってくださいなのですよね？」

「いや、まあ、そうだけど」

呆れ気味の紫苑の言葉に、輝夜はアレスに視線を向けたまま答えた。その間で二人は構えを整え、輝夜は自身の脚の感覚を確かめるように二歩踏み出すと、

「翔べ　　！！」

踏み込もうとする前方に青く輝く格子状の陣が展開され、それを突き抜けた瞬間に彼女は爆発的な加速を行った。

ベクトル付加型の加速術式か、と紫苑はその術式の効果を理解し、輝夜が四肢の防具の術式に魔力を注ぎながらもそれを展開してきた事実、いささかならぬ驚きを得る。紫苑や彼女の父の見立

てでは、輝夜の魔力量は術式構成の才はそれほどでもないという認識がなされていたが、彼女はこうした実戦で伸びる性質なのかもしれない。

「まだ速くなるってか？」

呆れを含んだ声をアレスは漏らす。彼にしてみればその突撃は、軌道がわかりきったものでしかない。反応出来さえすれば、この種の攻撃は少しも脅威にはならないのだ。果たしてそれが、相対する未熟者に理解できるだろうか。

「そいつあ結構なことだが」

自分のすぐ横を、突風の如き勢いで突き抜けていった少女の背に視線を投げかけ、砂利をひとつ投げてやる。背に感じた一瞬の冷たさに輝夜は、半ば強引に姿勢を低く取ろうとして、髪に砂利が絡むのも構わず地面を転がった。これが投刃や苦無ならば、必ず回避しなければいけないものだからだ。

「あんまり退屈させるなよ。さっきから同じ展開だぜ？」

「それは失礼をした」

跳ね起きた輝夜が侘びを入れながら突っ込んでくる。またかとアレスは思ったが、自分から逸れていくような軌道を不自然に感じる。そこで輝夜の姿が一瞬ぶれた。目の前に残ったのは疾駆する姿勢そのままの輝夜の姿。

違う、と直感が警告を発し、彼はその反対方向に大剣を盾とするように構えた。直後金属と金属が触れ合い、甲高い音と共に火花が飛び散る。

「残像か」

呟くアレスの前で輝夜の姿が再びぶれた。背後に現れた殺気を一歩前進してかわし、面倒になってきたアレスは、大剣の鏢つばに埋め込まれた輝石に手を伸ばす。

瞬間、観戦を続けていた紫苑の眼が見開かれた。その輝石の正体を誘った彼女は、愉快そうに笑声を上げ、輝夜の敗北を確信する。「晶石結晶回路！ 単純明快ね、そう来たか！」

アレスの魔力が輝石に流れ込み、内蔵された術式が起動する。

その術は何の工夫もてらいも無い、増幅された魔力の周囲への一斉放出だ。　衝撃をとまなうそれに、輝夜の姿勢が崩れる。

声にならない驚きと共に、たたらを踏んで後ずさる輝夜。　その隙をアレスは見逃さない。　振り向いた彼は意趣返しとばかりに地を蹴って猛進し、輝夜の背後に回りこんだかと思うと

「ひゃあ?!」

思わぬ場所に触感を得た輝夜が素っ頓狂な声を上げた。　脚を内股に曲げてもじもじとしている彼女の背後には、アレスが背中合わせで立っている。

「んっ、何処を、や、触って……!!」

彼はその掌中に収まっているものの感触を吟味するように二・三回揉みしだくと、

「ふん。……薄いが、形はイイな」

しみじみと頷いた。　その背後で、輝夜がへなへなと座り込む。　恥ずかしさと疲労で、その顔は紫苑の瞳のように真っ赤になっていた。

「まあ何だ、気にすんなよ。　まだ十四なんだろう？」

「……どっちの」

ふらふらと立ち上がった輝夜。　うつむき加減の表情は、アレスからは見えないが　肩がわなわなと震えているあたりからして、抱いている感情はよく理解できた。

「どっちの意味だああああ!!」

涙目気味の輝夜の、一瞬で術式の限界を超えた魔力が注ぎ込まれたことによる脅威的な瞬発力での回し蹴りが、アレスの腰をしたたかに捉えたのだった。

「無茶しやがる……大丈夫か？」

「うるさい、この尻男！ 手など借りてやるものかっ」

「そーかい。 初心だねえ」

「うるさい黙れこの馬鹿！ 助平！」

すけへ

強引な超過駆動によって痛む四肢。 気を抜けば崩れそうな体を、
刀を杖代わりにしてやっと支えているという有様で、息も絶え絶え。
おまけに涙目で声は震えている。 説得力がまるでないのを自覚
しつつも、輝夜は強がらずにはいらなかった。

「最後は完全に魔力が術式の許容量を越えてたわ！ ほんと、大
したもののよあなた」

そんなところに、ぱちぱちと拍手をしながら、笑顔の主が近寄っ
てくる。

「いやその紫苑様、私のし、尻の件はどうでもいいのですか!？」

「まあ、それは、うん、一発ぶつ放したから」

訴えかけるような輝夜に苦笑する紫苑。 手が示す先にいるアレ
スは微妙に煤けている。 とりあえずお仕置き一発ということで、
紫苑が火炎弾を打ち込んだ結果だ。

「で……具合は？」

かがみこんでくる主の、こちらを気遣っているはずの表情に、一
瞬だが悪戯な成分が混じった気がして、輝夜は慌てて体勢を立て直
そうとするが手足が動かない。

「どれどれ？」

「えひゃあ!？」

楽しげな声だがその楽しさは自分をからかう時のものだ。 背後
に回りこまれたのに対応する間もなく、つん、と疲労困憊の脚、そ
れも太腿の後側をつつかれ、思わず突飛な声が出てしまう。

「やめてやれよオイ……」

「やーよ、この子なかなかスキ見せないんだもの。 弄れるときに
弄るの!」

赤毛の顔はどことなくげんなりしていた。その静止の声にも主
はかまわず、今度は二の腕を上衣の上からつつかれる。

「うみやあ!?!? ……お、おやめくださ、ひゃあっ!?!?」

「だーめ。ほれほれ力抜きなさい」

背後から聞こえる声は、さらに悪戯っぽさを増したような気がし
た。それと共にさらに容赦のない揉みしだが、輝夜の四肢を襲
う。触られるたびに妙な声が漏れ、逃げ出してしまういたいような
気分には輝夜はなつたが、やはり脚は動かない。

「まったく強情ねえ」

ややあつて、言葉に続いて背中に感じたのは重さと柔らかさ。

事態を理解する間もなく、顔が羞恥しゆうち以外の朱色になるのがわかる。

心臓は早鐘のように高鳴り、これまでの責めの中でもなんとか体
を支えていた手足がわけもなくかたかたと震える。その重さの
ためか、それとも「紫苑様が私の背中にしなだれかかっている」と
いう自身の脳がやつと認識した事実のためか。そんなことを考え
る間もなく、今までは違う場所に手がそえられる感覚。

「し、紫苑様……? あ、そこは」

そこは膝裏。

「ひつどいなあ。超過駆動の影響か余剰魔力漏出のせいか……だ
いぶ痛んでるわね」

ひよいと抱え上げられながら、脚甲のベルト越しにふくらはぎを
揉まれる。どぎまぎとする表情を隠そうと、輝夜は無理やり首を
曲げ、すると紫苑の着物に押し潰されかけた豊かな胸が目に入り、
それはそれで何やら恥ずかしい。

「式がほとんど摩滅して……彫り直さないとダメだわ」

とてつもなく近い距離で、憧れの存在が何やら呟いている。心
臓の音がもつと近くで鳴り響いて、内容はわからない。自分の姿
勢と位置とその相手のことだけを考えて、顔から火が出そうな思
いだ。

「とりあえず、けっこうな魔力量なわけだし。ちゃんとした魔術

の制御法を身につけた方がいいわね、輝夜……おーい聞いてる？」
目の前を肌色をしたものが横切っているが、何がなんだかわからない。

抱き上げるなり眼を白黒とさせた拳句に、頭から湯気を噴出して
人事不省じんじふせいに陥った輝夜。彼女を抱きかかえた紫苑は、アレスと共にそのまま縁側まで歩いてきて、板張りの上に倒れた少女をそっと
置いた。

「ほら、面白いでしょ。茹でたタコかカニみたい」

「お前……酷エな」

げっそりと応じるアレス。紫苑の方はといえば、言い種とは裏腹に優しい表情で、倒れた少女の頭をいとおしげに撫ぜ、ひざの上に乗せた。されるがままの輝夜の表情も、どこか安らいでいるようにアレスには見えた。

「まあ、良かったわ」

「……何がだ？」

呟くような言葉に、赤毛の傭兵は疑問を返した。対する目の前の少女は答える前に、こちらと、隣に座っているアレシエルに視線を送り、最後にまたこちらを真っ直ぐに見つめる。一瞬の逡巡しゆしゆんのあと、彼女は日が傾きかけた空を見上げ、口を開いた。

「この子、ちょっとワケ有りだね……同年代の”友達”が、いないのよ」

その表情と声には自嘲の色が透けて見え、「お前は」というさらなる言葉を押し留める。それでも沈黙から悟ったのか、紫苑はつきりとかぶりを振った。

「私じゃ、ダメなのよ。どうしても、ほら……『姫殿下』と『少

尉』なの。少なくともこの子にとっては。だから良かったな、
って。アレシエルは、この子と友達になれそうだし。アレス
あなたはきつと、この子にとって目指すべきひとつの目標になる」
ちよつと妬けるわ、と笑う彼女の目尻には、僅かに光るものがあ
った。

「私じゃ、三年あつても無理だつただけどね」

「……本当に、そう思うのか？」

つい、口をついて出てしまった。こういう時は下手に喋ると口
クな事にならないのはわかっていただろう、とアレスは内心で自分
の失敗を呪う。それでも言ってしまったものは仕方ないと、アレ
スはさらに言葉を続ける。

「だったら、どうしてこいつは、よりによってお前なんかの側に三
年も居たんだらうな」

はつと、紫苑は顔を上げた。

「……そうだな、俺だったら三日で辞めるな」

「何よそれ」

「お前みてえな滅茶苦茶な奴のお守りなんざ、命令されたって願
い下げだつて事だ」

「じゃあ、どうして……」

「俺に言わせるなよ。柄じゃねえ」

” どうして、私の側に居てくれるのか”

それは当たり前すぎて、思い至らなかつたこと。

「あたしは」

別の方向からの声に向き直る。アレシエルが、不思議と惹き付
けられる紅い瞳で、こちらを見上げていた。

「紫苑お姉ちゃんと輝夜ちゃん、とっても仲良さそうに見えたな。

あたしもそついうの、よくわかんないけど……とっても仲良しの
友達か、うん、お姉ちゃんと妹みたいだった。ちよつと、羨まし
いな」

女友達、或いは姉妹。

自分の記憶の中にある友人関係といえは、

亡父と現在の魔導院首脳陣たちや、自分と焰崎のようなものに限られる。それらと比較検討し自身と輝夜の関係の定義を試みるが、変数が多すぎて上手くいかない。研究書や歴史書ばかりを読んでいたせいだ、と内心で彼女は嘆息した。これからはもっと小説を読もう、とも思う。

「そう言うこつた。お前等二人は、お前が思ってるよりは、多分上手くやってるんだと思うぜ」

「……そうなのかしら？」
「そうだよ」

赤毛の少女が、にっと笑いかけてくる。その表情に、なんとなく安心できるものを覚えた紫苑は、柔らかく微笑み返し、寝息を立て始めた輝夜の艶やかな黒髪を、もうひと撫でした。

そこは、冷たい玉座。

月も星も無い漆黒に、おぼろげな光が点り、ひざまずくひとつの影を照らし出す。

「……やはり、有象無象ウキモノの傭兵どもでは無理か」
「は……」

虚空から投げかけられた声に、影は頭を垂れて応じる。

「とはいえ、面白い事になった。 ” あれ ” と彼女がこうして出逢い、一所に共に在るのなもの」

少女のような幼い声色に矛盾するような、硬い口調。だが自然さは微塵も感じられず、むしろそうであることが自然であるようだった。

「しばらくは観察を続けるとしましょう。その方が、後の楽しみが増すというもの。 たぶん」

「しかし、よろしいのですか？」 あれ」は……」

「劣化複製を繰り返すしか能が無い研究部局の面子など、捨て置けばいいわ」

「は……」

「陛下の最後の命。我々はそれを全霊をもって完遂しなければならぬ。……あなたの働きにも、期待しているわ」

光が消え、あたりには静寂が戻る。

残された影は虚空を見上げ、ひとつ吐息して踵を返し、闇の中へと消えてゆく。

御姉様。

闇の中に、ひとつ声が響いたことには、その闇の主を除いて誰も気付く事はなかった。

第九話 相対者と見守る者（後書き）

ふたりの初の相対でした。 境ホラ風に言うとセ……いや皆まで
言っまい。

バトルは難しいですが書いてて楽しいですね。
こちらでも試験的にルビを増量してみました。 どうでしょう？

第十話 嵐の前の日常

輝夜とアレスの初手合わせから数日。部屋で届いた書簡を整理していた蘇芳すわうは、昨日分の中から気になる一通を見出した。差出人は、二条実篤にじょう さねあつとある。

二条が何の用だろうか、と蘇芳は考える。二条は先ごろからの中立姿勢を放棄し、改革派陣営に加わったので、一応は味方だ。

ところが、現在の御前会議における改革・守旧両派の人数は九対六。摂政任命には三分の二以上の賛成を要するため、これで状況は決しない。

ゆえに、二条が蘇芳に対して恩を売るとしても、あまり値段をつりあげるわけにはいかない状況なのだ。

そんな折の手紙。蘇芳が疑問に思うのも無理はないことなのである。

そしてペーパーナイフを手に封を破り、中身を一読した彼は

唐突な笑いの発作に襲われ、引きつりそうな腹筋を抱えたまましばらくその場から動けなくなってしまったのだった。

その日は木枯らしも落ち着き、京の天蓋てんがいは真っ青に染め上げられていた。つまりは、文句の付けようのない秋晴れの日である。

しかし、都を取り巻く政局は、空模様とは対照的に混迷を極めていた。

守旧、改革派ともに中核は六名。御前会議には現在十五人の成員がいるため、中立といえる三人を取り込み、さらに敵対派閥から

一人を切り崩さなければ、摂政任命は行えない。中立三者のうち一人、二条実篤は旗幟を明らかにしているが、残りの二人、すなわち内大臣・小野宮透と太政大臣・一条兼良だが、これまでは改革派寄りの立場を取ってきていたとはいえ、まだ含みを持たせている。

そうなれば、当然、取り込みのための政治工作が激化する。

老練な九条方は準備に余念がなく、三者どころか改革派方の邸宅にすら、九条の息がかかっている役人や商人たちがしばしば訪ねてくるようになった。

「御前会議とは無関係なはずの私の家にも、九条様方からの進物が多く届いているようです」

そう輝夜が苦笑すると、文庫本をぱたりと閉じた紫苑はやれやれと吐息した。

「まだるっこしいっいたらありやしない。もっと解りやすい手段を使えばいいのに」

「……と、いいますと」

やたら嫌な予感がする。微妙にゆがむ口元を隠そうとするかのように、彼女は目の前のマグカップに手をつけた。砂糖とミルク入りのコーヒーは、最近飲めるようになったのだ。

「仮にも応神貴族。皆、一通りの魔術の心得はあるはずよ」

「は、はあ」

大体予想できてしまった。まったくこの方は血の気が多いんだから、と彼女は白い陶器のカップ越しに、窓の外に遠い視線を投げかける。

その先には光宮の白い壁が、陽の光の下で煌いていた。この素晴らしい白き塔の内側では、黒い陰謀が渦巻いているのだなあ、と考えると、なんとも言えない気分になる。

「だから六対六の集団戦でもやりやあいと思うのよね。政治つてやつは裏から手を回して陰謀だ工作だで後腐れが残りまくるから良くない」

「……一理はあると思いますが」

しかし政治の最高権力の代行者たる摂政という役職を、どちらが強いかなどという次元で決めてしまつてはいかんだらう、と輝夜は思う。政治家には政治家に求められる資質があるはずで、それは魔術師や剣士、軍人に求められるそれとは別のはずだ。

「あんだだけ主張のぶつけ合いして収まりがつかなくかつたんだもの。いつそ殴り合いでもさせたらいいのよホント」

「紫苑様……」

なんでそんな解決策が脳筋風味なのですか、と言つてしまつていいのかと一瞬逡巡して、やめた。

あの一件以来、輝夜は妙にこの主との距離が近づいた気がしていった。それと共に時々、暴言めいた言葉が口をついて出そうになつて困ることも多くなつた。先日尻を触られた時などは完全に主の言を咎めるような言葉を吐いてしまつたし。

そんなようなことを蘇芳に相談したら、「それはツツコミと云うんだ」という返答に、「どんどんやつてやれ、それが紫苑のためにもなる」と励ましまでもつてきた。しかし、輝夜はその「ツツコミ」という単語に心当たりが無く、何だらうと調べてみたならば、意思疎通を円滑にするための、古来より伝わる手段として「ボケ」と「ツツコミ」というものがあるらしい、と判明。うまく作用すれば周囲の雰囲気や和らげる効果もあるのだという。

今度やつてみよう、と思つたがいいが、意識してやろうと思つてもまたこれが難しい。

うまくいかないものだ、と輝夜は思う。この「ツツコミ」を体得すれば、口下手な自分も少しは変われるのかもしれない、と期するところもあるのだが。

話題を変えよう、と彼女は最近同級の女子たちの間で流行している、翻訳小説のことを紫苑に話した。

「白馬の王子様ねえ。ロマンスとかあつちでは言つんだっけ？ あんまり惹かれないわね」

馬車やら、白馬に乗つた王子やら、大きなバラの花束、白く輝く

城の尖塔せんとうやら 輝夜とて年相応の少女であり、そういったものに若干の憧憬しょうけいを抱かないこともない。

しかし紫苑はといえば、応神のそれとはいえ”そういう世界”で生活しているせい、はたまた性格のせい、そんなロマンの要素への憧れが一切無いようだった。

「では、どのようなものがお好みですか」

「そうねえ。最近魔導院が買ったエル・ネルフェリアの双発回転翼式飛空艇、あれはいいわ。私も乗ったことあるけど、あれに乗って異国の王子が迎えに来てくれる、っていうなら大歓迎よ」

「また男子のようなことを……」

言ってから、しまった、と輝夜は思う。ある意味当然のことなのだ、それは。

先代月読宮が亡くなるまで、紫苑はこの屋敷の外に出たことがほとんど無いという。それはつまり、同世代の友人など一人もいなかった、ということの意味しているのだから。

「お父様が好きだったのよね。飛空艇を応神で建造できればいつでも言ってたわ」

紫苑は特段気にした風でもなく、輝夜はほっと心中で胸をなでおろした。

「それはどういう？」

「想像してみなさい。空を飛ぶ乗り物、それも多くの人やものを運べる。それがこの国の各地を結び、ひいては世界と結びつく。

鉄道や自動車どころの騒ぎじゃないわ」

「おお……」

と感心はしてみせるが、いまひとつ実感は湧かない。どうにも自分の考えは地に足がつきすぎているような気がする輝夜なのだった。

「ああそうだ、ちょっと」

立ち上がるように紫苑に促され、肩を押されるようにして彼女は鏡台の前に座らされた。

「久々に髪、梳いてあげる」

鏡にうつる自分の表情が、目に見えて明るくなった。耳もぴこぴこと動いている。それを承諾ととったのか、紫苑は輝夜の髪をポニーテールにまとめているリボンを取り去ると、べっこうの櫛くしを手にした。

櫛が髪の間を通り抜けていく感覚が心地良い。この髪を同級の女子たちから羨ましがられる事もあったが、今度手入れの仕方を聞いてみようか、などと輝夜が思っていると。

「紫苑、入るぞ」

扉を開けて、蘇芳が現れた。

この来訪が、彼女たちにとっての青天の霹靂へきれきだった。

「は？」

紫苑の第一声はそれだった。あまりのことに思考回路が一瞬凍りついてしまったかのようだった。

輝夜も、顔と口とで三つの丸を形作っているのが鏡に映っている。しかし彼女はそれが失礼だと思ったのか、慌てて表情を取り繕つくろった。

「私と、食事？ あの二条が？」

「そうだ。来週末の土曜、新築した貴船きふねの山荘で催す夜会に、お前を招きたいそうだ」

「……本気？」

「私に聞くな」

にべもない返答と裏腹に、蘇芳の表情は笑顔だ。意地の悪そうな。ぶん殴つてやろうかしら、と紫苑は思ったが、それを実行に移す前に一応の常識的対応を取ってみることにした。

「嫌よ。断つて」

紫苑の、二条実篤に対する評価は低い。蘇芳が彼の価値を測りかねていたのに対して、紫苑は初対面の後に”言葉に内実が無いの一言で切つて捨てていた。あらん限りの言葉を尽くして自分の美しさと知性とを褒めちぎられた彼女は、最初の一分間こそ満更でもなかったのだが、それが口を開くたびに飛び出してくるとなると、うんざりを通り越して怒りすら湧いてきたのだ。

「ならん。もう返事を出してしまつたからな」

「……どういうことが、説明してもらえないんでしょうね？」

椅子に座らされていた輝夜がびくりと震える。背後に突然生まれた熱気と、鏡に映る主の表情と、ゆっくりと揺らめく銀色の髪に、彼女は本能的な恐怖を覚えたのだ。

一方で蘇芳は至つて冷静だった。

「二条はいまこちらの陣営にいる。無碍にもできないのだ、機嫌を損ねて九条方に回られでもすれば、それはそれで面倒だ」

もっともらしい理由を、と紫苑は内心で齒軋はしりした。蘇芳の

ことだからもめると理解した上で、その対策までも用意し、そして自分を焚たき付けているのだろう。

「まあ、彼のことだ、きつと贅ぜいを尽くした宴になるだろう。存分に楽しんだ後は、実篤めを適当にあしらうなりしてくるがいいさ」

「それで都に二条が私を招いたつて噂が流れるんでしょう。そうすると、二条家は完全にお兄様の陣営であるということが印象付けられ、一条や小野宮を説得する材料にもなる。九条方への牽制効果も望める。そんなところよね」

「よくわかつたな」

少しも悪びれず、蘇芳はうなづく。鏡越しに蘇芳を睨みつけながら、あからさまな不満を表明する。

「癩かね。この妹ですら、道具として使おうと？」

「お前のような不安定要素の塊が道具になるものか」

兄は妹の抗議をそう一蹴した。

「……何もかもお兄様の思惑通りにゆけばいいのだけれど。仮に二条が既に九条方と通じていて、私を人質に摂政候補から降りるよ
うに迫ってくるかもしれない」

その問いに、一瞬だけ蘇芳は虚を突かれたような顔になったが

「ふ……はは、はははは！」

唐突に、堰を切ったかのように笑声を爆発させた。

「な、何がおかしいのよ」

対する紫苑はやや赤面がちに、戸惑いの表情もありありと、少しだけ上ずった声で問う。それに対する答えは、紫苑をして黙り込んでしまうに十分なものだった。

「どうするも何もだな、万が一そうなたとしてもお前がそんな、人質などという立場に甘んじていられる性格であると、自分で思うか？ 本っ当に思っているのか？」

と、目尻に涙を浮かべてまで言う蘇芳に、紫苑は言葉に詰まり、顔を紅くしてそっぽを向いてしまった。

自分でもそんなに大人しくしているとは思えなかったのだ。実篤を殺しても、きつと自由を手にするに決まっている。

しばしの沈黙。

「……なんなら、代わってあげましようか？ 宣伝効果を期待するなら、お兄様自ら赴いたほうがいいでしょう」

「おいおい……お前は私に女装しろと？」

そっぽを向いたまま発された紫苑の苦し紛れの嫌味に、蘇芳は真顔でそう返した。流石に紫苑も絶句し、どうしていいかわからず兄妹の口論を聞くばかりだった輝夜は、それを想像してしまったのか軽く嘔き出してしまったあと、取り繕うようにきりりと表情を引き締めて鏡に向かっていた。

途中から手元が狂いまくった紫苑の櫛によって、自分の髪の毛がぐしゃぐしゃになっている事には、しばらく彼女は気付かないままだった。

二条院に逗留じゆうりゅうしている赤毛の兄妹は賓客ひんきゃく級の扱いをされていると言つてよかつたが、食事だけは共にしないことになっていた。

そこにはアレスの強い意向があつた。貴族の豪華な食事に舌が慣れてしまうと、あとで困るといふのだ。一理あると紫苑も蘇芳も承服し、兄妹は紫苑や輝夜、あるいは紫苑によつてあてがわれた従者の理緒を伴つて、篝火横丁やその近辺へとよく買い物に出かけていた。

今日の買い物は、南方で産する十数種類の香辛料を混ぜ合わせた粉末と、タマネギなどの野菜類、そして挽肉。香辛料類は輸入品といふことで多少値が張つたが、紫苑から食費として、「お釣りは要らないわよ」といふ有難い言葉と共に毎日手渡される一枚の金子で、十分すぎるほどだつた。

そして帰つてきてみれば、庭先でこの屋敷の主が、妹に組み敷かれていた。

その傍らでは、くしゃくしゃになつた髪にべっこうの櫛が引つかつたままの輝夜が、どうしていいかわからずにおろおろとしていた。

「……何だこりゃ」

「ちじょうのもつれ？」

「お前どこでそんな言葉を覚えた」

目の前の惨状と傍らの妹とで二重の疲労感を覚えていたアレスの存在に気付いたのか、紫苑と蘇芳が揃つてこちらを向く。

「……行つていいか？」

「ちよつと、聞いてよ！」

くいくいと母屋の方向を指差したアレスだが、紫苑がその言葉をさえぎつた。かくて先ほどの離れでのやりとりがアレスにも説明

されたのだが、話を聞き終わった彼は、はあ、と一つ吐息した。

「それで、紫苑様がその、一発殴らせると」

「お前も大変だったなあ」

しみじみと輝夜に頷く。そうしてからアレスは、せえせえと荒い呼吸をしながら、幽鬼のようにゆらりと立ち上がった紫苑を見た。乱れた髪に、薄藍あゐの和装のやや崩れた襟えりからは汗の浮く鎖骨と豊かな胸なまめがのぞくという艶なまめかしい姿が、髪の間から覗く真紅の眼光かれつの苛烈かれつさによる凄絶せいぜつな雰囲気なまめで台無しだった。

「宮さんよお。 やんごとなき事情つてもんもあるんだろうが、あんまりじゃねえか？」

寝転がったままの蘇芳に非難めいた言葉をかければ、「面白そうじゃないか」と答えが返ってくる。直後に紫苑が蹴りつけ、転がって蘇芳はそれをかわした。

「で、聞いちまった俺らだが、口止めとかなしで帰っていいのかわかんないか」と答えが返ってくる。直後に紫苑が蹴りつけ、転がったため息をついてひらひらと手を振った。

「あー良いわよ別に。 みっともないとこ見せちゃったわね」

「申し訳ない、御客人に見苦しいところを。 主に紫苑が」

「原因作つたのは誰よツ!？」

「んじゃ、俺は部屋に戻ってるからな。 兄妹仲良くやってくれ。」

「あー、お前あんまり見るな、ありゃ目の毒だ」

再び紫苑が蘇芳に掴みかかろうとするのを見届けて、その横をアレシエルの手を引いて通り抜け、気のない声で手を振りながら、彼は母屋の引き戸を開いたのだった。

「ったくもっ……」

自室に戻った紫苑は、輝夜の髪をどうにか整えてやって帰したあと、書見台の前の安楽椅子に腰掛けてひとつ大きく伸びをした。すると先程の兄の出来事が何故か思い出される。みっともないところを、と彼女は顔を僅かに紅潮させてかぶりを振った。

部屋の隅の柱時計が指している時刻は六時少し前。夕食まではあと少々というところだが、暇をつぶすための何かを始めるにも少々中途半端な時間ではあった。

どうしようか、と顎あごに手をあてて考えてみても、出てくるのは先程の事ばかり。

「……………ん？」

形のよい鼻が、ひくひくと動く。漂ってくる香りは、市場によく出掛ける彼女にとっては馴染み深い、南方産の香辛料のもの。

馴染みとはいえ、素材の味を活かすことを至上の命題とする応神の調理師達が腕を振るう、この御神楽家の夕餉ゆづげの時間にそれらが使用されることは稀だ。

なら、この香りの出所はどこかしら　と、紫苑は部屋を出て探してみることにしたが、中庭に出ると、その回答がはっきりした。

「アレス？」

「厨房を使わせて貰おうと思ったんだが、こいつの匂いがキツいつて追い出されてなあ」

そう言う赤毛の青年の背後には、湯気を立ち上らせる真鍮しんすうの鍋がある。それが下に敷いているかまどの石も、兄妹が椅子代わりになっている石も、全てどこかで見たような形をしていた。

「それ、うちの庭石……………」

「気にするな気にするな、なんだお前も食いたいのか」

アレスがそう茶化すように言うと、鍋の向こう側に座っていたアレシエルがぱつと顔を上げ、瞳を輝かせて紫苑をじつと見てくる。

紫苑はもはや怒るに怒れず、はあ、と嘆息して両手を挙げてしまった。　全面降伏だった。

肩をすくめながら元は庭石だった椅子に腰を下ろす紫苑。　ひん

やりとした感覚が着物の布地越しに伝わってきて、彼女は一瞬身震いした。

「で、これ何？」

紫苑が指差す先には、鍋のなかで煮え立つ茶褐色の流動体があった。中には挽肉や細かく刻んだ野菜類が見え、香りは何種類もの香辛料のものが混ざり合ったと思しき複雑なもの。紫苑はこれと似た料理を見たことがあったが、名までは知らなかった。

「ヤスバースで教えて貰った料理でな。調合したスパイスを香り付けに使って、バターで炒めた小麦粉と肉やら野菜やら、その場にあるもんを煮込む」

鍋をかき混ぜながら、アレス。その横には、鍋の中の液体と同じ色をした粉末が入った瓶がある。

「こいつが便利なんだ。味も香りも濃いから、振りかけて焼くなり混ぜて煮るなりすれば大概のもんは食えるようになる。ちょうど残り少なくなっちまったから、ここで補充できて助かった」

「ふうん……」

様々な野菜と挽肉の、そして多種多様な香辛料。それらが溶け合い、混ざり合った味を紫苑は想像する事ができなかった。

それからしばらく彼女は鍋のそばに座りこんでアレシエルと話していたが、鍋をかき混ぜたりかまどの火を調節したりと忙しそうにしていたアレスが顔を上げ、紫苑を呼んだ。

「何？」

「お姫さんにこんな事を頼むのもあれだがな。厨房から米を三人分貰ってきてくれるか？炊いてある奴な」

「ええ」

頷いて立ち上がり、去ってゆく紫苑。それからしばらくして、厨房の方角から怒声が聞こえてきたが、アレスは聞かなかつた事にした。

「あーもう」

やれやれ、といった表情で戻ってきた紫苑は、米びつをひとつ抱

えている。大儀そうにそれを置くと、紫苑は再び庭石の椅子に腰を下ろして、満天の星空を見上げた。

この、何処までも続く空の下に広がる大地。生きているうちに自分は一体、そのうちのどれだけを目にし、歩く事ができるのだろうか

目を閉じて想いを馳せていると、アレスに肩を叩かれた。彼が下を指さす先を見てみれば、そこには湯気を立てる木皿があり、紫苑が持ってきた白飯に、先ほどまで鍋の中で煮込まれていたものがかかっている。

「餡かけ炒飯なら食べた事があるけど……これも匙で？」

「本場じゃ手掴みらしいがな。ま、これでも使え」

アレスが紫苑に手渡したのは、手製と思しき木製の匙さじ。

「ありがとう。でも、あなたのは？」

「俺は本場の食べ方でやってみるさ」

そう言うと、アレスは皿の上のものを手で掴んで食べ始めた。その横でアレシエルは、片手に皿、もう片方に匙を持って夢中で料理を口に運んでいる。

紫苑はしばらくその光景と、自分の皿と木匙とを見比べていたが、やがて彼女は木匙を置き、皿の上のそれを手で掴んだ。ぬるりとした液体の感触と、熱さが指先を包む。

「おい」

アレスが目を丸くするが、紫苑は平然としている。

「いいのよ。私がやりたくてやっている事だもの」

そう言うと、紫苑は澄ました姿勢で料理を口に運んで、しばらく口を動かしていたが、突然、ごほごほと激しく咳き込んだ。

喉を押さえ、銀系のような髪を振り乱して、まるで重病人のようなありさまに、さすがにアレスも心配になったようだ。

「おい、大丈夫かよ？」

アレスが背中をさすってやると、ようやく落ち着いた紫苑は顔を上げ、目に涙を浮かべて苦笑した。

「これ、すごい辛いよね……」

「無茶しやがって……」

アレスもまた苦笑を返し、アレシエルがにこにこことそれを見ている。

二九九八年十一月二十日。皇国は、いまだ表向きは平穩のうちにあつたのだつた。

第十話 嵐の前の日常（後書き）

レビューしていただいたのに新作を上げないわけにはと突貫工事
でした。

誤字脱字が不安……。

…。
11話もできあがってますが、12話ができてから投稿したい…

推敲してるときに、話をまたいでシーンを前後させることもある
ので。

でもあんまり間が空きすぎるのもアレなので、難しいところです。

第十一話 過去の扉

二十七日、午前。

「うーん……」

輝夜は二条院への道を急いでいた。紫苑が貴船山に出かけているのに何故かと言えば、蘇芳との約束があるからだ。

輝夜は魔術師を相手に戦った経験がほとんどない。紫苑との訓練は”戦闘”とは少し違う気がしていたのだが、戦闘訓練を受けている魔術師など今や禁軍くらいしかおらず、機会がないのだ。

そこで彼女には珍しく、いわゆるコネを使うことを思いついた。

具体的には紫苑か蘇芳に、禁軍の魔術師を誰か紹介してもらおうというものだ。

そのことを紫苑と蘇芳に話したのが数日前。すると蘇芳が、「ならば私が相手をしようか」と言い出したのだ。

輝夜はうるたえた。紫苑はフランク過ぎてあまり意識しなくなくなってしまったが、蘇芳はれっきとした宮家当主。正直恐れ多いにも程があつたが断るのも失礼に当たりそうで、尻尾を垂らして言いよんでいると、蘇芳はダメ押しとばかりに薄い笑顔で、

「私では、不服か？」

折れた。その時には紫苑は「軽い脅迫よね今の」と言ったものだ。蘇芳としてはこの状況で禁軍の人員を自邸に呼びつけるなどということをしては、相手陣営へ攻撃の材料を与えかねないという思惑があつたのだが、輝夜は知るべくもない。

ともあれ、紫苑以外の魔術師と手合いをする機会は何も得られなかったこと、その点彼女に不満はなかった。うっかり怪我でもさせてしまったら私どうなるんだろうとは思わなくもなかったが。

ああでも、私の腕では無理だろうな。うん。

平静を取り戻すためにそんな結論を脳内で導いた後は、軽くへこ

んだものだったが、その点は解決しているのだ。

では何故唸っているのかというと、最近抱き始めた悩みのためだった。

「何のため、か……」

それは、自身が剣を振るう意味についてのこと。そんなことを気にするようになったのは、つい先日読んだ小説の一節が、自分の中で引つかりを生んだからだ。

“ 目的なく振るわれる力は、ただの兇器だ ”

……そんな事を言いながら発言した本人は「汝ら咎人なり！」とか叫びつつ二丁ライフルでドツカンドツカんだたなあ。これ確かエル・ネルフェリアの小説の翻訳だったはずだがエル・ネルフェリアという国は一体どんな国なのだろうか などと色々” ツツコミ ” の練習も兼ねて読んでいったのだが、その一言だけは明確に心に刻まれたのだった。

自分にはつきりと、強くなりたいと望んでいる。それは明らか。しかし、そうして何を成すか？ それが今の自分には無いように、輝夜は思えた。

だとすれば自分の剣は、兇器にかなりえないのではないか
そう思うと鍛錬にも身が入らない。今朝の乱取りなどは藤田師範代どころか門下生相手に負けがつき、心配されたほどだった。

紫苑のことは個人的に慕ってはいるし、これから先も懇意にしていければと思う。しかし、当面の身の置き場として、彼女の護衛という地位を特例として与えられているものの、これは自身が正式に任官するまでの間に合わせだろうな、と輝夜は思っている。

冴月家の家督を外されたとき、自分はあからさまに塞ぎ込んだ。そんな自分をなだめるための間に合わせだ、と。もちろん、そのおかげで御神楽紫苑という人と会えたのだから、悪いことだったとは思ってはいない。

しかし、それは将来とは別だ。皇国の軍人になるのか？ それとも、また別の

考えている間に、二条院の正門前にたどり着いてしまつた。
やれやれ、とかぶりを振って、彼女は大きな門をくぐつたのだつた。

「……こんなものか。これで終了としよう」

簡素な平服の蘇芳が、体の具合を確かめるように首と肩を動かして、言った。

「ありがとうございます」

「なに、私も少しは訓練をしなければと思つていたところなのだ。なにかと剣呑ゆえな」

「確かに……」

蘇芳の実力は確かなもので、輝夜としては大いに学ぶところがあつた。稽古だつた。が、やはり「なんのために」という疑問がつきまとう。

「しかし、少々精彩を欠いたように思えたが」

「だな。キレが無かつた」

縁側には赤毛の兄妹も腰掛けている。彼らは見学だつた。

蘇芳とアレス、この二人に見事に自身の迷いを見透かされていたことに気づき、輝夜は知らず赤面する。

「ええと……その、はい。少し、悩みが」

「ま、そういう年頃だよなあ」

納得したように頷くアレス。その隣でアレスエルもうんうんと頷いている。

「いやいや、私とそう変わらんだろアレスエル？」

「あたしに悩みはないよ！」

「おまえが私にはよくわからん……」

元氣良く手を上げる彼女に若干げんなりしつつ、輝夜は一旦脱力してしまつた表情を引き締めた。

「まずは仕上げとして、いくつか試問とゆこう。紫苑から魔術のことに關しては色々教わつたと思うが、魔術とは何を媒介として発動するものだ？」

「視線と、言霊です」

「その通りだ。思ったよりしつかり教えているのだな、あれは」「せんせーい」

そこで、他方から声がかかる。間延びした声で、茶化すような呼びかけを放つてきたのはアレスだ。

「じゃあ何か、視界内に居たらダメってことか？」

「そうとも限らん。自分から離れるほど術式の構築も制御も難しくなる。私はそうだな、ここから十米先^{メートル}を起点として爆発を起すのに五秒程度は集中せねばならん。使い物にならんだろう？」

紫苑は何のこともなく指定範囲の結界隔離や、起点指定型の爆発魔術を使いこなすが、あれは例外中の例外だ」

「自身の手元で発生させる、射撃型の魔術が好まれるのには、そういった理由があるのですね」

得心したように輝夜は頷いた。彼女は紫苑の腕前をあまりに見慣れているため、ふつ々の魔術師のこととなるととんと疎いのだ。

「そうだ。つまり、並の相手なら基本的には銃使いとあまり変わらぬわけだ。狙いを乱す、単調な動きをしない、そういったことが重要になる。故に魔術師が近接戦闘をする際は、即応性に優れる符を多用する」

そこで、アレスがふたたび口を開く。

「並みじゃなかったらどうすんだ。例えば紫苑を相手にするとしたら？」

「まず逃げることだ。捕捉されたら助からん」

肩をすくめ、蘇芳。

「身も蓋もない……。それほどなのですか、紫苑様は？」

「素質で言えば皇国最高だろう。 戦闘経験に乏しいところを差し引いても、魔導院の上位陣と肩を並べるだろうな」

「……でも、見えてなかったら？」

湯呑みを手に、アレシエルが兄の方を見て言う。

「それなら行けるかもしれないねえな。 どうなんだ、宮さん？」

「確かに、視線が向いていなければ魔術は撃てん。 狙撃や闇討ちは有効な手段だが、腕の良い魔術師というのは感覚の鋭さも相当なものだ。 それに結界というものもある、言うほど簡単ではなからう。 ときに……先ほど言った、”逃げる”。 どうすればいいと思う」

「一目散に」

「拳動が丸解りだな。 紫苑相手ならば、逃げていると思ったら燃えていた、となりかねん」

「視線をズラす？」

「そうだ。 視界内に居るということと、視線が向いているというのは違う」

「なるほど……」

頷き、服の埃を払って輝夜は縁側に腰掛ける。

「それにしても蘇芳様、そんなにお強いのに、何故、魔道ではなく政の道に……？」

失礼かもしれない、と思わなくもなかったが、彼女はその理由に興味が湧いていたのだ。 蘇芳も御神楽の一族であり、秘めている資質は素晴らしいものがあるはずなのだ。 「禁軍」においても、十分に大成できるだけの。 部屋に戻ると一言断って去ってゆくアレスたち兄妹に頭を下げて、輝夜は答えを待った。

「……それは、悩みに関係することかな」

蘇芳の視線は優しい。 この家の人々は皆自分に良くしてくれる、と輝夜は思う。 その優しさに甘えてしまってもいいのだろうか、と躊躇しなくもなかったが、輝夜は、はい、と頷いた。

「むろん、父の後継を目指していた頃もあった。 紫苑が生まれて

諦めたがね」

問いに対して、笑いながら蘇芳が言った言葉は、それは輝夜からすれば意外であり、またさらに興味を惹かれるものだった。

「……なぜですか？」

「わかっているだろう、あれは天才だ、力の面でも技の面でもな。父の血を引いているとはいえ、私ごときが精進して、埋められる差ではないと、すぐに理解できた」

自嘲するでもなく、何のことは無いかのように言う蘇芳。しかし、輝夜には何故そう割り切れるのかがわからなかった。

「納得できない、という顔だな」

「すみません」

「なにを謝ることがある。私も政治家という道を志していなければどうしていたか」

そう蘇芳は笑う。そして輝夜の横に座り、どこか遠くを見るような目をしながら続ける。

「あれにも、随分辛く当たったこともあった……」

輝夜の中で常に引かかっている紫苑の境遇にも、関係することなのだろうか。その横顔をしげしげと見つめる輝夜。と、蘇芳はくるりと向き直り、真つ向からその視線を見据えてきた。

「輝夜よ。知りたいか？」

蘇芳の瞳に映る自分の藤色の瞳が、はっと見開かれるのを輝夜は見た。

月読宮は続ける。

「個人的な思いだが、私は、お前には紫苑のそばに在って欲しいと思っっている。故に、お前が望むならば、教えよう」

全てのはじまり。紫苑が生まれた日、何があったのか。

そのしばらく前の紫苑はといえば、迎への馬車に乗せられて、貴船山へと向かっていた。

彼女の身を包むのは、髪上げの儀を行った時に仕立てられた、白い布地に随所に金銀で刺繍がほどこされた豪華な振袖だ。さらに御神楽家の紋入りの扇を携えて、首元には御神楽家伝来の大きな青玉が輝く精緻な装飾が施された白金の首飾りをかけている。

豪華極まる出で立ちだが、紫苑にしてみれば「重い」という感想が真っ先に上がるのだった。その優美な外見は気に入っではいるものの。

そんな窮屈な装束に包まれながら、紫苑はがたごとと揺れる馬車の中にいる。窓の外には、貴船の山地に広がる、そろそろ葉が落ち切りそうな広葉樹の森。木々の梢の合間からは、白い壁と群青色の尖った屋根が見える。エル・ネルフェリアに行った際によく見た形式だ。白い壁は高空に位置するがゆえの強い日差しに抗するためのもの。青い屋根は空の色を映したものだどユリウスから聞いたことを、紫苑は思い出した。

視線の先の山荘は、秋晴れの中で確かに白い壁面と群青の破風を輝せていたが、周囲にある裸の木々との取り合わせに違和感があった。その有様が、なんとなく山荘の主の人格と重なるような気がして、紫苑は元々良くはない気分がさらに沈むのを感じた。

それは、馬車が屋敷の門をくぐるとさらに深刻になった。同乗している女性の世話係が、建物と庭園の設計は実篤自らが行ったものだという解説をしてくれたのだが、当の庭園は応神の自然美を生かしたものとも、西方諸国の幾何学的な美しさを求めたものともつかない、奇妙な様相を呈していたからだ。

紫苑は造園に詳しいわけではないが、それでも違和感を覚える。

先ほどから左右に連なる松の並木などは、一種悪夢的でした。のたうつように伸びた枝葉を茂らす松が、しかし規則的な

配列を形作っているのだ。各所に配置された彫像、中央の噴水も、どこかしらに不快感をもよおす何かを感じられる。

実篤のことを、今まではただの道化者かと思っていた。蘇芳は道化か、道化の振りをした切れ者か、掴みかねていた。この矛盾した要素を詰め込んだ庭園を設計したという人間は、恐らくそのどちらでもない。

「……天才、あるいは狂人、か」

世話係に聞こえないように呟くと、紫苑は表情を引き締め、心中を切り替えた。

「二条殿は……使用人のあなたから見て、どのようなお方？」

笑顔を作って、そう問いかける。

「よい方ですよ。私のような者にもよくしてくださいませ」

まあ、客の前で主人を悪く言えるわけもないな、と紫苑は質問を変える。

「そうね。昨今の皇国について、二条殿はどう思ってたらしやるのかしら」

言葉を発してから直球過ぎたかと後悔したが、幸いにして相手は口を開いてくれた。

「月読宮様に基本的には賛成でいらつしやいます。ほかに、実篤様は女性の地位の向上に心を砕かれていらつしやいます」

ふむ、と紫苑は内心で首をかしげた。応神という国は、魔術師として比較的多くの女性が要職に就いている国だ。現在の体制の基礎を構築し、魔術の研究も精力的に行った先代光皇によって、女性の方が強い魔力を持ちやすいという知見も出ており、結果魔導院の人員の半数は女性である。それ故に魔術師以外の職でも女性が就くことが最近は多くなった、と亡父が言っていた。では、実篤が言う「立場の向上」とは、一体どのようなことを指すのか？

たとえば公卿には女性くきょうが一人もいない。これは任命を行う際にたびたび保守派の横槍が入るせいだという人もいるし、武家社会の名残という人もいる。女性光皇の例は歴史上に何度かあるが、

その際には摂関ないしは太政大臣が政務の大部分を執り行ってきた。

実篤の志向は、よもやそういう方向なのではないか。

そう考えると、私がここに招かれた理由というのは……紫苑は空恐ろしい可能性に思い至り、知らず身震いした。

やがて馬車は目的地にたどりつき、別荘と言うには規模が大きな邸宅の玄関にて、紫苑は彼女の感覚からすれば過剰にも程があるような出迎えを受けた。

馬車の扉を開けてみれば足元には館の玄関まで赤い絨毯が敷かれ、そばにはゆつたりとしたローブと羽飾りのついた帽子を身につけた実篤が立っている。絨毯の両脇には皇国軍服に似せた作りの一式を来た一隊が整列し、陽光を受けて輝くレイピアを彼女に奉じていた。

「ようこそ、我が城へ！」

うへえ、と紫苑が内心でうんざりしながら馬車から降りると、楽隊がトランペットを盛大に吹き鳴らし、紙吹雪が舞った。あたりの森から、驚いた鳥たちが飛び去っていく。

「殿下のような美しく聡明な方を、この別荘のはじめての賓客として迎えられるとは。臣としては喜悦の極みにございます」

この空間の主が帽子を取って一礼しながら発した言葉は、相変わらず装飾過剰だった。

一体この演出にいくらかけたんだか、と皮肉っぽく思考しつつ、紫苑は笑顔と共に形式通りのねぎらいの言葉を実篤にかける。

「盛大な出迎え、大儀でした。相公（参議の別名）、本日の招待に感謝を」

「おお……！ その天上の美をたたえる微笑と御声を、この場においては、臣のみが賜れるのですな！ この二条実篤、感動を抑えることができませぬ！」

果たしてどこまで本気で言っているのだろうか。　　いつそ全て社交辞令ならば気が楽だが、そうだとしたら流石に度が過ぎている、

と紫苑は思う。本気が混じっているとすれば、それはそれで嫌なものだ。

「ささ、中へどうぞ！今日はごゆっくりお楽しみくださいませ」芝居がかつた動作で重厚な造りの玄関を指し示す実篤。その熱っぽい視線に辟易へきえきしながら、紫苑は赤絨毯の上を玄関向けて歩き出すのだった。

「此度の争いは、宮中を二分することになります……これが最後になりましょう」

宴が始まってしばらくした頃。山海の珍味が二人の前に並べられ、西方風の楽団が一人しか居ない賓客のために音楽を奏でる中、実篤はそう切り出した。

「ですがこの激動の時代に、皇国はいま今上きんじょう陛下という英明なる君主を喪いつつあり、そして後を継ぐべき直系しんけいの親王殿下しんのうらはいずれも幼い」

政治の話は面倒だ。実篤はまだ事実しか示していないが、それを越えて自身の見解を述べてしまえば、それはそのまま自分の政治的立場へと反映される。まして自分は、本当に面倒なことに、皇位継承権四位を持つ皇族なのだから。そう紫苑は鴨かものローストを口に運びながら思考する。

……あ、美味しいわね、これ。一緒に供されている葡萄酒ぶどう酒もかなり良いもので、この点に関しては来て良かったかもしれない、と彼女は思う。

さて、ここで拒絶すればこの話題を中断することはできるかもしれない。とはいえ、それは狙いに反することだ。故に紫苑は言葉を選び、葡萄酒の入ったグラスを手にとりながら、まずは常識的

な見解を口にする。

「そのための撰関職でありましょう。過去、先帝が崩御なされた後、後を継ぐべき東宮とうきゆうが幼かったこと、事例はあまた存在します。

この度もまた、そのようにすればよいのではありませんか」

「確かに月読宮様は将来を嘱望される、よき政治家でいらつしやる撰関、すなわち撰政・関白かんぱくの存在を示した紫苑に対して、実篤は蘇芳の存在だけを例示した。つまりは、蘇芳の政敵たる泰華宮たいかのみやを既に認めていないと示唆したのである。本心はともかく。

「ですが、撰政とは我ら公卿だけでなく、臣民すべてを導かねばならぬ立場。そうなるると蘇芳様の力量は、また未知数ですな……ああいえ、含むところがあるわけではありませんぞ」

「そうね、兄は容姿もそこそこ、弁も立つ。ああ、でも本人が先日、『私は黒幕のほうが好きだ』などと申しておりましたわ」

「情勢がそれを許さぬのは皮肉なものですなあ……」
ふん、と紫苑は少し考えた。この男は自身の兄と一応は陣営を同じくしていたはずだ。こちらで少し、自分自身のものを出しても良いだろう。

「泰華宮殿は、左府殿の娘御を妻にお持ちでしたね」

しかし、仮に実篤に二心があつた場合のことを考え、明確な言質は与えないように気を使う。自分らしくないと思いつつもそうするのは、迂遠であることがこの場合は自身を護ることに繋がるからだ。

「さよう、後ろ楯は万全ですな。しかし泰華宮様には政せいに携たづなわられた経験がなく、そのための教育も受けていらつしやらない」

実篤も乗ってきた。しばしば自身に向けられたやたらとあけすけな美辞麗句びじれいきうの数々が成りを潜めていることを、若干不思議に思わないではない紫苑だったが、やはり相応にしたたかな男だったのかもしれない、と実篤についての評価を改めることを検討する。

「右も左もわからぬ者が、まず頼るのは身内でしょう」

「そういえば、九条殿はかの藤氏の未裔まっえいでしたな」

およそ千年前、自身の娘を光皇に嫁がせて外戚がいせきとなることにより、この皇国のほぼすべての官職を自身の一族で占めてのけた氏族があった。実篤がその名を出すということは、九条の狙いがそこにあるのだと彼は睨にらんでいる、ということを示唆している。

「二条殿とてそうでありましょう。結局は、志ひとつということですよ」

「違いありませんなあ」

この話題はここで終了だろう。紫苑はそこで、彼の言葉の中にあつた引っかけりを突くことにした。

「ところで、二条殿は先ほど、兄の摂政としての資質にも疑問を呈されましたね。あれは何か、思うところがあつてのことですか？」
あえて直球を投げた。ここで乗ってくればよし、と紫苑は次の言葉を聞き漏らすまいと集中する。恐らくは紫苑が想像する通りのことを実篤は胸に秘めており、それを開陳かいちんするために彼女をここに招いたのだろうから。

「ふむ。実を申しますと……私は日頃、女性にこそ、人々を導く生来の資質があると思つていのです」

そら来た、と紫苑は内心で指を鳴らした。

「元来、女性は太陽でありました。我らが皇国の始祖たる天照大神あまてらすおほみかみは女性の神格であることは、皇国臣民の誰もが知つております」

そして紫苑も知つている。そんな知識を今この場で、しかもしたり顔でひけらかすという事は、これを踏まえて何か言いたいことがあるということだ。

「しかし、開闢かいびやく以来、女性の光皇や公卿が在つた例というのはあまりにも少ない」

「そうですね。特に自らの身を武器として戦わねばならぬ武家は、必然的に男系長子相続が慣習となつた」

適当な応答をして、葡萄酒を一口。

「さすが、教養豊かですらうしやる。牙月中将殿やえつきの娘御も、その慣習がもとで大変な思いをされたようだ」

びく、と紫苑の眉が動いた。ここで輝夜の名を出すか、と感情が理性を煽り、心にさざなみを立てる。

「それで」

ゆえに、彼女はひとつ釣り餌を実篤の前にぶらさげてみることにした。

「皇位継承権四位をもつ、内親王の私を、ここに招いた意図は奈辺なへんにあるのです？」

妖しい笑みを作りながら、実篤に横目で視線を送る。

「……私を政治の表舞台に立たせようというのですか？」

「さすが、御明察。 ですが私はそれ以上のことを考えているのです」

本当に言った、と内心の驚きを隠しきれずに一瞬絶句した紫苑をよそに、実篤は自らの理想を熱く語り始める。

「内親王殿下、貴女ならば皇国史上、最高の女皇となれましょう」

こんな驚くべき言葉から始まった、演説めいた主張は、しかし紫苑からすれば迷惑極まりないものだった。

光皇はこの国における最高権力者であり、最高の権威者。 かつてのルテティア王ルイ十四世の言葉、”朕ちんは国家なり也”をまさに体現する存在だ。

しかし、絶大な権勢には途方も無い重さの責任も伴う。 紫苑にしてみれば、そんなことは真つ平御免だ。 幸い自分より順位が上の継承権者が三人もいるのだから、そんな重責は適当なところに押し付けて、自分は自分自身の生を謳歌おつかしたい、そんなところが彼女の本音なのだ。

父の遺言も、そうだった。

「そして私は、栄耀えいようを極めんとする皇国を導く新たな女神たる貴女のもとで、摂政として直にあなたを補佐したまい、その御声を聴き、その御命を承るといふ最高の榮譽に浴すのです……！」

それにしても、この男の変わりようはなんだ、と紫苑は思う。

先ほどまでの迂遠な会話と正逆に、今の彼は本音しか口にしてい

ないかのようだ。

彼の中で何かが切り替わったとしても言うのだろうか。その二面性こそが、館や庭園を見て感じたものの正体なのだろうか。否、そんなことに気を取られている場合ではない、と紫苑は思考を引き戻した。

失策だった。あからさま過ぎる餌に、よもや釣られはしないだろうと彼女は思っていたが、実篤はあっさり釣られてみせ、さらにこちらを完全に巻き込みに来たのだ。

ある種彼にとっても賭けなのかもしれない。その言葉に込められた熱意は常軌を逸したレベルで本物だ。その主張は、紫苑に二人の幼い親王と兄を弑逆せよと言っているようなものだから。

後戻りはできなくなってしまった。紫苑が取れる選択肢はふたつ、ここで実篤の罪を鳴らし、大逆を企てた罪人として誅殺するか、いつそ乗せられて光皇になってしまおうか。後者は自動的却下モノだが。

「無謀、無為、そう言いたげな顔をしていらっしやいますな。狂った、とお思いになっているのですかな。確かに私は狂っているやもしれませぬ。しかし、殿下、貴女さえその気になれば、私の夢は実現する。故にこうして私は賭けに出ているのですよ」

「……どういう、事？」

今すぐ紫苑を押し立てて反乱を起こして、勝てる。そう、実篤は言っているのだ。紫苑は最早この男の正気を完全に疑っていたが、その根拠は気になった。

実篤は両手を大きく広げ、朗々と宣言する。

「殿下の真なる御力をもってすれば！ 今上陛下であろうと、禁軍”であるうと、たとえ皇国全軍が、いや、世界が敵に回ろうとも！」

もの数ではないのですよ。

言葉と共に、世界がぐにやりと歪むのを紫苑は感じた。

迂闊、この馬鹿、と内心で自分自身を罵る。はじめからその気だったと言うのなら、強力な魔術師である自分を無力化するための策の一つや二つ、仕掛けていないはずがなかったのだ。料理か、葡萄酒か、あるいはその両方かに薬が盛られていたのだろう。

「二条……さね、あつ……!!」

椅子の肘掛ひじかけを掴んで闇に溶けてゆく意識を懸命けんめいに保とうとしながら、紫苑の紅い双眸あかそうぼうは実篤をきつと睨みつける。ところが、しばらく出した言葉は、

「あなたは……私の、何を知って……」

断罪のそれでも怨嗟えんさのそれでもなく、むしろ求めるためのもので

「教え……て、私は　私は、誰なの……」

懸命に、実篤の方へと伸ばした手は、

「私は、何、なの……!?!」

取られることなく、卓の上へとぱたりと落ちたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3454w/>

神々の庭のクロニクル

2011年10月9日03時16分発行